12　9区

(1)　土層と遺物出土状況（第70図）

岩盤は奥壁から川に向かい傾斜し、奥壁から4.4mの地点で平坦になる。この平坦面が旧河道の底になると思われる。標高は奥壁が160.4m、旧河道の底が158.7mである。岩体は奥壁から上方に立ち上がり、岩盤から約2.5m上方で斜めに向きをかえる。雨落ち線は奥壁から約3.0mで、雨落ち線の外側にも多くの遺物が分布する。

本調査区の層位について述べる。撹乱層のⅠ層は奥壁近くと調査区東端部が厚い。撹乱のためかⅡ1層はみられず、Ⅰ層の下はⅡ2層となる。Ⅱ2層中に焼土13がみられる。焼土13は、径0.2m、厚さ数cmと小規模である。Ⅱ2層は焼土面を境に上下に分けられ、上層をa層、下層をb層とする。この状況は8区と同様である。Ⅱ3層、Ⅱ4層はなく、Ⅱ2層の下は河川堆積層のⅣ層となる。奥壁近くまでⅣ層が広がることから、旧河道が機能していた縄文時代後期前半までは、奥壁までが河道域になっていたため生活空間として利用されていない。

遺物の平面的な分布をみてみると、奥壁に近い部分は溝による撹乱があるが、大きく奥壁に近い部分（後期集中部①）と調査区東側（後期集中部②）の2箇所に、遺物の集中する箇所があることが分かる。隣接する8区と10区の状況を見た時に、後期集中部①は8区と10区に広がりをもつことが確認できる。また、後期集中部②は9区に中心があるようにみえる。なお、焼土13は後期集中部①に伴う。

(2)　遺物

Ⅰ層（第71図848～871、第74図937、938）

848、849は弥生時代早期の刻目突帯文甕。850～855は縄文時代晩期前半の深鉢で、口縁部外面に沈線文が施される。855は縦方向の沈線もみられる。口縁部が長く伸び、沈線が細くなることから、これらは坂口式に後出する。857、858は同時期の浅鉢である。856は後期の西平式である。859～866は無文の深鉢で、後晩期の所産であろう。867は口縁端部外面に疑似縄文を施すもので、後期石町式。868は深鉢胴部である。869～871は底部である。

石器は、937が泥岩製の石鏃未製品か。938は姫島産黒曜石製の石錐である。

Ⅱ2a層

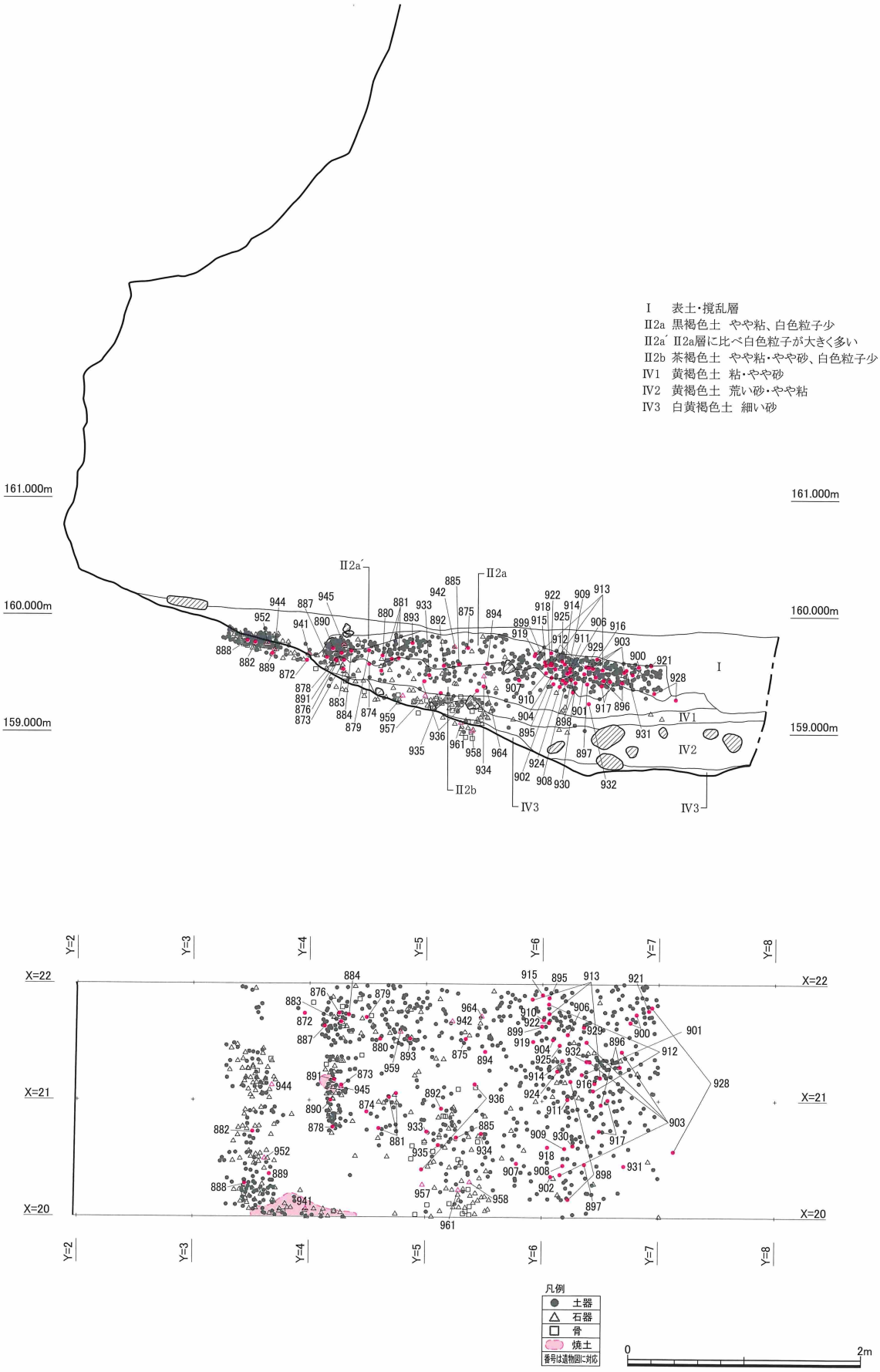
後期集中部①（第71図872～877、第72図878～894、第75図939～954）

872は太い工具により口縁部を刻むもので後期初。873は沈線と縄文が施されるもので、後期前半。874は鐘崎式。875～877は口縁部外面に横走沈線や渦巻文がみられる。878～881は深鉢胴部である。878は頸部立ち上り部に縄文と沈線による文様がみられる。879と880は頸部無文で胴部に疑似縄文が施される。881は小型品で外面に縄文が施される。882と883は口縁部が断面三角形に肥厚し外面に刻みを施す。882には焼成後の穿孔がある。884～889は無文土器で、885は口縁部外面を肥厚させ口縁帯を形成する。890は口縁部外面に疑似縄文がみられる。891は外面に突起が付く。892～894は平底の底部。875～894は後期石町式古相に比定できよう。

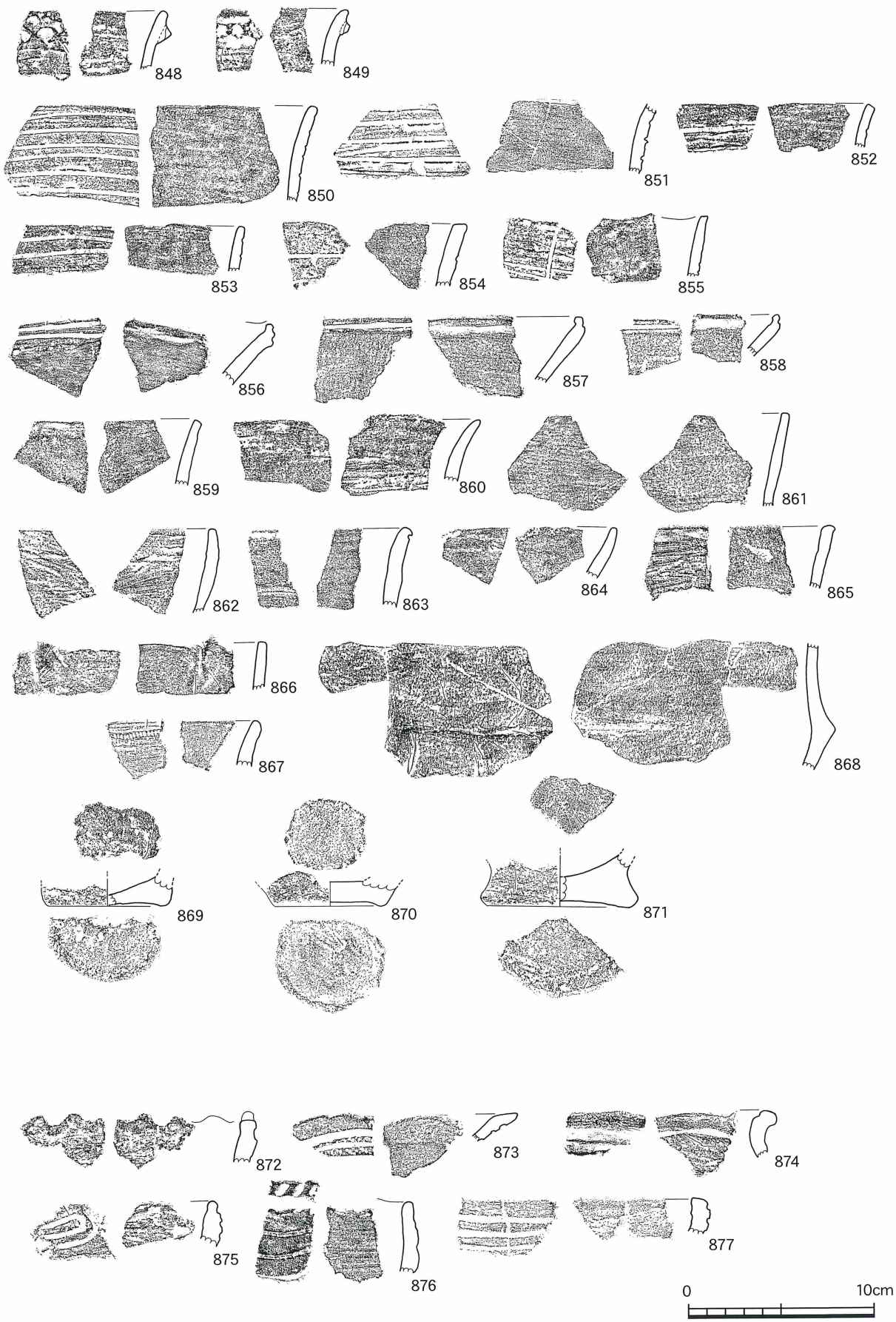
石器は939～954の石鏃16本で、サヌカイト製の942と西北九州産黒曜石製の954を除き姫島産黒曜石製である。形態的にはⅠ類（正三角形状）、Ⅱ類（二等辺三角形状）、Ⅲ類（五角形状）があり、Ⅱ類が多い。Ⅲ類については晩期に比べ長さが短い。また、基部の抉りについては、低い三角形状に抉るもの（939～948）が多い。

後期集中部②（第72図895～900、第73図901～927、第74図928～931）

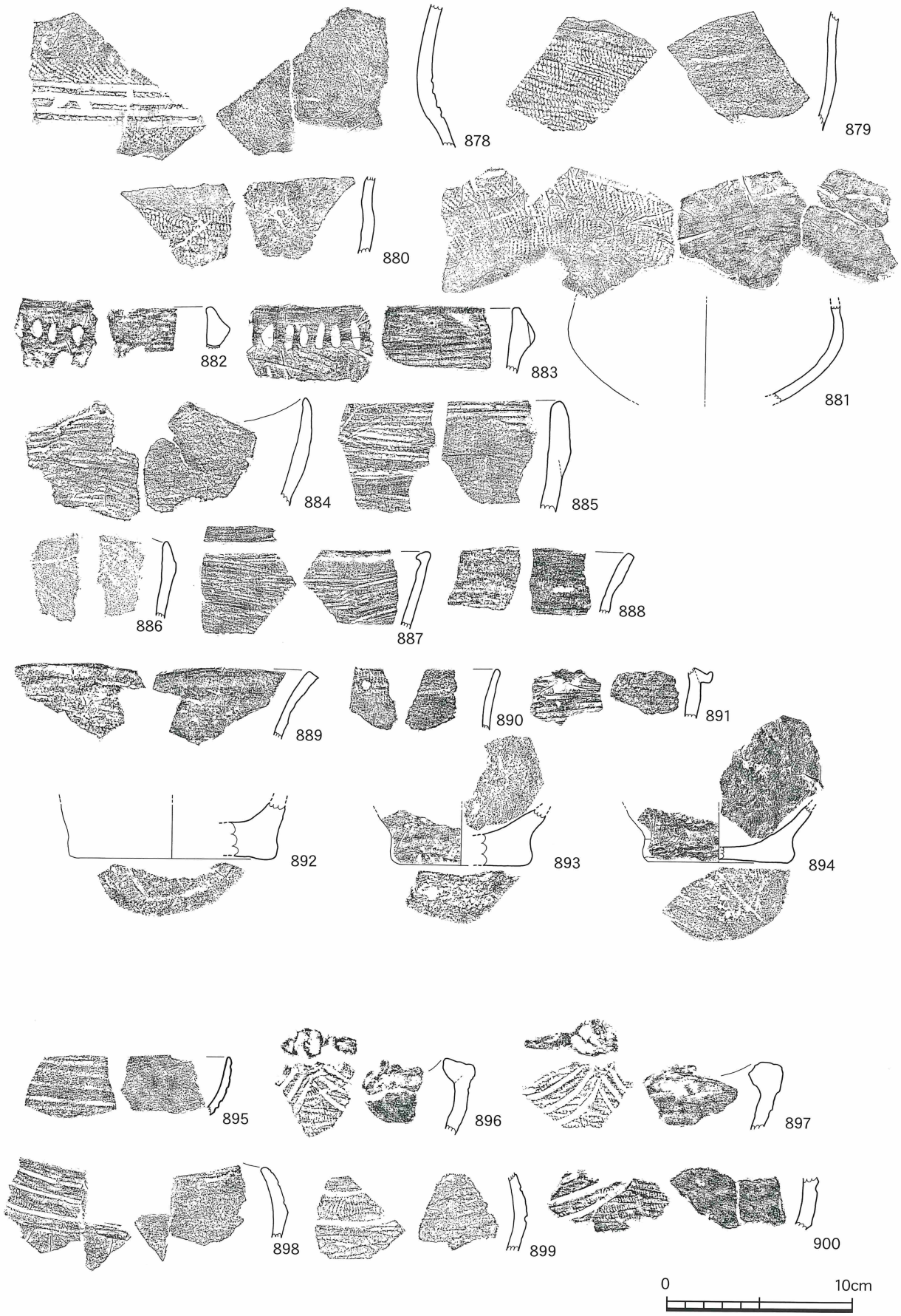
895～903、905は内湾する口縁部を呈する有文土器である。895は沈線文のみである。896～901は疑似縄文地に沈線を施す。902は疑似縄文のみがみられる。903、905は縄文地に沈線を施す。896、897は波頂部で、頂部を肥厚させる。904、906～909は有文の単口縁深鉢である。904は縄文と沈線が、906～909は疑似縄文が各々施される。このうち、907は口縁部が肥厚し、やや内湾気味である。910、911は縄文と沈線による文様をもつ胴部である。912は疑似縄文が施される胴部。913、914は浅鉢である。913は丸底を呈する小型品で内外面無文である。914は外面の口縁と頸部下に帯状の疑似縄文がみられる。915は口縁部が逆L字状に折れるもので、外面に縄文が施される。916～925は無文の深鉢で、917～919は口縁が内湾する。928～931は平底の底部である。以上は後期石町式古相に比定できる。926、927は中期の船元式である。926は縦位・横位の突帯を付し、



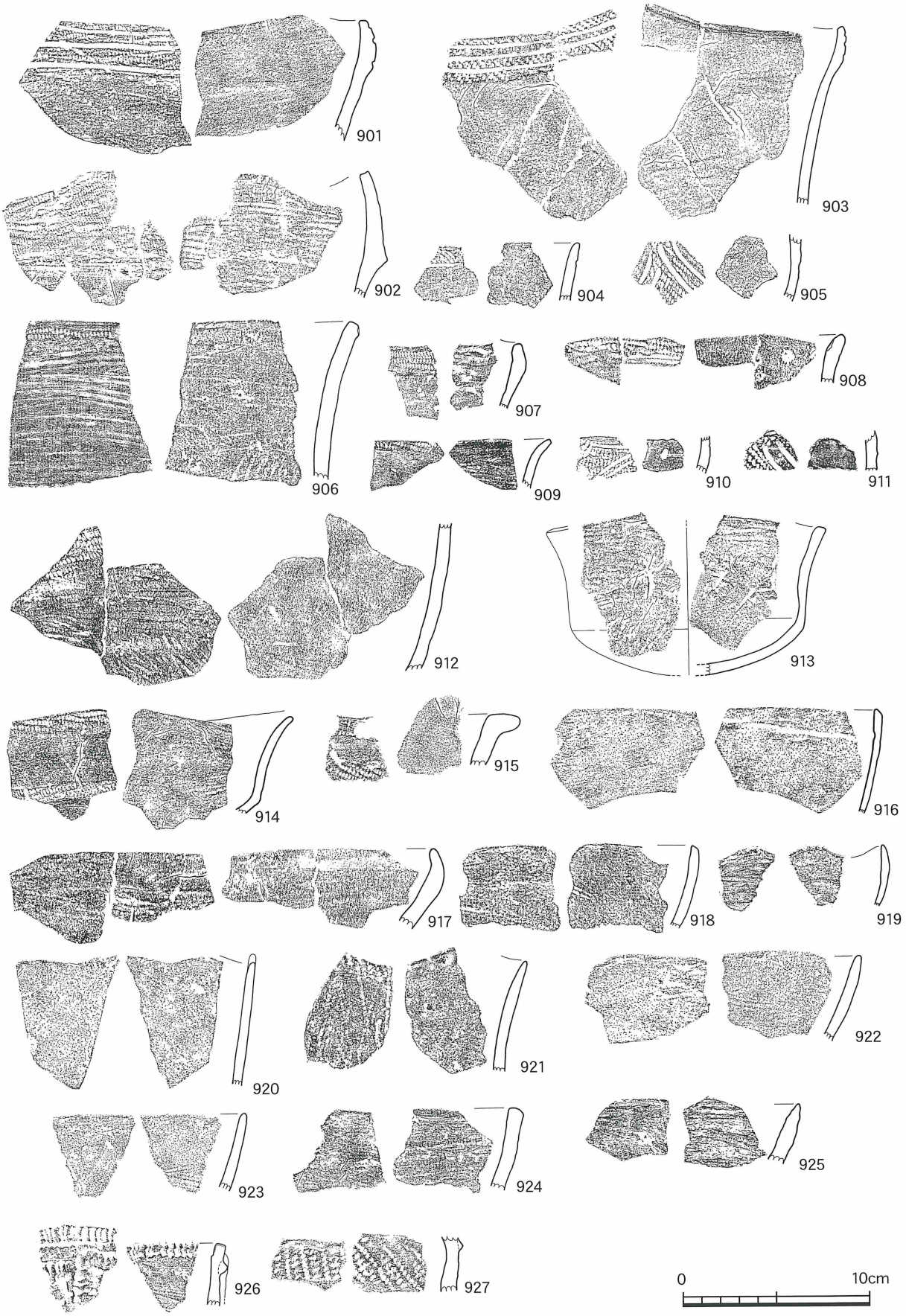
第70図　岩鼻岩陰遺跡9区平面図・土層図（S=1/50）



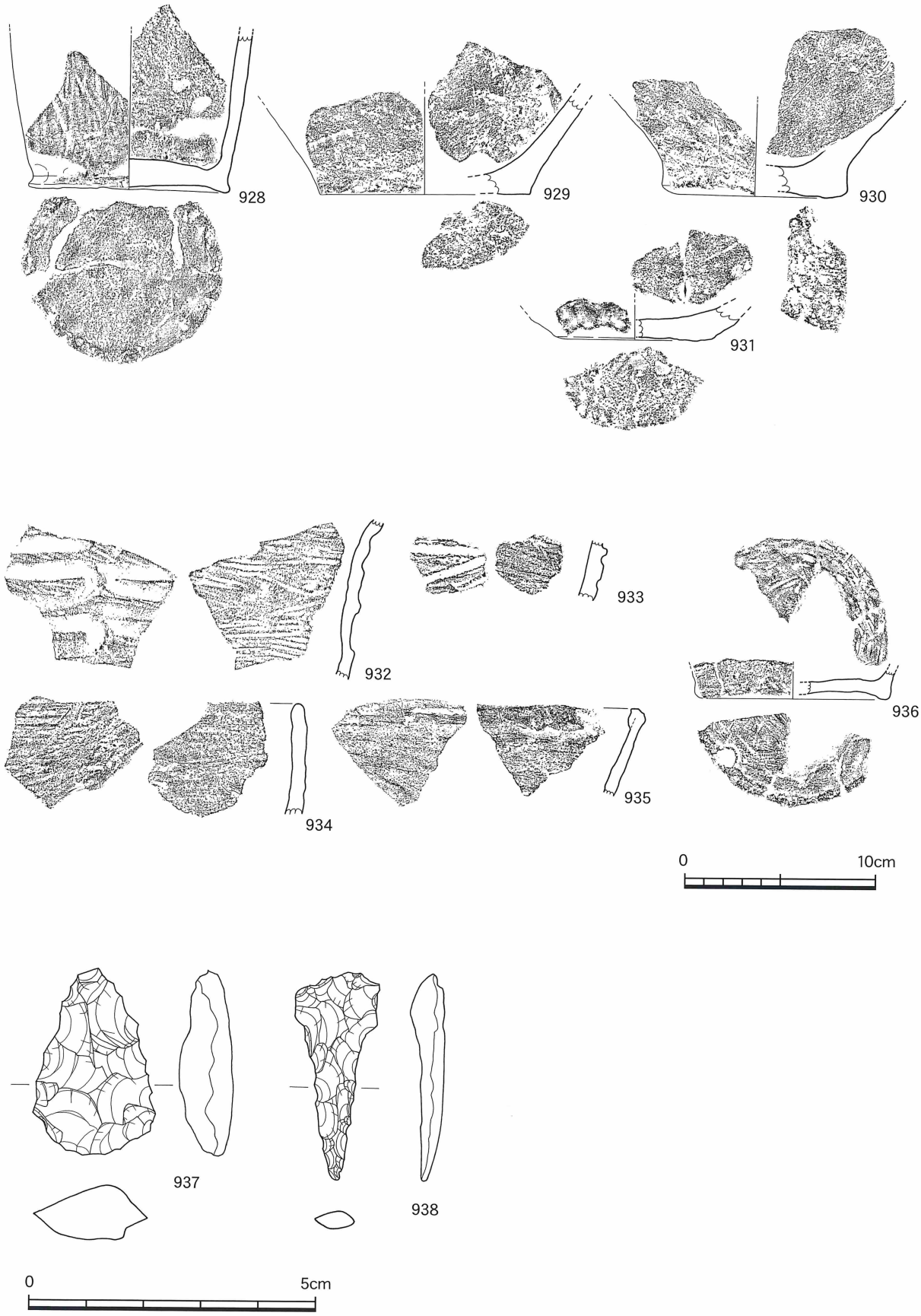
第71図　岩鼻岩陰遺跡9区出土縄文土器1(S=1/3)



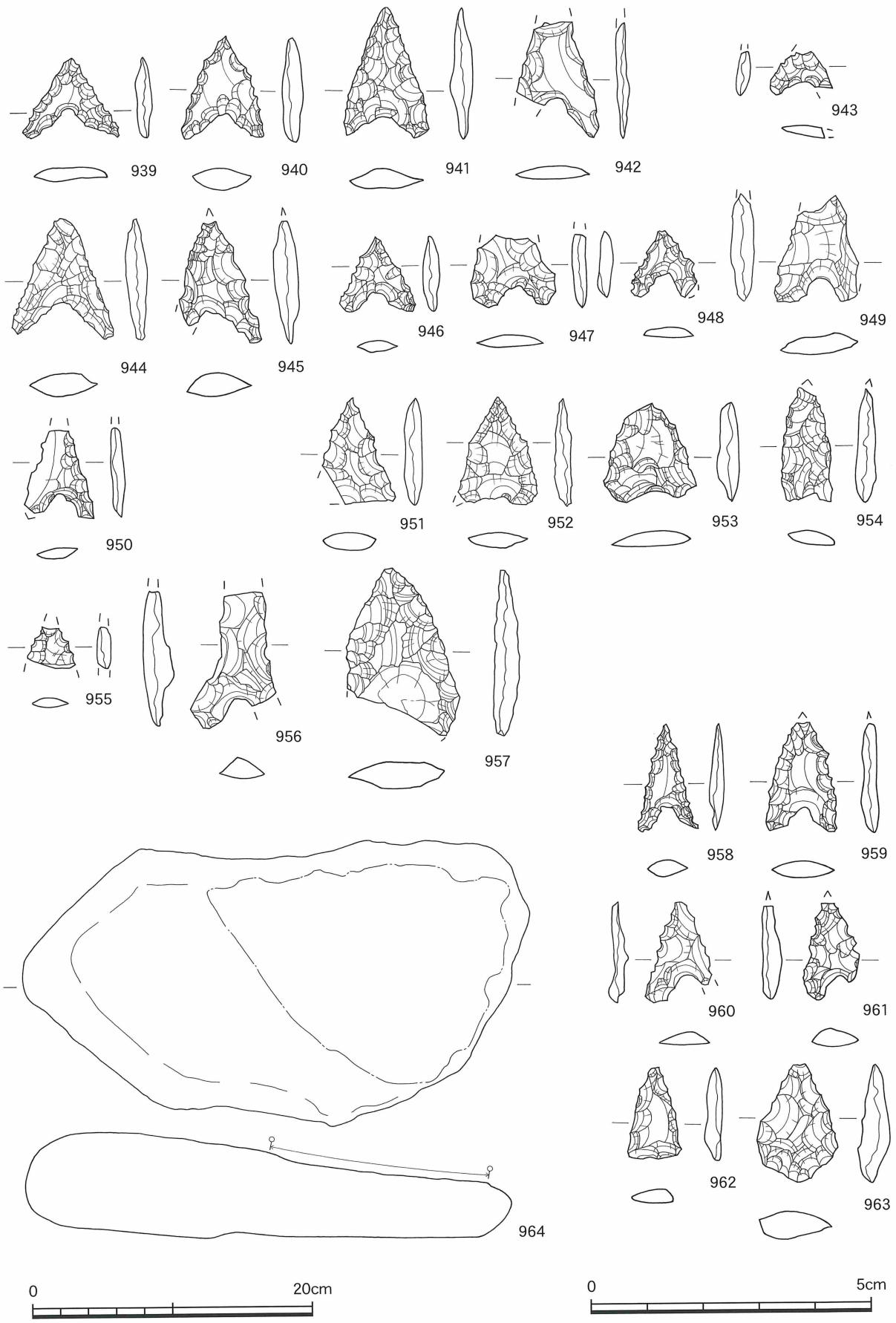
第72図　岩鼻岩陰遺跡9区出土縄文土器2（S=1/3）



第73図　岩鼻岩陰遺跡9区出土縄文土器3(S=1/3)



第74図　岩鼻岩陰遺跡9区出土縄文土器4(S=1/3)、石器1(S=1/1)



第75図　岩鼻岩陰遺跡9区出土石器2（S=1/1，S=1/4）

突帯上と口縁端部上面から内面に連続刺突文を施す。927は内外面縄文で、外面には断面三角形の突帯が付される。

Ⅱ2b層（第74図932～936、第75図955～963）

932は条痕地に凹線文が施される。後期初めの西和田式。933は外面に沈線文がみられる。934、935は無文の深鉢で、935は内面が肥厚する。936は平底の底部である。

石器のうち955～963は石鏃である。石材は珪質岩製の955、サヌカイト製の956以外は姫島産黒曜石製である。形態的には、Ⅱ類（二等辺三角形状）とⅣ類（尖頭器状）があり、Ⅱ類が多い。964は台石であるが、上層のⅡ2a層に伴う可能性もある。36.2×20.3cmの扁平な石材を利用しており、片面の一部に磨った痕跡がある。

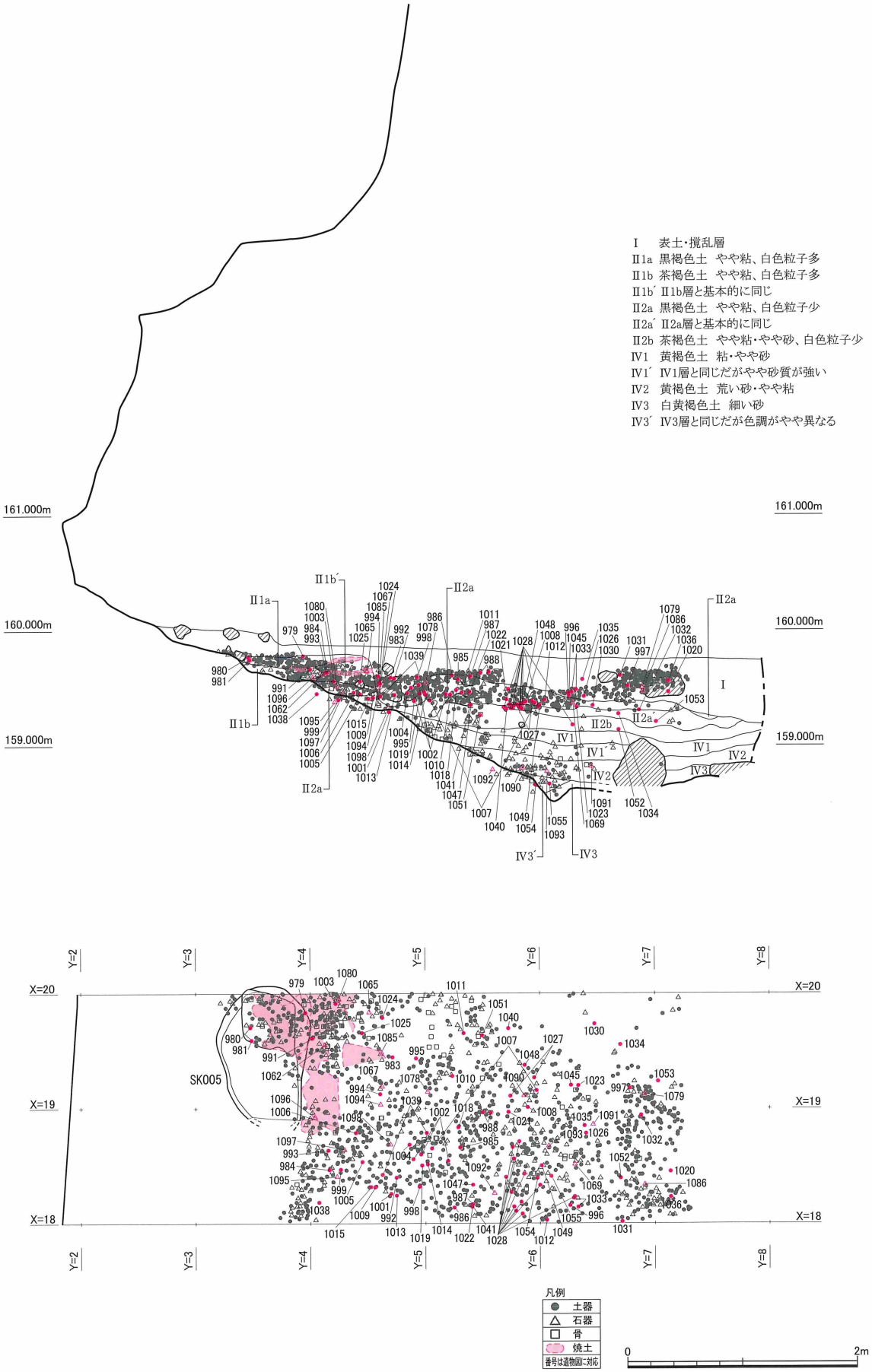
13　10区

(1)　土層と遺物出土状況（第76図）

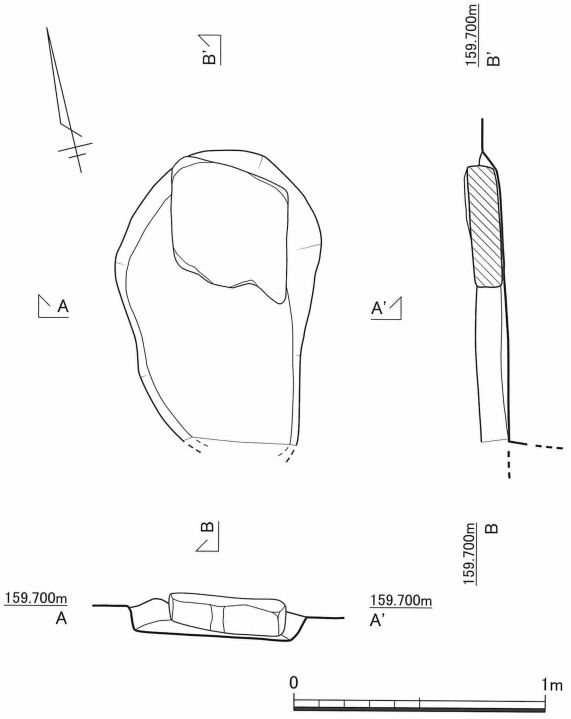
岩盤が奥壁から川に向かい傾斜する状況は9区と同様であるが、9区に比べ傾斜が急である。奥壁から4.1mの地点で平坦になり、その後、川に向かいわずかに登る。この平坦面が旧河道の底となる。標高は奥壁が160.4m、旧河道の最も低い部分が158.6mである。旧河道中には、流れにより運ばれたと思われる大型の礫が残る。奥壁から上方については、岩体が上方に立ち上がり、岩盤から約2.4m上方で斜めに向きをかえる。その後再び向きを変え、最終的には直立気味に上方へのびる。雨落ち線は奥壁から約3.0mである。遺物は、雨落ち線に関係なく外側まで大きく広がる。

本調査区の層位について述べる。撹乱層のⅠ層は奥壁から調査区の東端までみられる。層厚は0.1～0.5mで調査区の東ほど厚い。Ⅰ層下にはⅡ1層がある。Ⅱ1層が残存するのは、奥から1.4m程である。本来は調査区全体に広がっていたと思われるが、撹乱により大半が削平されている。このⅡ1層は、上からa層、b層、b`層の3層に分層することができる。各々0.05～0.1m程の比較的薄い層であるが、a層とb層の間及びb層とb`層の間に焼土層が見られる。a層とb層の間にあるのが焼土9である。焼土9は、0.5×0.5m、厚さ0.03mである。そして、b層とb`層の間にあるのが焼土10である。焼土10は、9区から10区にかけて形成されており、その規模は南北1.4m、東西0.9m、厚さ0.03～0.05mである。焼土10を切り込むかたちでSK005（第77図）があり、SK005の上を焼土9が覆う。さらに、焼土10の東側に焼土11と焼土12がある。いずれも焼土10と同じ層位と考えられるが、規模は径0.3mと小規模である。いずれにしてもⅡ1層が形成される間に、10区のほぼ同位置で複数の焼土が層位的にみられるということは、焼土の周辺が繰り返し長期間にわたり生活空間として利用されたことを示すものであろう。Ⅱ1層下にはⅡ2層がみられる。大きく上層のa層と下層のb層に分けられる。この状況は8区や9区と同じである。遺物の多くはⅡ2a層から出土した。Ⅱ2層の下には河川堆積層であるⅣ層がみられる。Ⅳ層は奥壁から2.8mの地点より東側に形成されており、最下層は砂層で上層にいくにつれやや粘質をおびる。Ⅱ2層とⅣ層の間に、Ⅱ3層やⅡ4層がみられないのは9区と同様である。9区以南については、Ⅱ2層が形成される以前は河道域で、生活空間としての利用ができなかったと考えられる。9区以南が生活の場となるのは、河道が完全に埋没した後のことである。

遺物の平面的な分布をみてみると、調査区全体に遺物が分布することが分かる。ただし、包含層残存の状況から、Ⅱ1層に伴う遺物は奥壁に近い部分のみである。Ⅱ2層出土遺物は全体から出土するが、調査区東北部に空白がみられる。北側に隣接する9区では、後期集中部①と後期集中部②が確認されている。奥壁に近い部分が後期集中部①で、調査区東側が後期集中部②であった。本調査区の北西部は後期集中部①の続きと考えられるが、調査区東北部に空白があることから、9区の後期集中部②は本調査区まで広がらないとみられる。よって、本調査区Ⅱ2層出土遺物の大半を後期集中部③として捉えることが可能と思われる。



第76図　岩鼻岩陰遺跡10区平面図・土層図(S=1/50)



第77図　岩鼻岩陰遺跡10区SK005

(2)　SK005（第77図）

SK005は奥壁から約2.0mの位置にある。Ⅱ1b層とⅡ1b`層の間に形成された焼土10を切るかたちで、Ⅱ1b層から掘りこまれる。

遺構は、Ⅱ1a層及び焼土9を除去した際の精査で確認することができた。遺構の平面形は、やや不定形気味の楕円形である。南端部が撹乱により残存しないが、推定長径0.65m、短径0.3～0.4m、深さ0.05mである。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上りは緩やかな部分と急な部分がある。土坑内からは扁平な礫が出土した。ほぼ床面に伴うものである。礫は0.25×0.25m、厚さ0.05mで、磨石や台石としての使用を目的としたものである可能性がある。しかし、明確な使用痕は確認できなかった。そのほかに目立った遺物は出土していないが、状況的に意識的な埋納であることも考えられる。

時期を決定できる遺物が出土していないが、層位的にみて縄文時代晩期前半に比定できる。

(3)　遺物

Ⅰ層（第78図965～978、第81図1056～1059）

965～967は弥生時代早期の刻目突帯文甕である。965、966が口縁下に突帯を付すのに対し、967は口縁端部外側に付ける。968、969は外面に沈線文が施される深鉢である。両者の沈線はともに細線化しており、縄文時代晩期前半でも新相に位置づけられる。970、971は無文の深鉢である。970の外面には巻貝による条痕がみられる。972～976は晩期前半の浅鉢である。このなかで、972と975は口縁部の立ち上りが高い。972は外面に雑な沈線が、973は粘土紐接合の際に生じた段を利用した沈線が各々施される。973、974は口縁部立ち上りの低平化がみられる。972と975が坂口式前後に、973と974はそれよりも後出する。976は胴部から頸部にかけての資料で、頸部が大きく外反しながら口縁にいたる。977は波頂部の資料で、頂部に刻みを3ヶ所施す。978は厚底の底部である。晩期の上菅生B式以降のものか。

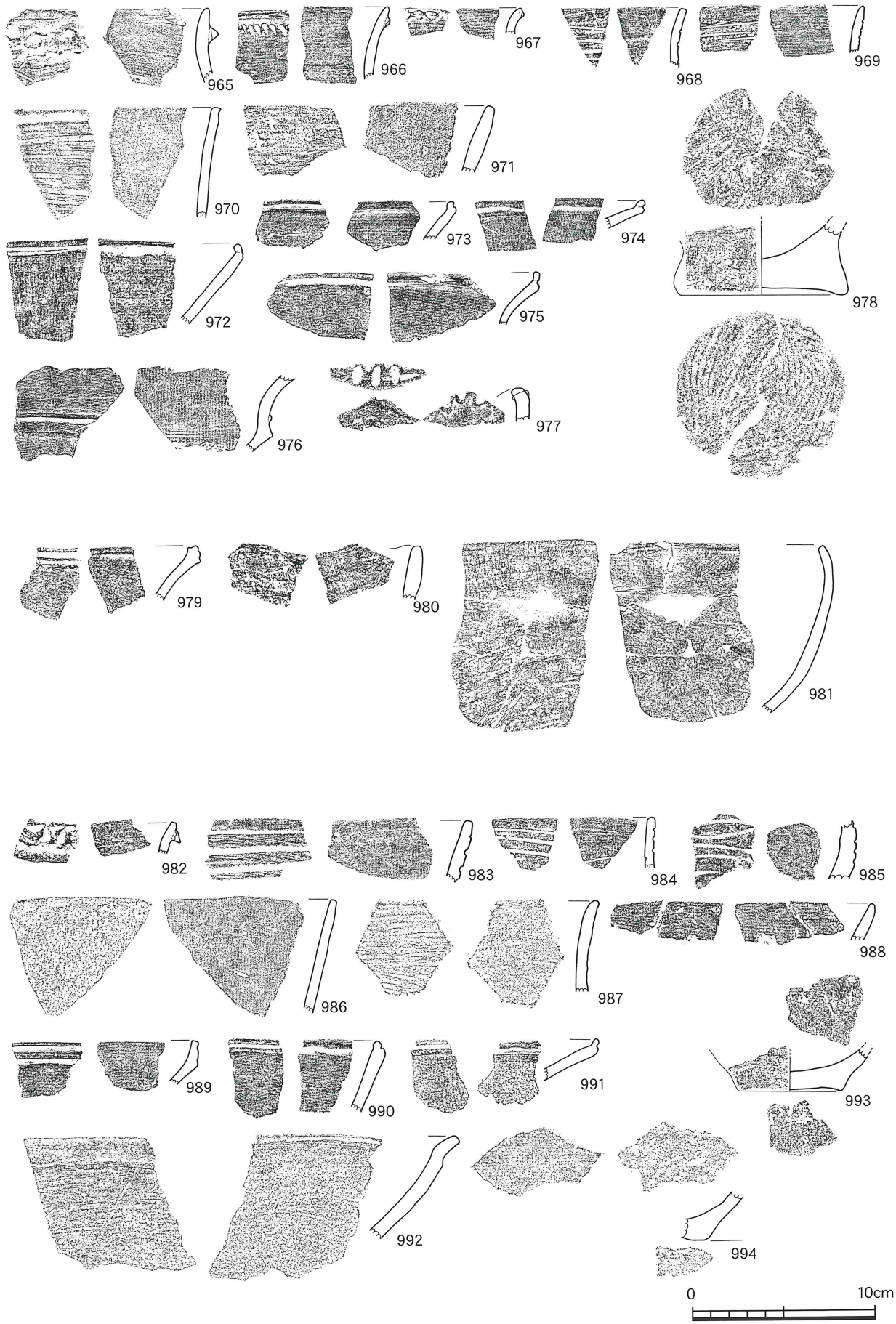
石器は1056～1059で、いずれも石鏃である。このうち1056と1059がサヌカイト製、1057と1058が姫島産黒曜石製である。欠損品もあるが形態的には五角形状を呈するものと思われる。基部の抉りは、平基とU字状に浅いものがある。

Ⅱ1a層（第78図979～981、第81図1060、1061）

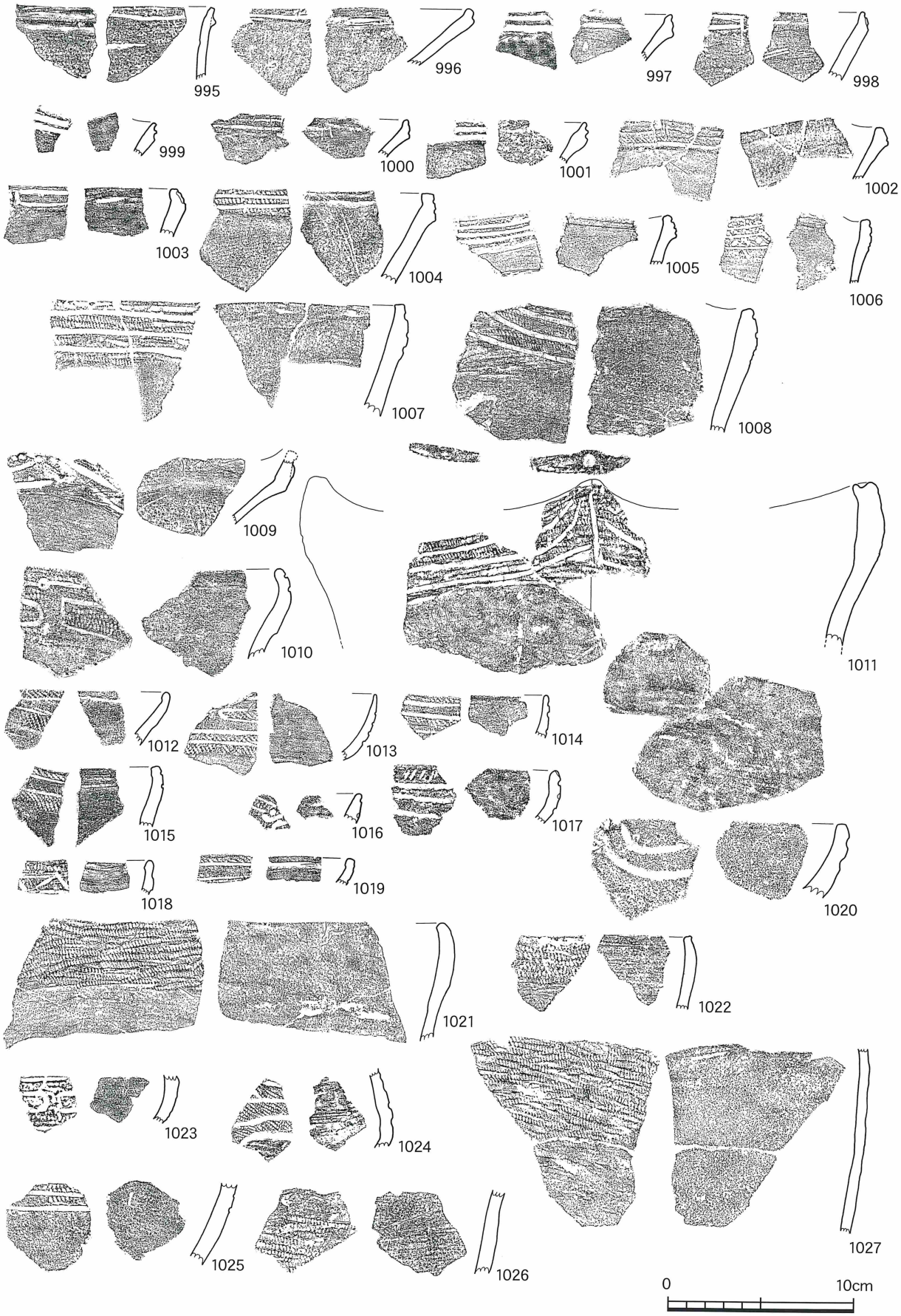
Ⅱ1a層からの出土遺物は少ない。下層から連続的に遺物の包含がみられたことと、部分的で薄い層であることから、混入等が考えられる。そのため、本層出土遺物の位置づけは慎重にならざるを得ない。

979は浅鉢の口縁部である。立ち上りはしっかりしており、外面に沈線が2条施される。縄文晩期初めの所産であろう。980は無文の深鉢である。981は無文の鉢で、体部が内湾する。後晩期のものか。

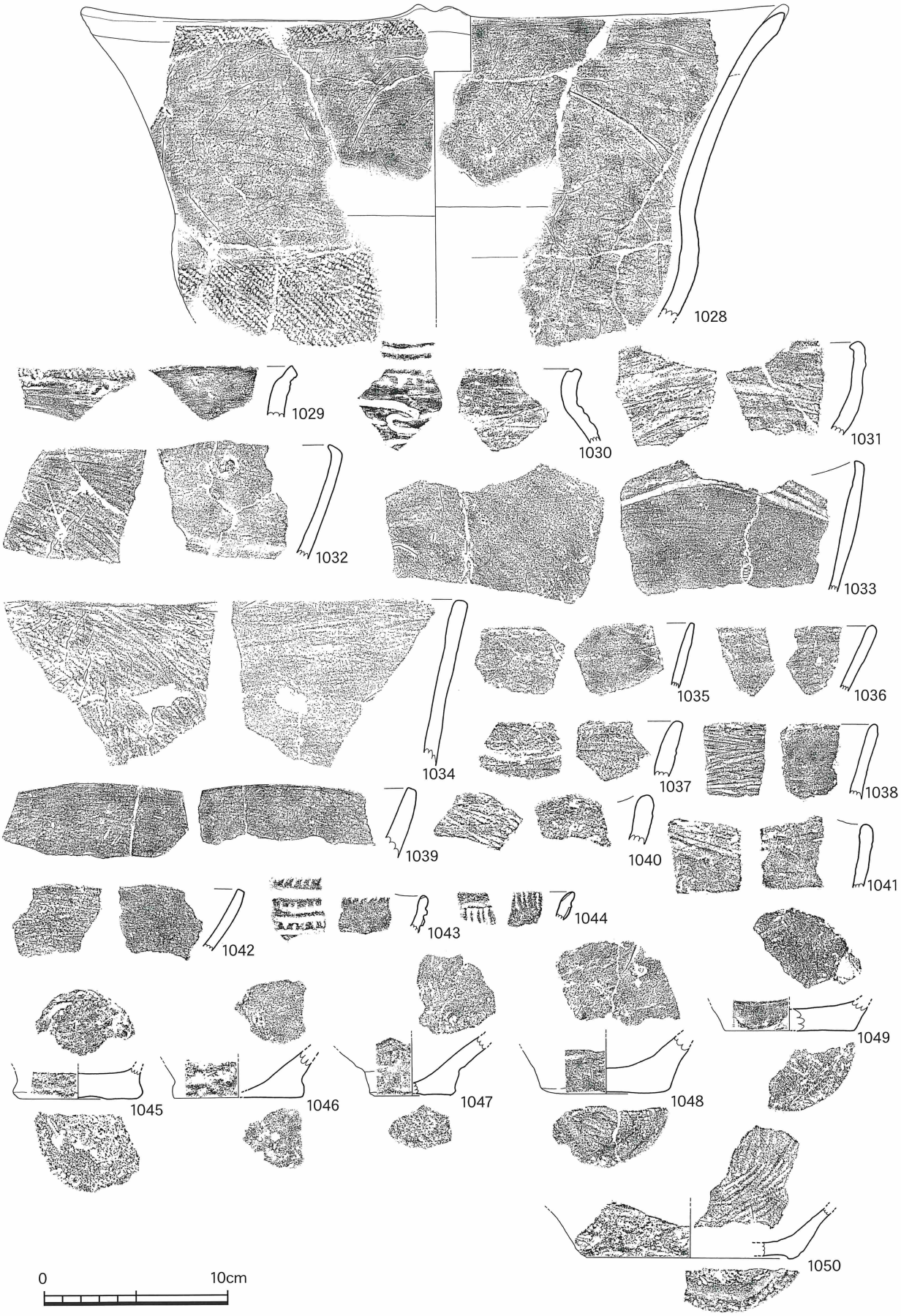
石器は石鏃が2本である。1060は五角形状を呈するもので、姫島産黒曜石製。1061はサヌカイト製で正三角形状を呈する。抉りは低い三角形状である。



第78図　岩鼻岩陰遺跡10区出土縄文土器1(S=1/3)



第79図　岩鼻岩陰遺跡10区出土縄文土器2(S=1/3)



第80図　岩鼻岩陰遺跡10区出土縄文土器3（S=1/3）

Ⅱ1b層、Ⅱ1c層（第78図982～994、第79図998、第81図1062～1066、第83図1096）

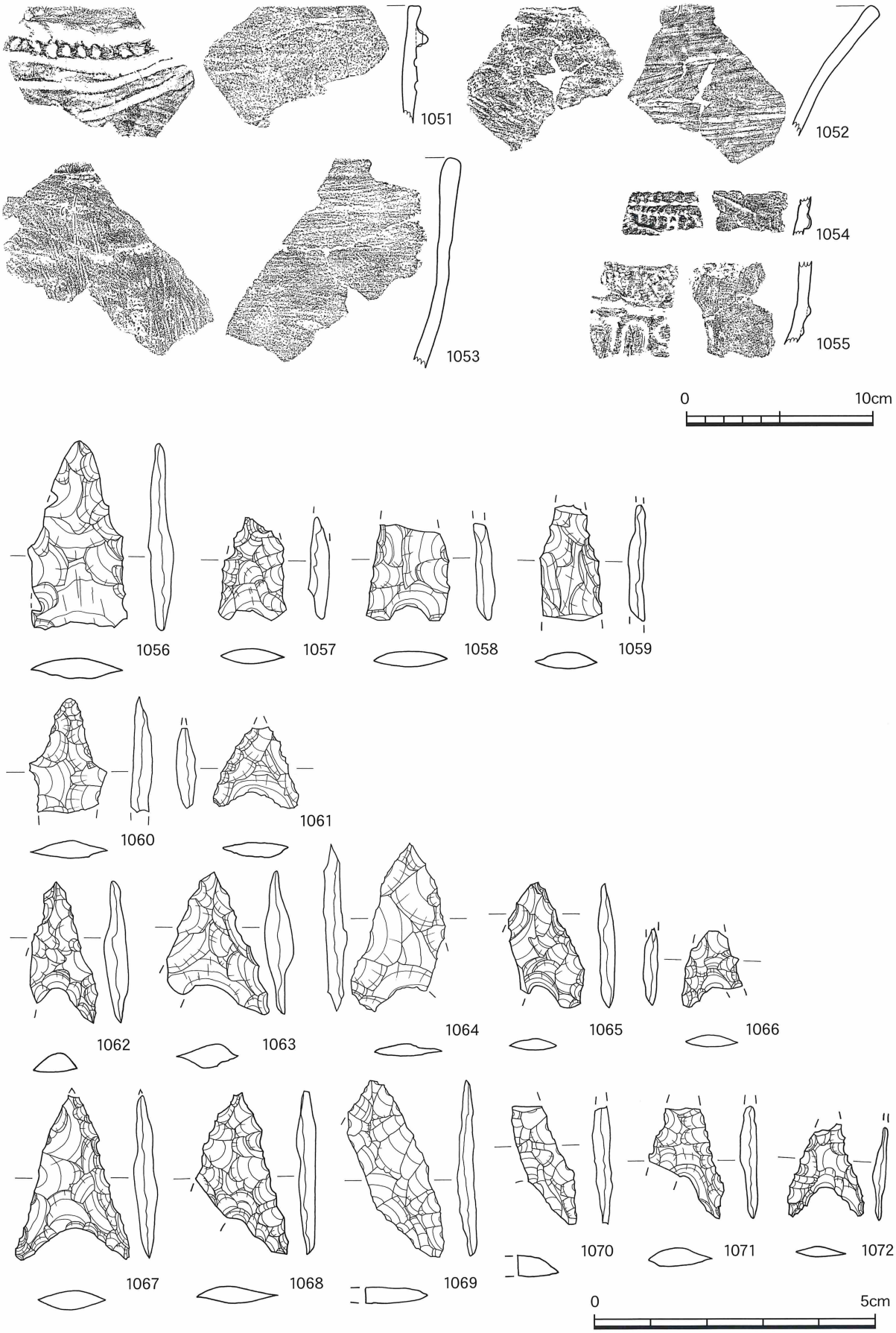
982は弥生時代早期の刻目突帯文甕である。口縁端部直下に断面三角形の突帯を付す。983～985は外面に横走沈線文を配する深鉢である。口縁帯が大きくのび、沈線の多条化がみられる。縄文時代晩期前半に位置づけられるもので、坂口式よりも後出する。986～988は無文の深鉢である。このうち987は外面に巻貝条痕が施される。以上は後晩期の所産であろう。989は浅鉢で、口縁部が直立する。外面に2条の凹線が施される。後期後半三万田式併行の東式である。990～992は晩期の浅鉢である。990、991は両者とも口縁部立ち上がりの低平化が著しい。坂口式に後出する段階に比定できる。992は浅い体部から口縁部が短く斜方向に折れる。990や991と同様な時期であろう。994は平底の底部である。

石器のうち1062～1066は石鏃である。このうち1063と1064はサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。形態的にはⅡ類（二等辺三角形状）が主であるが、1064はⅢ類（五角形状）である。抉りは低い三角形状を呈するものが主となる。1096はサヌカイト製のスクレイパーである。薄い横長剥片を利用したもので、縁辺に調整剥離を施し刃部を作り出す。

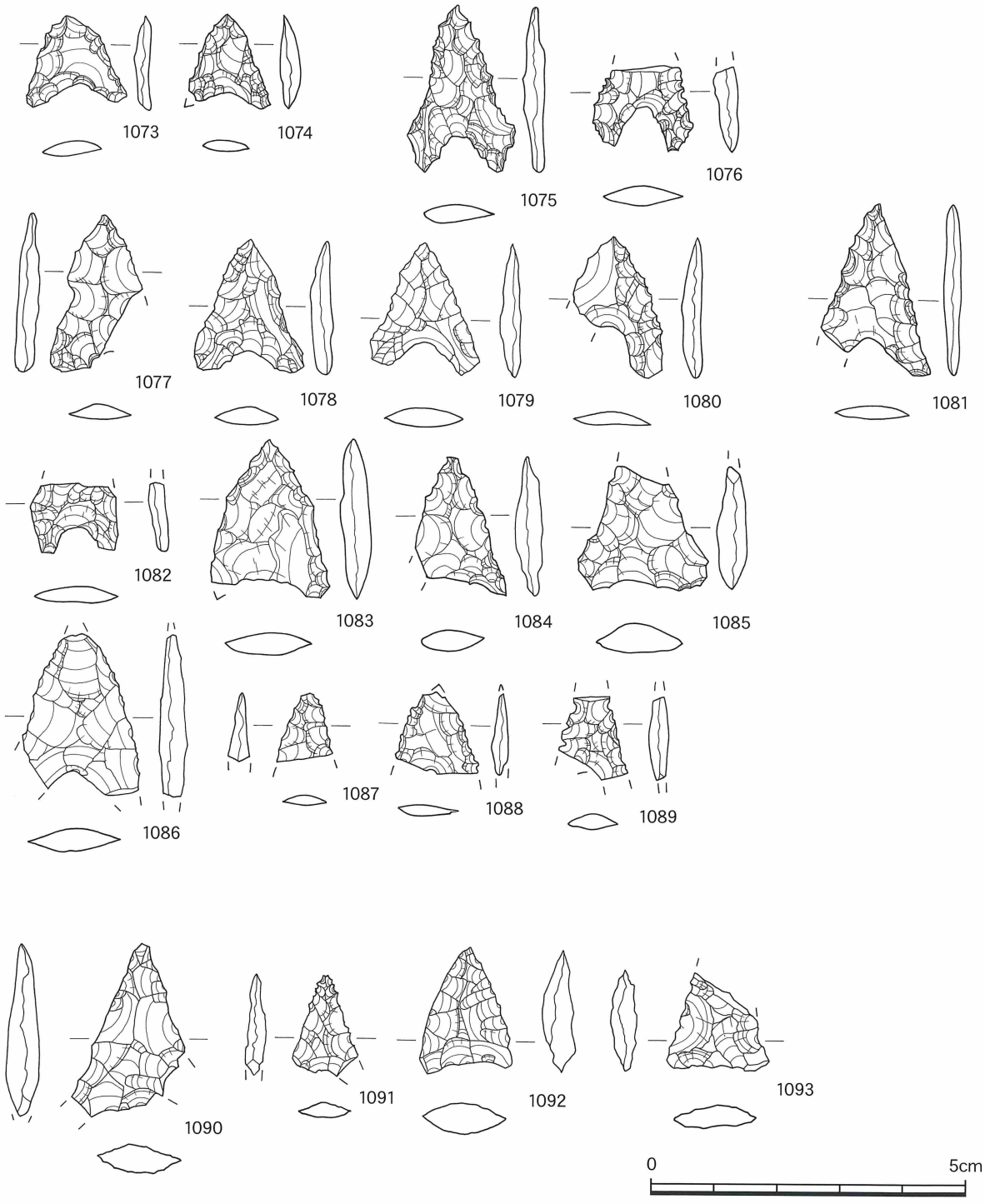
Ⅱ2a層（第79図995～1027、第80図1028～1033、1036～1050、第81図1067～1072、第82図1073～1089、第83図1094、1095、1097、第84図1098）

995は無刻目突帯文で、外面口縁下に断面三角形の突帯が付される。縄文時代晩期の上菅生B式である。996は晩期前半の浅鉢で、口縁部立ち上がりの低平化がみられる。997～1001、1003、1009は口縁部外面に2条の沈線が施される。998、1003には縦位の短沈線も加わる。1009は波頂部である。以上は、後期後半の西平式から三万田式に比定できよう。1002、1004、1005は口縁部外面に沈線と縄文が施される。西平式と思われるが、1004は後期石町式新相の可能性をもつ。1007、1008、1011は口縁部外面に沈線と疑似縄文による文様がみられる深鉢である。1007は口縁部が頸部から直線的に続く。口縁部下の外面はやや肥厚し文様帯を形成する。1008も口縁部が頸部から直線的に続き、口縁下が肥厚する。波頂部近くである。1011は波頂部の資料である。口縁部は内湾し、口縁帯は肥厚する。波頂部上面には円形の刺突が施され、外面は沈線が垂下する。この垂下沈線に向かい左右からの沈線が集約される。全体にやや雑な感じである。1006、1010、1012～1016、1018、1019は口縁部外面に沈線と縄文による文様が施される。1010は口縁部が大きく内湾する深鉢である。沈線は横走するだけでなく、下の2条は途中が途切れて縦位の短沈線によりつながれ方形区割を形成する。1012は口縁端部内側が丸く肥厚し、わずかに段が付く。1019も同様な器形を呈する。1013～1015は内湾する口縁部を有する。1016は円形の刺突が加わる。1018は外面に連続三角文がみられる。1017、1020は外面に沈線による文様を有する深鉢である。1017は口縁部が内湾する。押引きによる沈線が横走し、口縁端部外面に刻みが施される。1020も口縁部が内湾するもので、沈線は上方に集約する。1021、1022は外面文様帯が疑似縄文のみにより形成される深鉢である。1021は口縁部が内湾し、口縁帯は肥厚する。1022も口縁部内湾気味であるが、口縁帯の肥厚は顕著でない。1023～1027は胴部資料である。1023、1024は縄文と沈線による文様がみられる。1025は沈線と疑似縄文が、1026と1027は疑似縄文のみが施される。1028と1029は口縁部外面に縄文が幅狭の帯状に施文されるものである。1028は10区出土のものに加え、9区、11区、14区出土の破片が接合した。丸みを有する胴部から頸部が外方に折れ口縁部に向かい直線的にのびる。頸部は無文で、胴部と口縁部に縄文が施される。口縁部は尖り気味で、外側がやや肥厚する。山形の波頂部をもち、頂部を凹ませる。1029は口縁部断面が方形を呈するもので、端部に縄文が施される。1030は鐘崎式の系譜を引くもので、波状文が垂下される。1031は無文の深鉢で、口縁部内湾する。以上の1006～1008、1010～1031は後期石町式の古相に比定できる。1032、1033、1036～1042は無文土器で後晩期に位置づけられるものである。このうち、1032は口縁端部が内側に肥厚する。また、1033は口縁部内面に沈線がみられる。両者は三万田式の深鉢か。1043、1044は中期の船元式である。1045～1050は平底を呈する底部である。

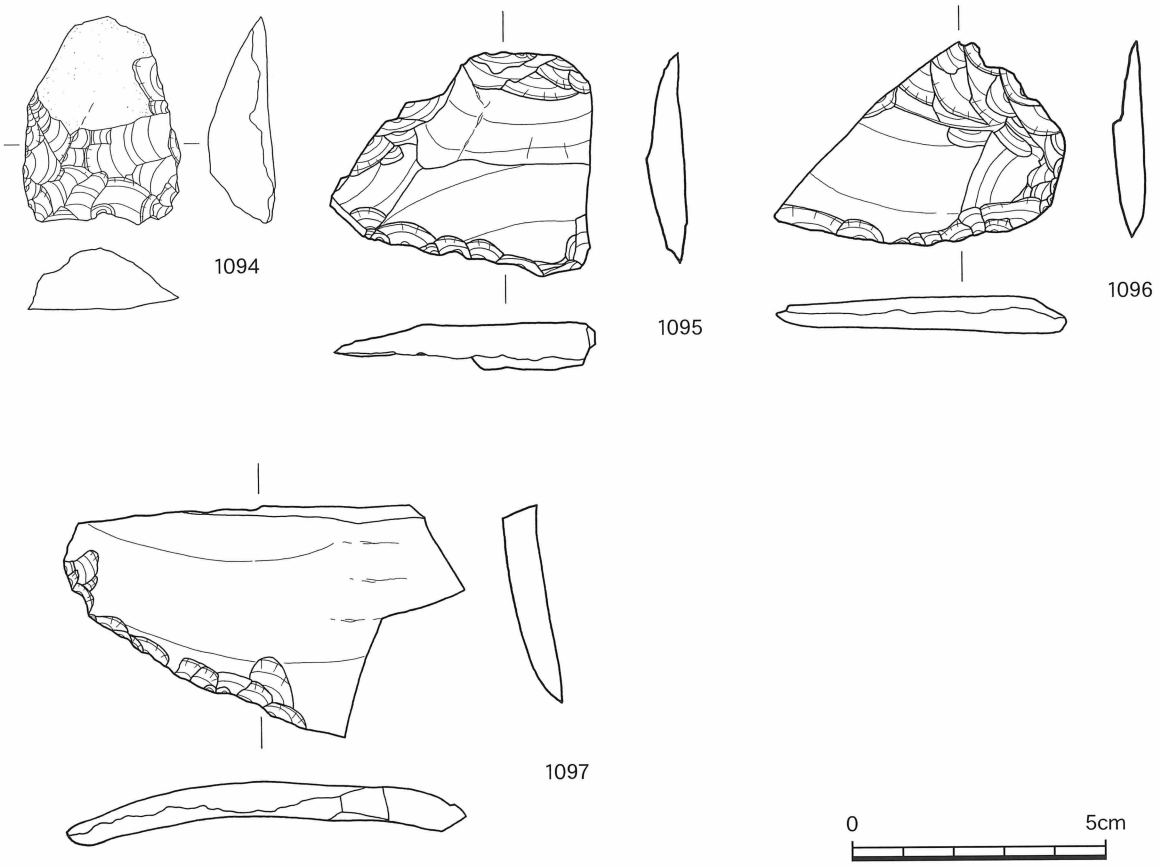
石器のうち1067～1089は石鏃である。石材はサヌカイト製の1073、1081、1083を除き他は姫島産黒曜石である。形態の分かる資料の中で特徴的なものは、側縁が先端部近くでわずかに角度を変え五角形状を呈する



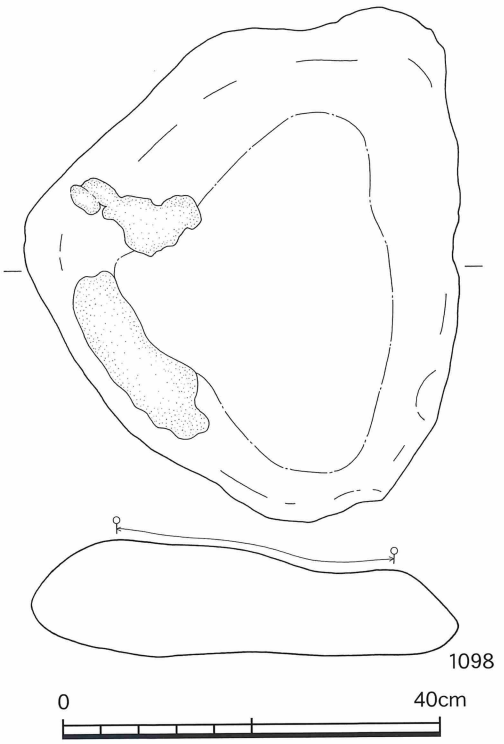
第81図　岩鼻岩陰遺跡10区出土縄文土器4(S=1/3)、石器1(S=1/1)



第82図　岩鼻岩陰遺跡10区出土石器2（S=1/1）



第83図　岩鼻岩陰遺跡10区出土石器3（S=2/3）



第84図　岩鼻岩陰遺跡10区出土石器4（S=1/8）

もの（1067～1069、1073～1075、1077～1080、1083）である。晩期に多く見られる五角形状のものとは形態を異にしている。また、基部の抉りは低い三角形状を呈するもの（1067、1068、1073、1074、1077～1079、1081）が目立つ。1094、1095、1097はスクレイパーである。1094は姫島産黒曜石製である。一部に自然面を残す厚みのある素材の片方に調整剥離を集中させる。1095はサヌカイトの横長剥片の縁辺に調整剥離を加えたものである。1097は姫島産黒曜石製である。1098は台石である。54.5×46.3cmの大型品で、片面に磨った痕跡が認められる。

Ⅱ2b層（第89図1034、1035、第81図1051～1053）

1034、1035、1052、1053は無文土器深鉢である。1051は外面口縁部下に刻目突帯を付し、体部に沈線による曲線文を施す。後期初～前葉のものであろう。

Ⅳ層（第81図1054、1055、第82図1090～1093）

1054、1055は中期の船元式である。1054は低い突帯を付し、連続刺突文を付加する。1055は縄文地に縦位あるいは横位の低い突帯を付す。

石器は1090～1093の石鏃である。1090がチャート製で、他は姫島産黒曜石製である。

14　11区

(1)　土層と遺物出土状況（第85図）

岩盤は奥壁から急傾斜で下り、最奥部から2.55mの地点で傾斜を変え再び川に向かい傾斜する。9区や10区では、旧河道の底と考えられる部分が平坦であったが、大きく状況が異なる。旧河道部分には、長さ1.0mを越すものを含む大小様々な礫が残る。これらの礫は岩盤上にあるものや埋土中にあるものがあり、旧河道が埋没する過程で順次残されたものと考えられる。標高は奥壁が160.6m、岩盤の傾斜変換点が159.1m、旧河道の最も低い部分が158.4mである。奥壁から上方については、斜方向に立ち上がり、奥壁から約2.4m上方で斜めに向きをかえる。その後、最終的には直立気味に上方へのびる。雨落ち線は奥壁から約3.2mである。遺物の大半は雨落ち線の内側にあるが、一部は外側まで広がる。

本調査区の層位について述べる。撹乱層等のⅠ層は、a層とb層の2層に分けられる。Ⅰa層は奥壁から調査区の東端までみられる。層厚は0.1～0.4mで、奥壁に近い部分が厚い。Ⅰb層は水田関連土層で、調査区東端部分にのみ残存する。Ⅱ層とⅣ層を切り込むかたちで形成されている。Ⅰb層は10区以北では見ることができなかったが、本区以南において残存するようである。Ⅰ層下にはⅡ1層がある。Ⅱ1層が残存するのは、奥壁から約1.0mである。本来は調査区全体に広がっていたと思われるが、大半が撹乱により削平されている。このⅡ1層は、上からa層、b層の2層に分層することができる。各々0.05m程の薄い層である。遺物はa層からb層にかけ連続的に堆積しており、層位により遺物を分離することはできない。Ⅱ2層は調査区全体でみられる。場所により若干異なるが、大きく上層のa層と下層のb層に分けられる。遺物の多くはⅡ2a層から出土した。Ⅱ2層に伴い、0.4×0.1mの広さの焼土19がある。Ⅱ2層の下には河川堆積層であるⅣ層がみられる。Ⅳ層は奥壁から2.5mの地点より東側に形成されており、最下層は砂層で上層にいくにつれ粘質をおびる。Ⅱ3層やⅡ4層がみられない。

遺物の平面的な分布をみてみると、調査区全体に遺物が分布することが分かる。大部分はⅡ1層に伴う縄文晩期のもので、Ⅱ2層の遺物は少ない。北側に隣接する10区までは、Ⅱ2層から後期石町式の遺物が集中して出土しているが、11区ではその数を急激に減らす。

(2)　遺物

Ⅰ層（第86図1099～1104、第88図1154～1157）

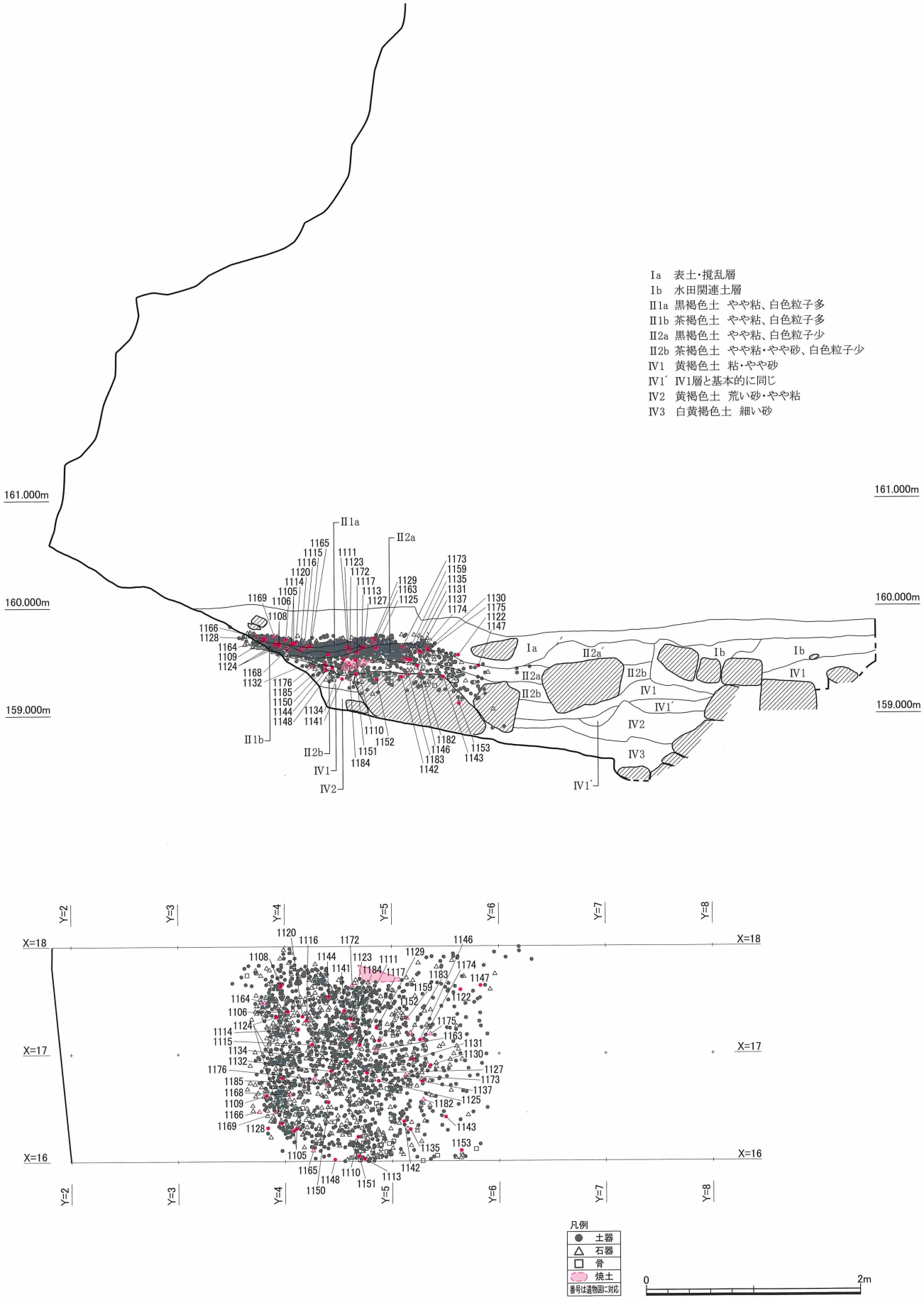
1099は縄文晩期前半の深鉢で、外面に横走沈線が施される。1100は無文の深鉢。1101は口縁端部に軽い刻みが施され、外面には横走沈線などがみられる。1102～1104は底部である。1103、1104は底部が厚い。

1154～1156は石鏃で、いずれも姫島産黒曜石製である。1157は小円礫の姫島産黒曜石原石である。

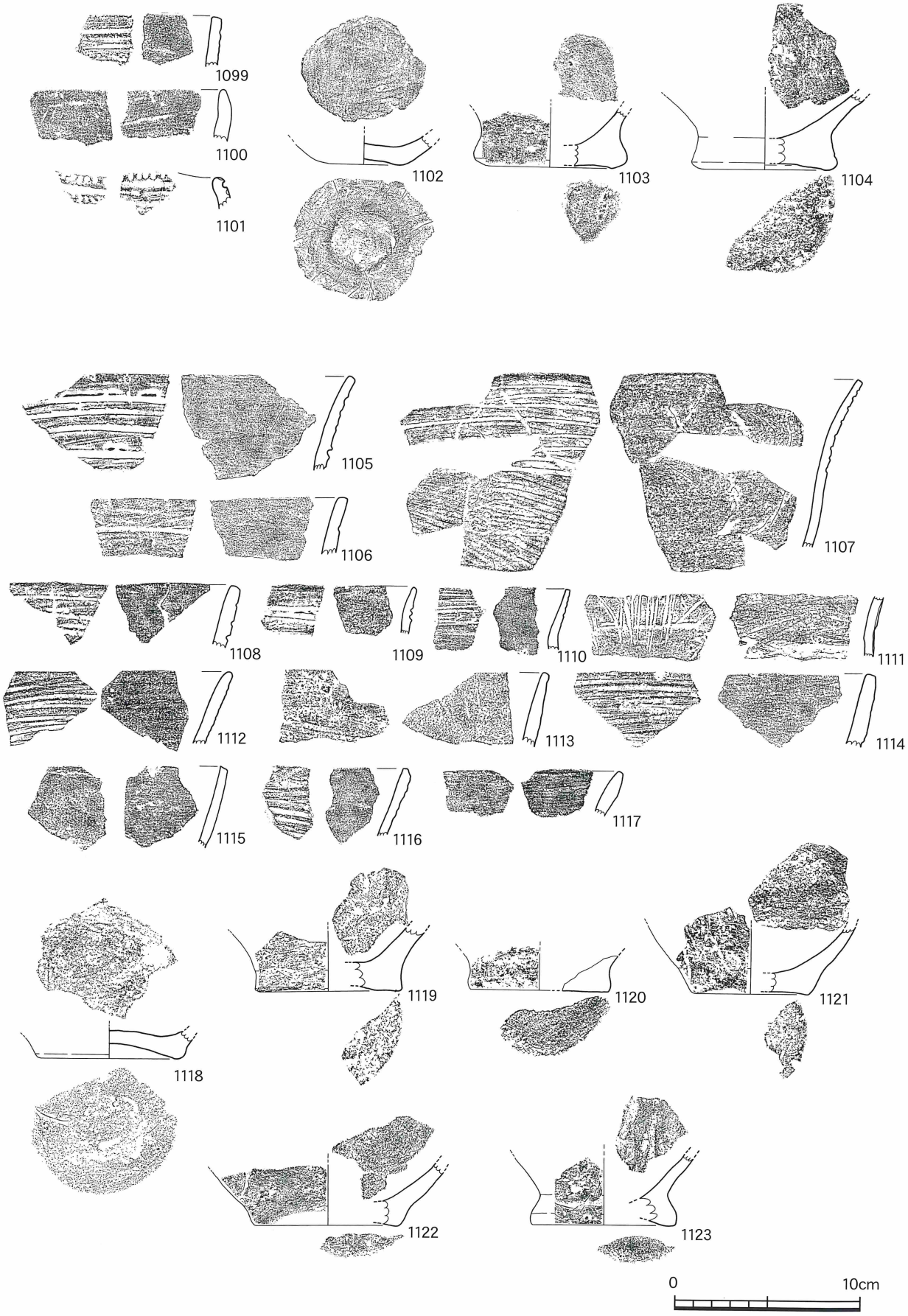
Ⅱ1層（第86図1105～1123、第87図1124～1137、第88図1158～1172、第89図1173～1175）

1108～1111は外面に沈線文が施される晩期前半の深鉢である。1110は口縁帯が未発達なので坂口式。1111は縦位に沈線がみられるなど、坂口式に後出する。1112～1117は無文の深鉢で、外面に二枚貝や巻貝による条痕調整がみられるものもある。1118～1123は深鉢の底部である。1124～1132は浅鉢である。1124は体部が稜をもち、その部分から口縁部が大きく外反し、口縁部が斜方向に立ち上がる。口縁部外面に沈線が1条施される。1125～1128は1124と同様なものである。1129は口縁端部内側が丸く肥厚する。1130は頚部が大きく伸びず、口縁はほとんど立ち上がらない。1131は頚部がくの字状に折れ口縁にいたる。口縁部径と胴部最大径がほぼ同じである。1132は口縁部内面に段がみられる。以上1124～1132は、坂口式及びそれから後出する時期に比定できる。1138は後期西平式。1134、1135は後期石町式。1136は後期初頭か。1137は半月形を呈する土器片加工品。

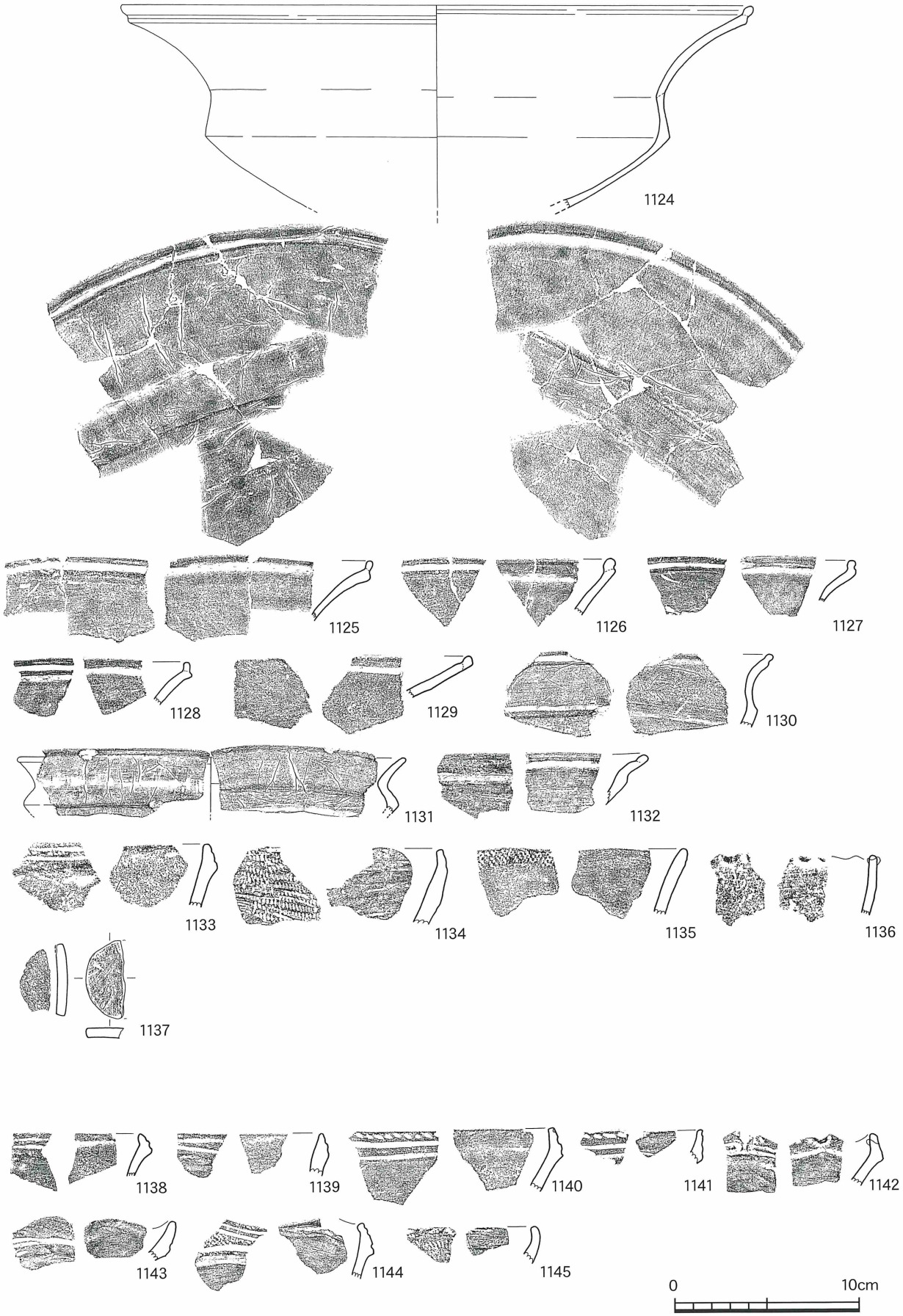
石器のうち、1158～1172は石鏃で全て姫島産黒曜石製である。1164～1169は五角形状を呈する。1170～1172も基部の形態から同様な形態である可能性が高い。1158、1159は側縁が先端部近くでわずかに角度を変え五角形状を呈する。1173は姫島産黒曜石製スクレイパー。1174、1175は敲石である。



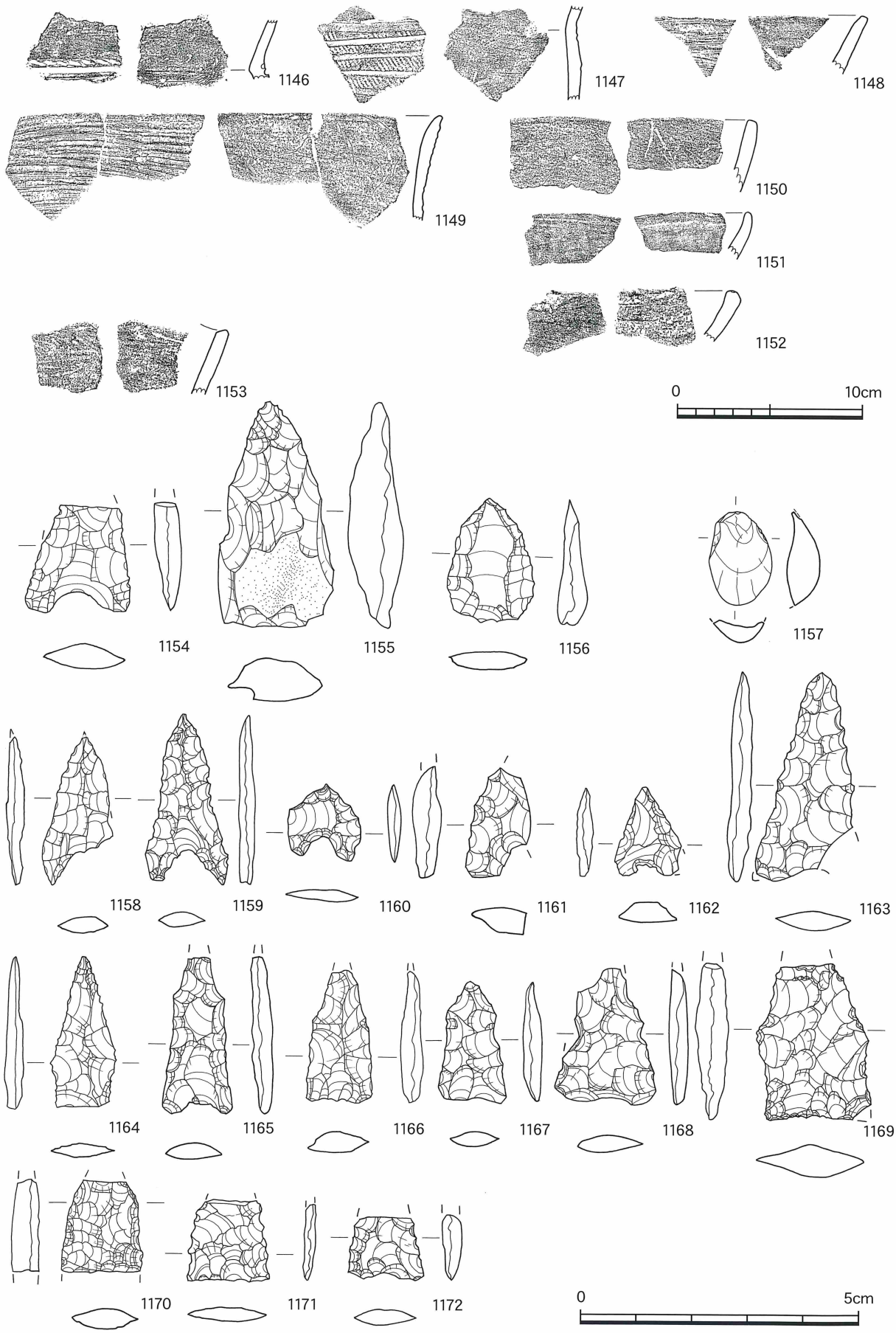
第85図　岩鼻岩陰遺跡11区平面図・土層図(S=1/50)



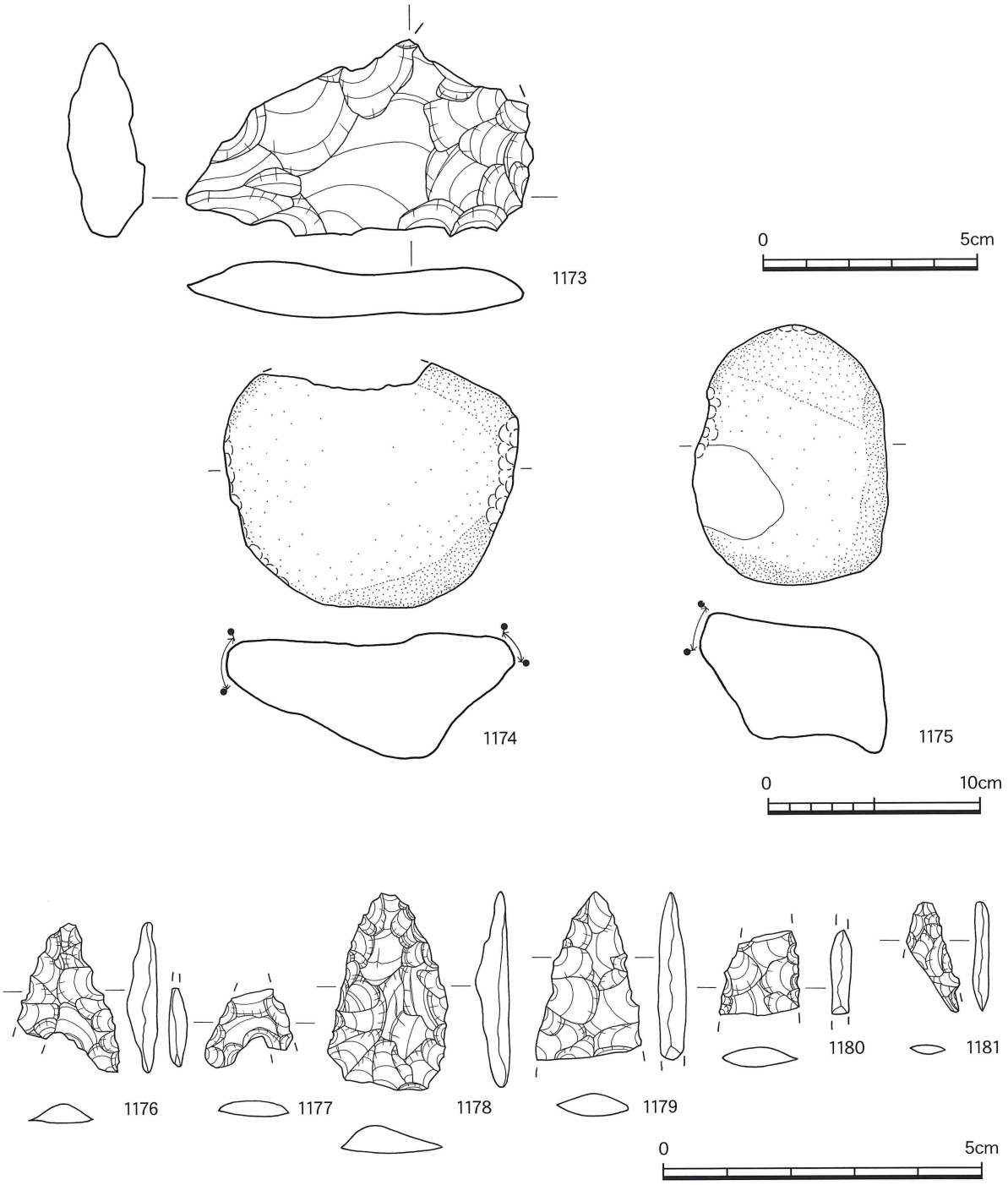
第86図　岩鼻岩陰遺跡11区出土縄文土器1(S=1/3)



第87図　岩鼻岩陰遺跡11区出土縄文土器2(S=1/3)



第88図　岩鼻岩陰遺跡11区出土縄文土器3(S=1/3)、石器1(S=1/1)

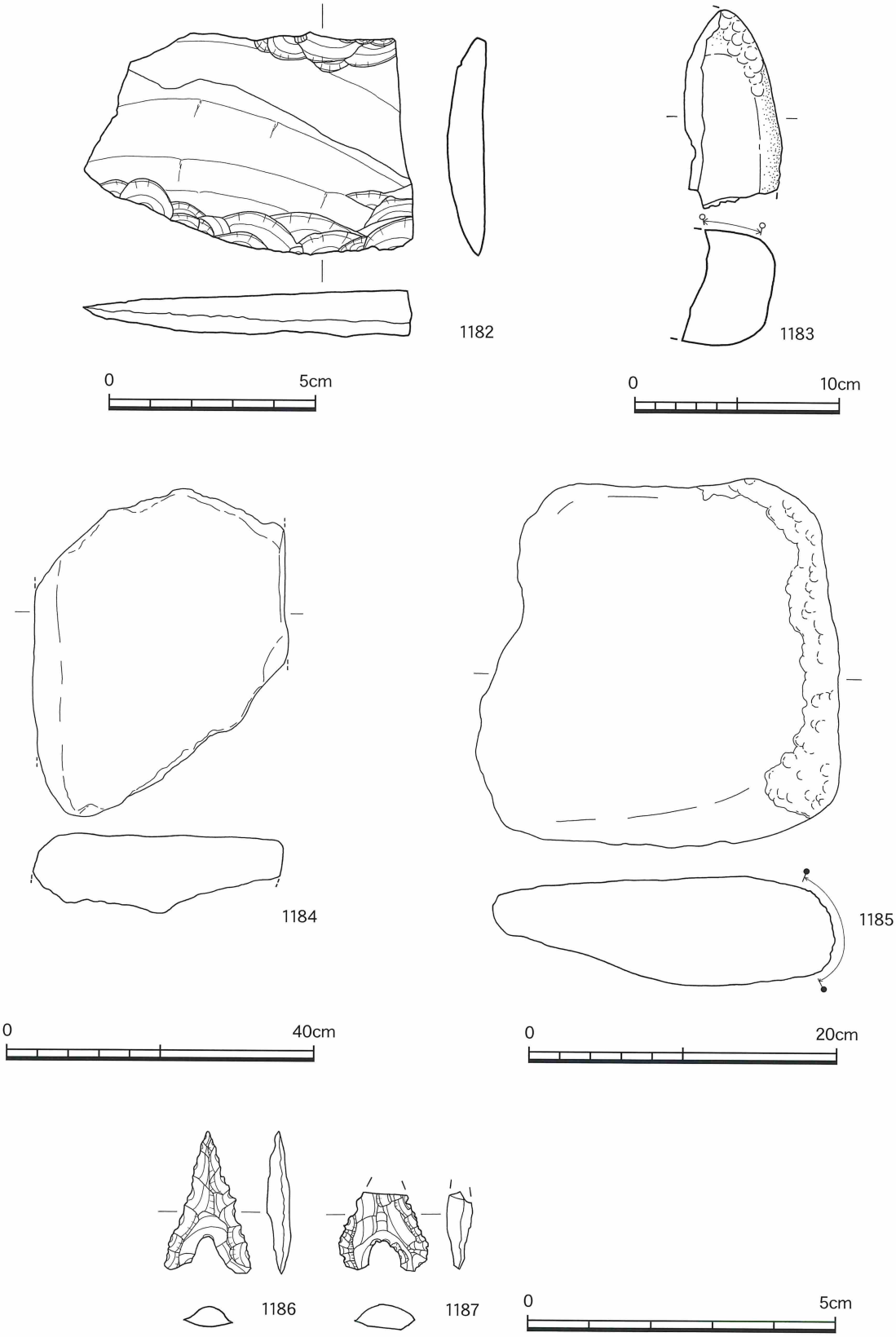


第89図　岩鼻岩陰遺跡11区出土石器2（S=1/1，S=2/3，S=1/3）

Ⅱ2層（第87図1138～1145、第88図1146～1152、第89図1176～1181、第90図1182～1185）

1138～1144は後期西平式～三万田式に比定できるものである。1138～1143は縄文が施されず、1140と1141の端部外面には連続刺突文がみられる。1145は石町式の深鉢口縁部。1146は西平式の深鉢頸部。1147は石町式深鉢の頸部。1148～1152は無文の深鉢である。1149は外面に巻貝による条痕調整が施される。

石器のうち、1176～1181は石鏃で全て姫島産黒曜石製である。1182はスクレイパーである。サヌカイトの横長剥片を利用し、縁辺部に調整剥離を行う。1183は磨石である。片面が磨り面として使用され、端部に敲打痕が残る。1184、1185は台石である。1184は49.7×33.4cmの大型品である。1185は23.9×23.8cmで、片方の側面に敲打痕が残ることから、大型の敲石としての使用があったことが分かる。



第90図　岩鼻岩陰遺跡11区出土石器3(S=1/1，S=2/3，S=1/3，S=1/4，S=1/8)

Ⅳ層（第88図1153、第90図1186、1187）

1153は波状口縁を呈する無文土器深鉢である。

石器は1186、1187で、両者とも姫島産黒曜石製の石鏃である。両者とも平面形は二等辺三角形状を呈する。基部には幅の狭い抉りが入る。

15　12区

(1)　土層と遺物出土状況（第91図）

岩盤は奥壁から急傾斜で下り、最奥部から3.8mでほぼ平坦になる。この平坦な部分が旧河道の底となる。旧河道部分の堆積土中には、長さ0.5mを越すものを含む大小様々な礫が含まれる。旧河道が埋没する過程で順次残されたものと考えられる。標高は奥壁が160.6m、岩盤の傾斜変換点が158.6m、旧河道の最も低い部分が158.45mである。奥壁から上方については、岩体が斜方向に立ち上がり、その後徐々に垂直気味になる。雨落ち線は奥壁から約3.0mである。遺物の一部が雨落ち線の内側にあり、大部分は外側に広がる。

本調査区の層位について述べる。撹乱層等のⅠ層は、a層とb層の2層に分けられる。Ⅰa層は調査区全体にあり、層厚は0.05～0.5mである。奥壁に近い部分が厚い。Ⅰb層は水田関連土層で、調査区東端部分にのみ残存する。Ⅱ層を切り込むかたちで形成されている。Ⅰ層下にはⅡ1層があり、a層、b層の2層に分層することができる。Ⅱ1a層は層厚0.1～0.2m、Ⅱ1b層は層厚0.05～0.15mで、Ⅱ1b層は奥壁に近い部分にのみみられる。遺物はa層からb層にかけ連続的に堆積しているが、多くは上層のⅡ1a層からの出土である。Ⅱ2層はa層、b層、c層に分けられる。遺物量はⅡ1層に比べると、かなり少量である。Ⅱ2層の下には河川堆積層であるⅣ層がみられる。Ⅳ層は奥壁から2.7mの地点より形成されている。最下層は砂層で、上層にいくにつれ粘質をおびる。

遺物の平面的な分布をみてみると、調査区全体に遺物が分布することが分かる。大部分はⅡ1層に伴う縄文晩期のもので、Ⅱ2層の遺物は少ない。隣接する11区や13区も同じ状況である。

(2)　遺物

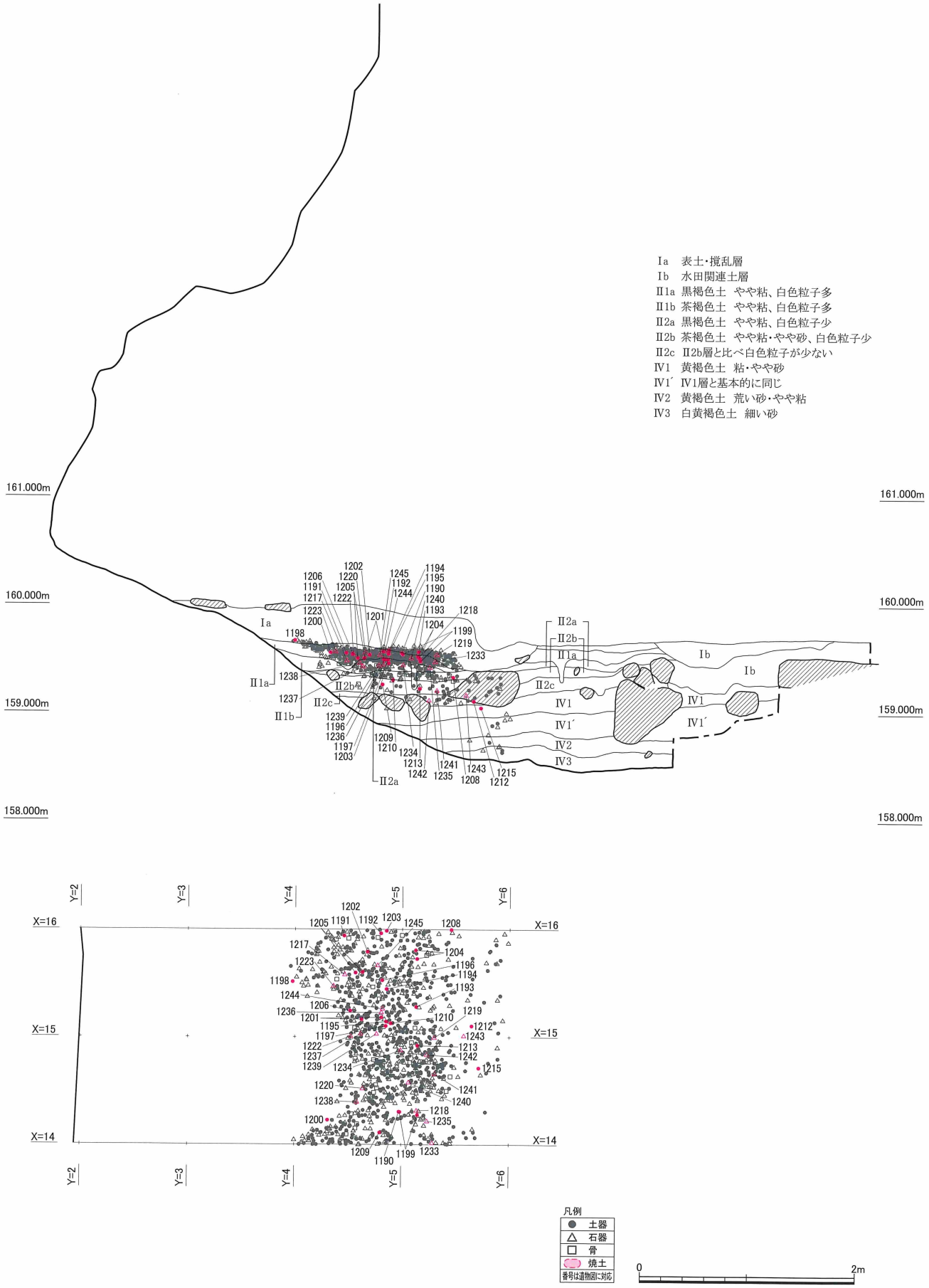
Ⅰ層（第92図1188、1189）

1188は斜めに立ち上がる頚部から口縁部が立ち上がる。口縁部に低いリボン条突起が付く。無刻目突帯文の出現の直前段階である。1189は頚部から口縁部が短く折れるもので、口縁端部内面が肥厚する。上菅生B式か。

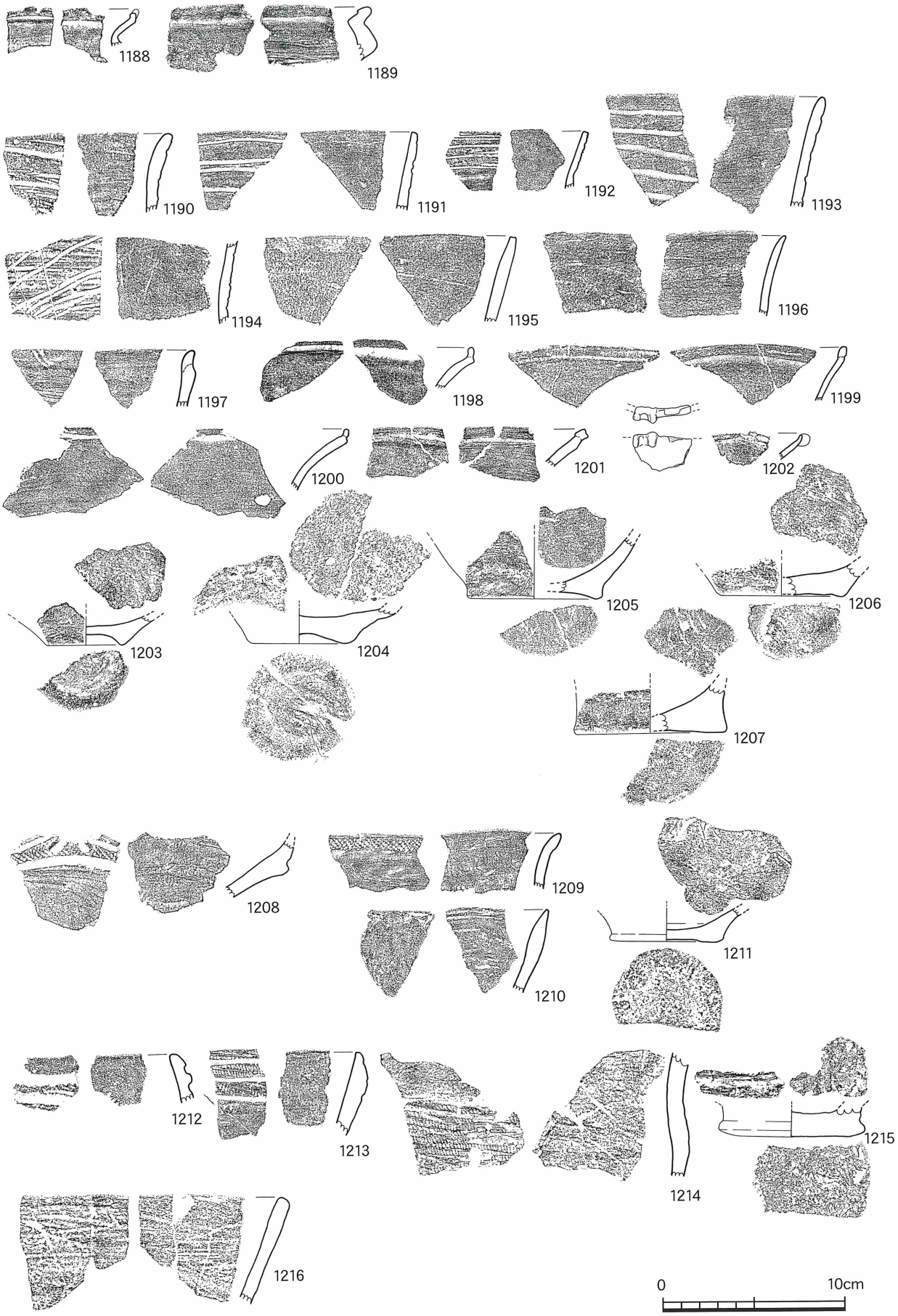
Ⅱ1層（第92図1190～1207、第93図1217～1230、1233、第90図1234～1240、第96図1244、1245）

1190～1194は口縁部外面に沈線を施す深鉢である。1192は口縁帯があまり発達していない。沈線は細線化しているが、5条のみである。縄文時代晩期前半の坂口式である。1190、1191、1193、1194は口縁帯が発達しており、坂口式より後出すると考えられる。1190はやや外反気味で、間隔をあけた沈線がやや斜めに施される。1191は沈線の間隔が不揃いである。1193は横走沈線がやや間隔をあけて施される。1194は口縁帯下部の資料で、斜めあるいは縦方向の沈線がみられる。1195、1196は無文の深鉢である。1197は粘土紐接合時の段を強調し突帯状にしたものである。晩期前半に伴うが、前半代でも時期が下るにつれ少なくなる傾向にある。1198～1202は浅鉢である。1198と1200は口縁部がシャープに直立する。外面の沈線は、粘土紐貼り付け時の段を利用したものである。1199は口縁部の立ち上りが、1198などに比べるとシャープさがなくなる。1201は端部に断面方形の粘土紐を継ぎ足す。内面には段が形成される。1202は口縁部が上方に内湾するもので、リボン状突起が貼り付けられる。以上の浅鉢は、坂口式及びそれに後続する段階に位置づけられる。1203～1207は底部である。このうち1203～1205は凹み底である。1206は平底。1207はやや厚底気味の底部となる。

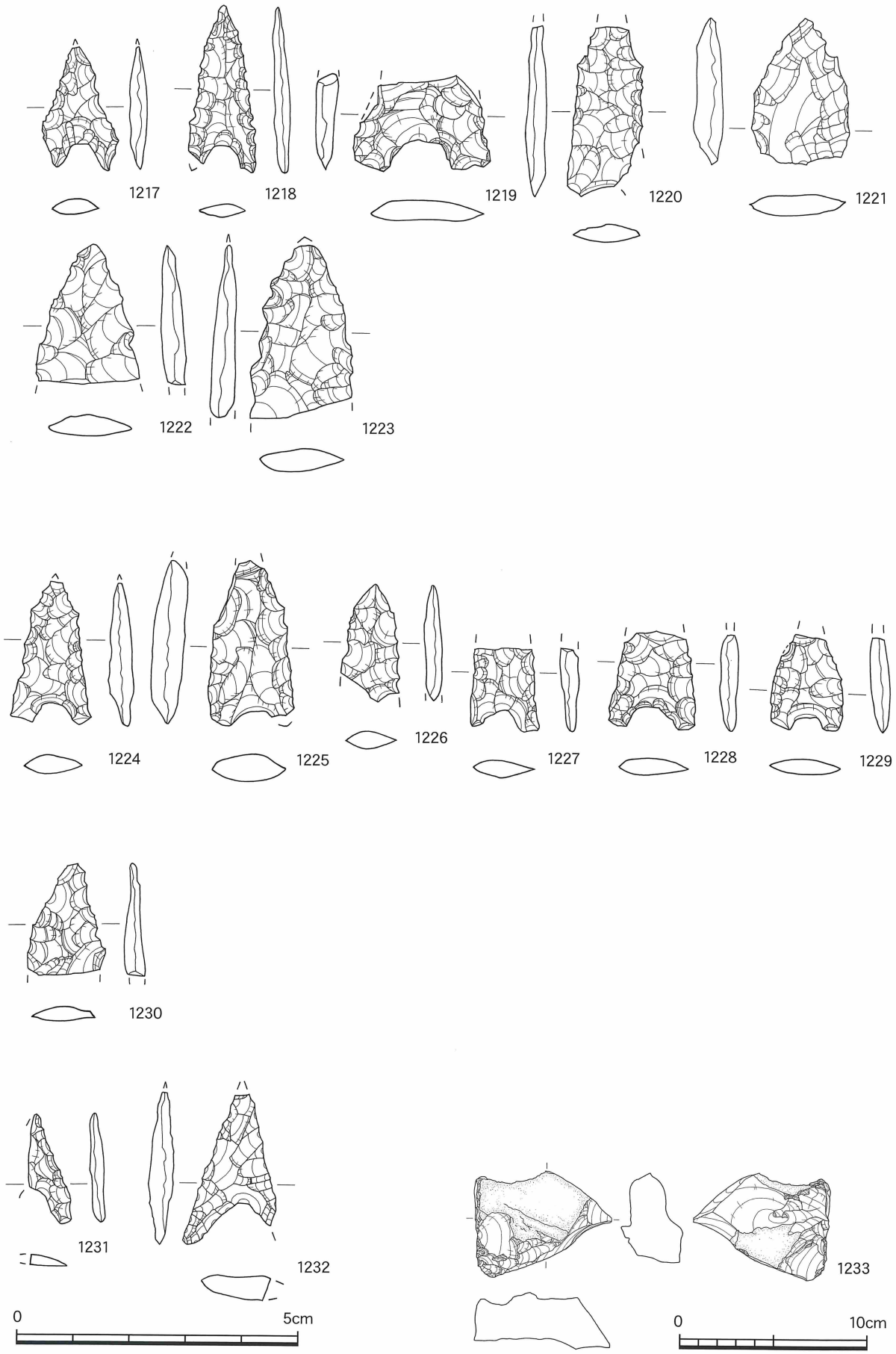
石器のうち1217～1230は石鏃で、石材は全て姫島産黒曜石である。1217、1218は側縁が先端部近くでわずかに角度を変え五角形状を呈する。基部はU字状の比較的浅い抉りをいれる。1219は基部の資料で、1218と同様な抉りが入る。1220は肩部に明らかな段をつけ五角形状にしたものである。基部はわずかに抉りをいれる。1221は未成品の可能性をもつ。1222、1223は先端部の資料である。1224と1225は先端に近い部分で明確な段をつけ五角形状にする。基部はU字状の比較的浅い抉りをいれる。1226は側縁が先端部近くでわずかに角度を変え五角形状を呈する。1227～1229は基部で、1224などと同様な形態を呈する。1230は先端部である。1233は姫島産黒曜石石核である。大きさは、現状で5.7×7.3cmである。表裏面に各々自然面が部分的に残る。1234～1240は敲石・磨石である。1234はやや厚みを有する円礫を使用しており、数箇所に敲打痕が残る。1235も円礫の数箇所に敲打痕がみられる。1236は扁平気味の円礫を使用しており、磨り面と敲打痕が残る。1237と1238はやや長めの素材を使用している。1237は下面に磨り面がみられる。1238は一部欠損するが、上面と側面



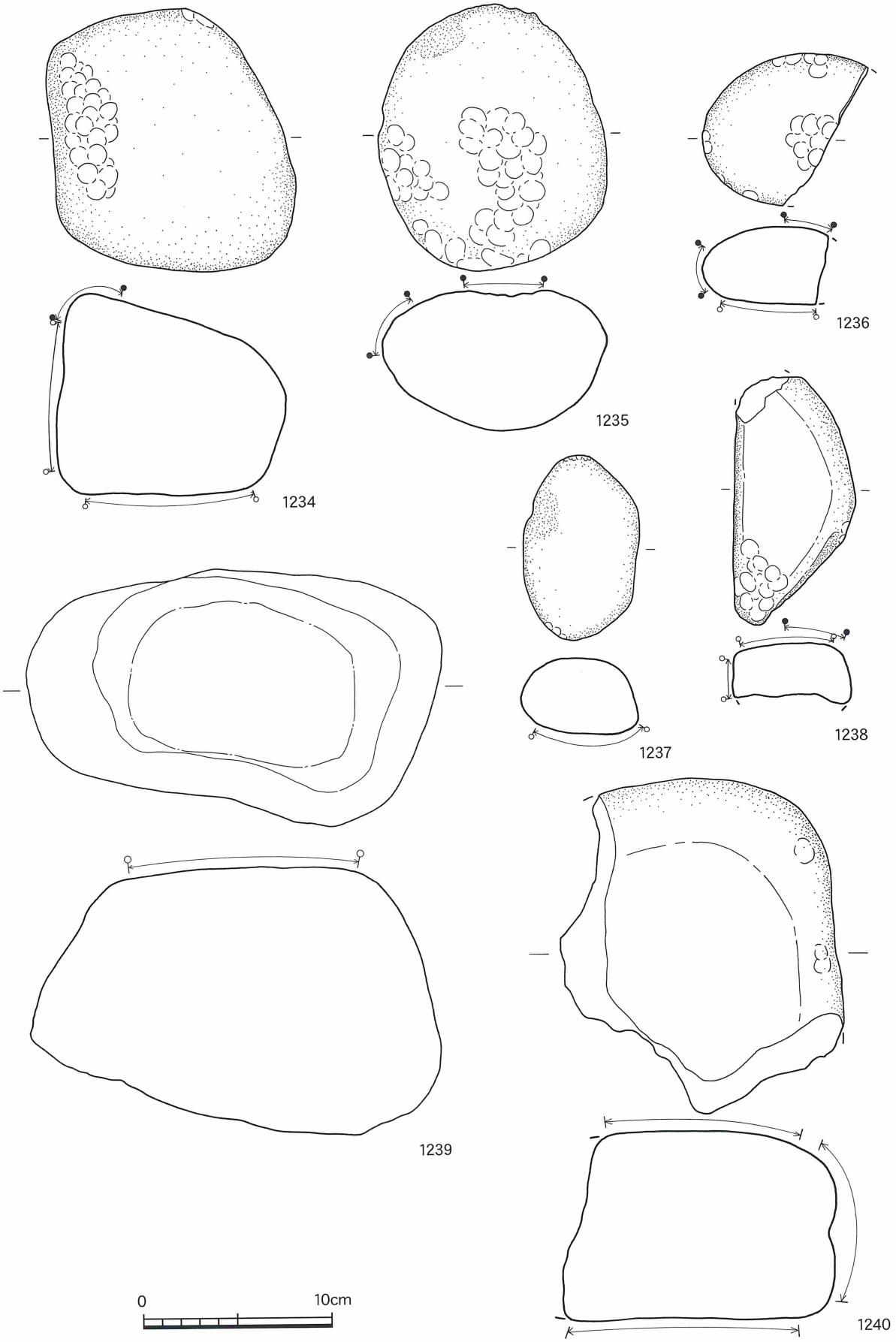
第91図　岩鼻岩陰遺跡12区平面図・土層図(S=1/50)



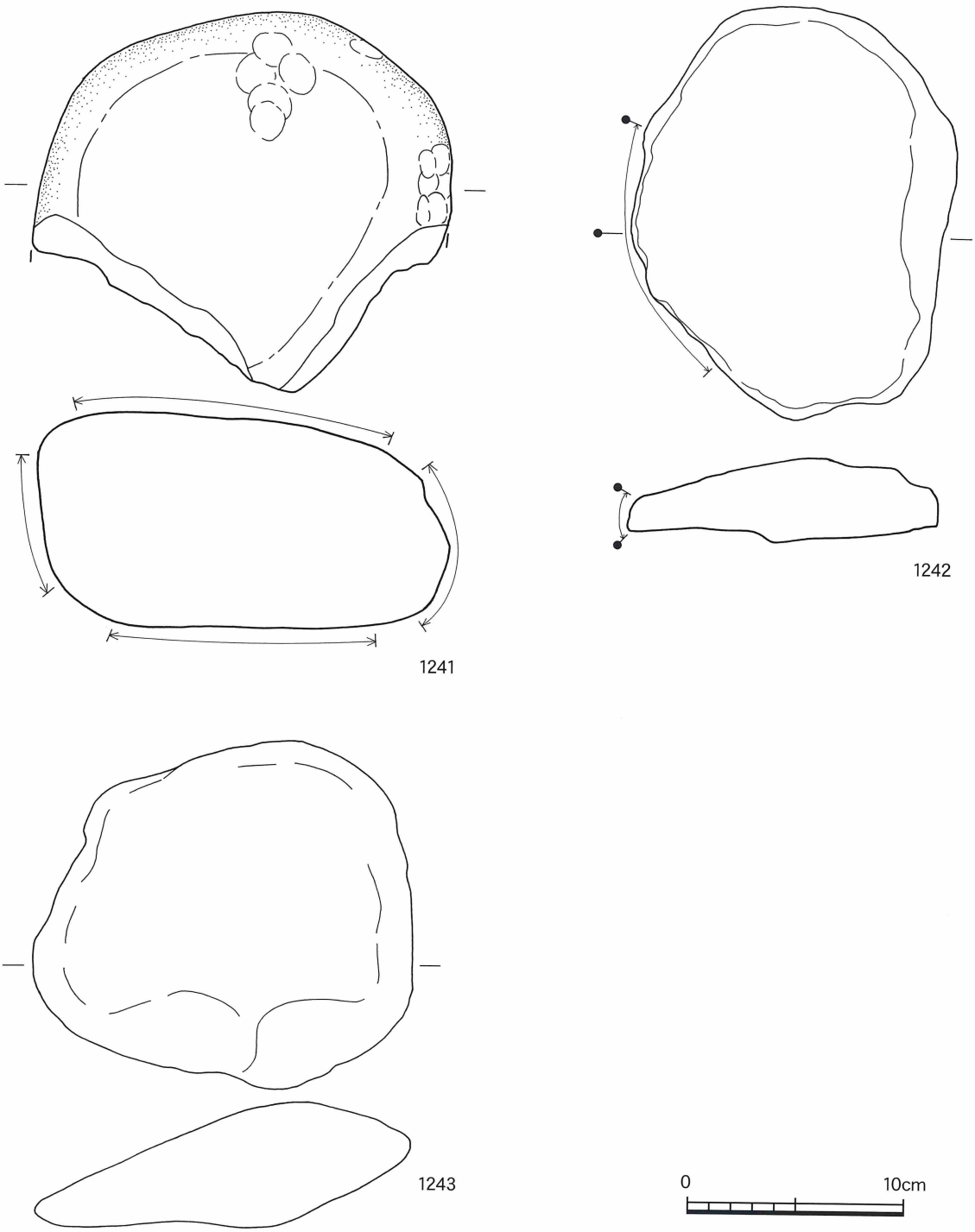
第92図　岩鼻岩陰遺跡12区出土縄文土器(S=1/3)



第93図　岩鼻岩陰遺跡12区出土石器1(S=1/1，S=1/3)



第94図　岩鼻岩陰遺跡12区出土石器2（S=1/3）

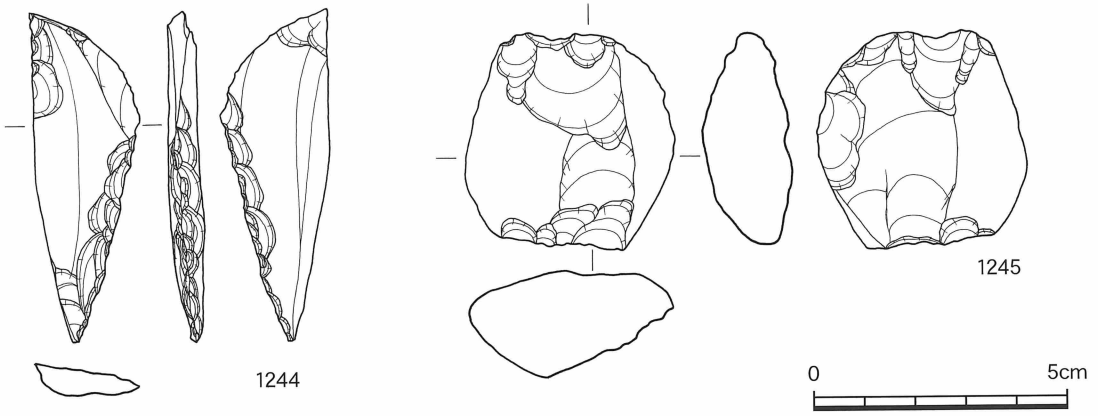


第95図　岩鼻岩陰遺跡12区出土石器3(S=1/3)

に磨り面が、また上面に敲打痕が各々残る。1239はやや大型の円礫を使用しており、上面に磨り面がある。1240も欠損品で、上下面及び側面に磨り面が残る。1244はサヌカイトの横長剥片を利用したスクレイパーである。1245は石錘である。

Ⅱ2層（第92図1208～1215、第95図1241～1243）

土器のうち1208～1211はⅡ2層の中でも、やや上層から出土するものである。1208は深鉢の波頂部である。2条の沈線間に縄文が施され、刺突が加わる。後期の西平式である。1209は頸部から口縁にかけて緩やかに外反するものである。口縁端部外面を帯状に肥厚させ、そこに縄文を施す。頸部は無文である。後期の石町式で



第96図　岩鼻岩陰遺跡12区出土石器4(S=2/3)

ある。1210は無文の深鉢である。1211は平底の底部である。

1212～1215は、Ⅱ2層の中でやや下層から出土したものである。1212は内湾する深鉢口縁で、外面に沈線が施される。1213は口縁外面をやや肥厚させ、3条の沈線と疑似縄文を施す。1214は深鉢の頸部から胴部にかけての資料で、頸部は無文、胴部に疑似縄文を施文する。1212～1214は石町式である。1215は平底の底部である。

石器のうち1241～1243は磨石・敲石・台石である。1241は一部欠損するが、上下面及び側面に磨り面がみられる。1242は扁平な素材を利用したもので、薄くなった端部に敲打痕がみられる。1243は台石であろう。

Ⅳ層（第92図1216、第93図1231、1232）

1216は無文の深鉢である。内外面に条痕が施される。

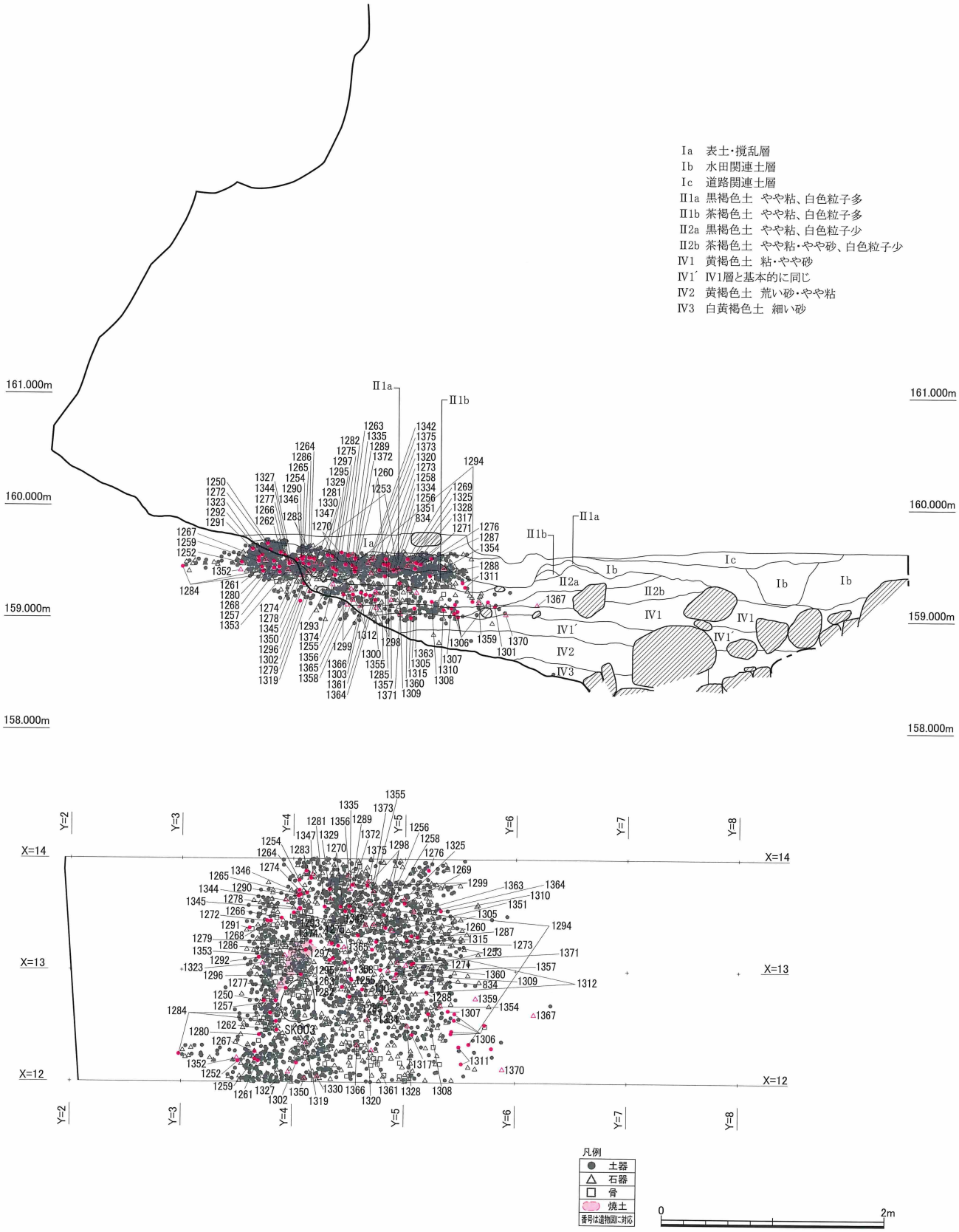
1231、1232は姫島産黒曜石製の石鏃である。両者とも二等辺三角形状を呈し、深い抉りがはいる。

16　13区

(1)　土層と遺物出土状況（第97図）

岩盤は、緩やかな凹凸をもち奥壁から急傾斜で下る。隣接する12区では、最奥部から3.8mのところでほぼ平坦になったが、本調査区では最奥部から5.0mでも平坦にならない。調査区の東側は0.3～0.7mの大小の礫が多数重なる状況である。これらは、旧河道が埋没する過程で順次残されたものと考えられる。岩盤に密着するものや岩盤から大きく浮くものまでみられた。標高は奥壁が160.45m、岩盤の最も低い部分が158.35mである。奥壁から上方については、岩体が斜方向に立ち上がる。その後奥壁から2.3m上方で一旦ほぼ水平になり、約1.0m川方向に突き出たのち再び垂直方向に立ち上がる。雨落ち線は奥壁から約2.8mである。遺物密集部分の約半分が雨落ち線の内側にあり、他は外側に広がる。

本調査区の層位について述べる。撹乱層等のⅠ層のうち、岩陰部分は奥壁から0.05～0.2mの厚さである。一段下がった旧県道敷き部分は、道路に関連する溝や造成土がみられる。そして、道路関連土層の下には水田関連土層がある。水田関連土層は厚いところで0.4mを測る。Ⅱ1層は、a層とb層の2層に分けられる。両層とも奥壁から4.5～4.9mまでしか残存しておらず、それより東側は水田関連土層などにより切られる。層厚はⅡ1a層、Ⅱ1b層とも0.15m程で、岩陰部から外に向かい高くなるように堆積する。遺物は上層のⅡ1a層からⅡ1b層にかけ連続的に出土するが、特に上層のⅡ1a層に集中する。奥壁から1.4m程の場所に焼土8がある。層位的にはⅡ1b層直上である。焼土の範囲は南北0.5m以上、東西0.3mである。焼土の中央に長さ0.4mの極めて浅い土坑状のものが切り込まれていた。焼土8及びこれを切る土坑は、縄文時代晩期の所産と考えられる。Ⅱ1層下にはⅡ2層がある。やはり、Ⅱ2a層とⅡ2b層の2層に分層することができる。両層ともⅡ1層よりは東に伸びるが、



第97図　岩鼻岩陰遺跡13区平面図・土層図（S=1/50）

Ⅱ1層と同様に水田関連土層などにより切られる。層厚はⅡ2a層が0.15m、Ⅱ2b層が数～0.15mである。Ⅱ2層も岩陰部分から外方に上るように堆積する。Ⅱ2層出土遺物は、Ⅱ1層に比べると非常に少ない。Ⅱ2層下には、Ⅳ層の河川堆積土がみられる。これらには大小の礫が含まれる。河川堆積の過程で残されたものであろう。土質は下層ほど砂質が強くなる。

遺物の平面的な分布をみてみると、Ⅱ1層の遺物が奥壁から2.0～4.0mの範囲に集中して分布する。この遺物集中範囲の中央に焼土8が見られる。遺物集中部の東側は包含層自体もあまり残存していないが、急速に遺物量を減じるようである。同様な状況は北側に隣接する12区でも見られたが、12区よりも遺物量が多く分布範囲も広い。Ⅱ2層の遺物についてもⅡ1層と同様な分布を示し、奥壁から4.0mより東側は遺物量が激減する。Ⅱ1層及びⅡ2層とも遺物集中部がすべて雨落ち線の内側にあるのではなく、半分が外に出る状況である。よって、何らかの構造物が雨落ち線の外側まで構築され、その内部で生活が行われていたと想定される。構造物に関係する遺構の検出を意識的に試みたが、確認にはいたらなかった。

⑵　遺物

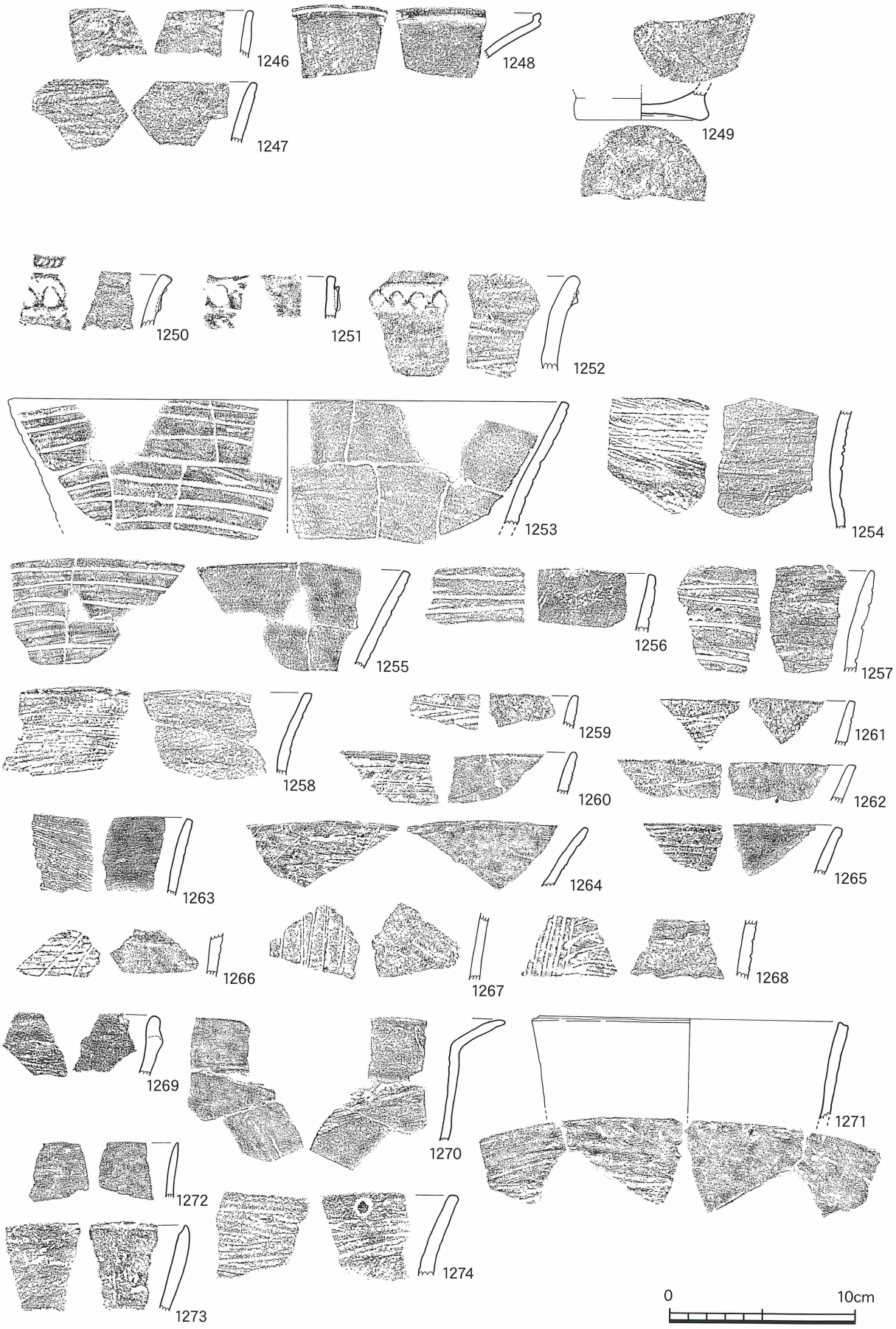
Ⅰ層（第98図1246～1249、第101図1318）

1246、1247は無文の深鉢である。縄文時代後晩期のものと考えられる。1248は晩期前半の浅鉢である。口縁部の立ち上りはシャープであるが、やや低平化がみられる。1249は平底の底部である。底面の縁部を肥厚させ、上げ底状を呈する。晩期の所産であろう。

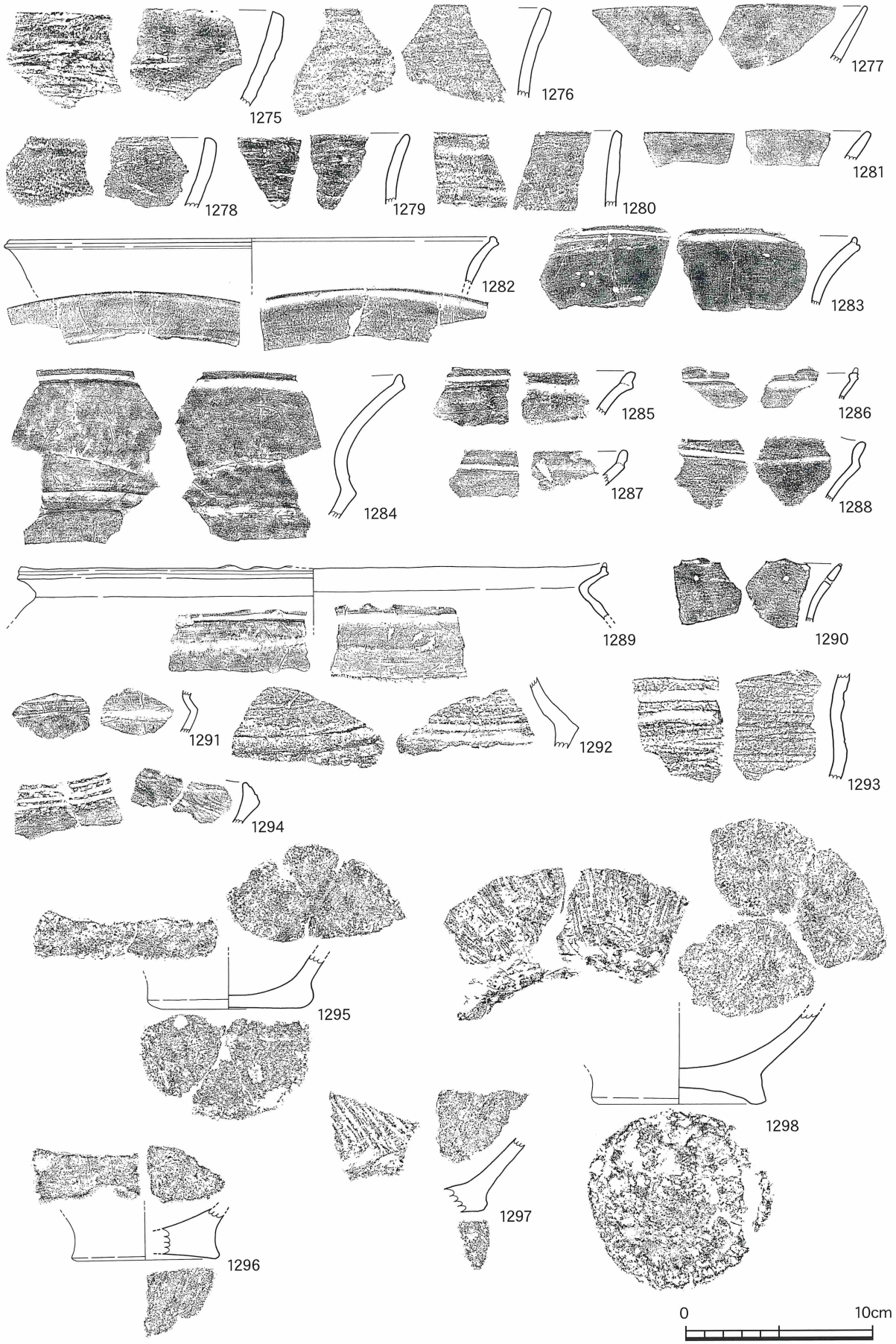
石器は1318の石鏃で、姫島産黒曜石製である。五角形状を呈するもので、側縁が直線的にのび先端部ちかくで角度を変える。基部は浅い抉りが施される。

Ⅱ1層（第68図834、第98図1250～1274、第99図1275～1298、第101図1319～1344、第102図1345～1349、第103図1350、1351、第104図1352～1354、第108図1372～1375）

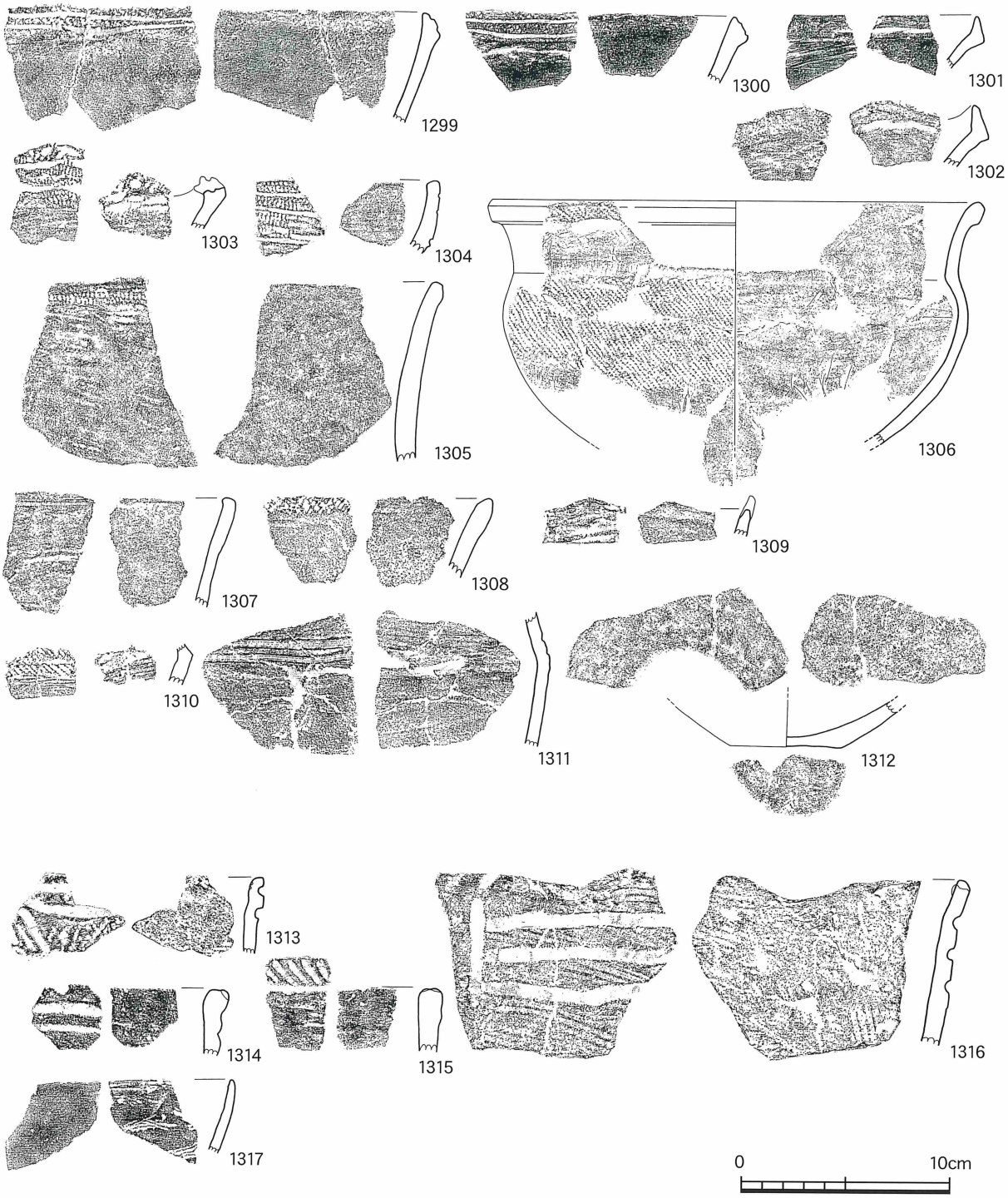
1250～1252は弥生時代早期の刻目突帯文である。1250、1251は幅の広い低平な突帯が貼り付けられ、太い刻みが施される。1253～1268、1293は縄文時代晩期前半に位置づけられる外面に沈線が施される深鉢である。これらは全体として、口縁帯の発達が著しく、沈線も細線化し縦位に施文されるものもあることから、坂口式に後出する段階に比定できよう。1253は外傾する口縁帯が発達する。外面には横走する沈線が間隔をあけ現状で7条施される。1254は口縁帯の立ち上り部である。口縁帯と体部を分ける段等はみられない。沈線は細沈線化がみられる。1255～1257も1254と同様なものである。1258～1262は細沈線化がさらに進行する。1258は外傾する口縁帯がやや外反気味である。条痕地に間隔をあけた横走の細沈線が施される。1259～1261も1258と同じように、条痕地に細沈線が施文される。1262の外面は条痕がみられず無文である。1263～1268は斜方向あるいは縦方向の沈線が施される一群である。沈線はいずれも細沈線化が著しい。1263は10条以上の細沈線が比較的密に右下がりに施文されている。1264、1265は左下がりの細沈線が間隔をあけて施文される。1266～1268は口縁帯下部の資料である。1266は斜めに、また1267は縦方向に各々施文される。1268は縦方向の沈線が5条以上密に施文され、それを中心に斜め方向の沈線が加えられる。1293はやや太目の沈線が施される。1269は深鉢で、粘土紐貼り付け時の段を利用し突帯状に仕上げる。晩期前半に比定される。1270は体部から口縁部が外方に折れるものである。体部及び口縁部とも比較的薄く仕上げられ無文である。1271～1281は内外面無文の深鉢である。以上の1270～1281は後晩期に位置づけられるものである。1282～1290は浅鉢の口縁部である。1282は口縁部立ち上りの低平化が著しいものである。1283は口縁部立ち上りの低平化がさらに進行し、わずかに立ち上りが認められるのみである。1284、1285も低平な口縁部立ち上りを呈するもので、粘土紐貼り付け時の段を利用し沈線としている。1286は低平化した口縁にリボン状突起が付される。1287、1288は口縁部立ち上りが比較的高いものである。両者とも口縁部が外傾気味に立ち上り、1288は波頂部をもつ。1289は口縁部の立ち上りが低平化したもので、低いリボン状突起が付く。1290は口縁部の立ち上りがみられないもので、低いリボン状突起が付けられる。また、口縁下に焼成後の穿孔がみられる。以上の1282～1290は晩期前半でも坂口式よりも後出するものと考えられる。1291は浅鉢の体部、1292は深鉢の肩部である。1294は波状口縁を呈する



第98図　岩鼻岩陰遺跡13区出土縄文土器1(S=1/3)



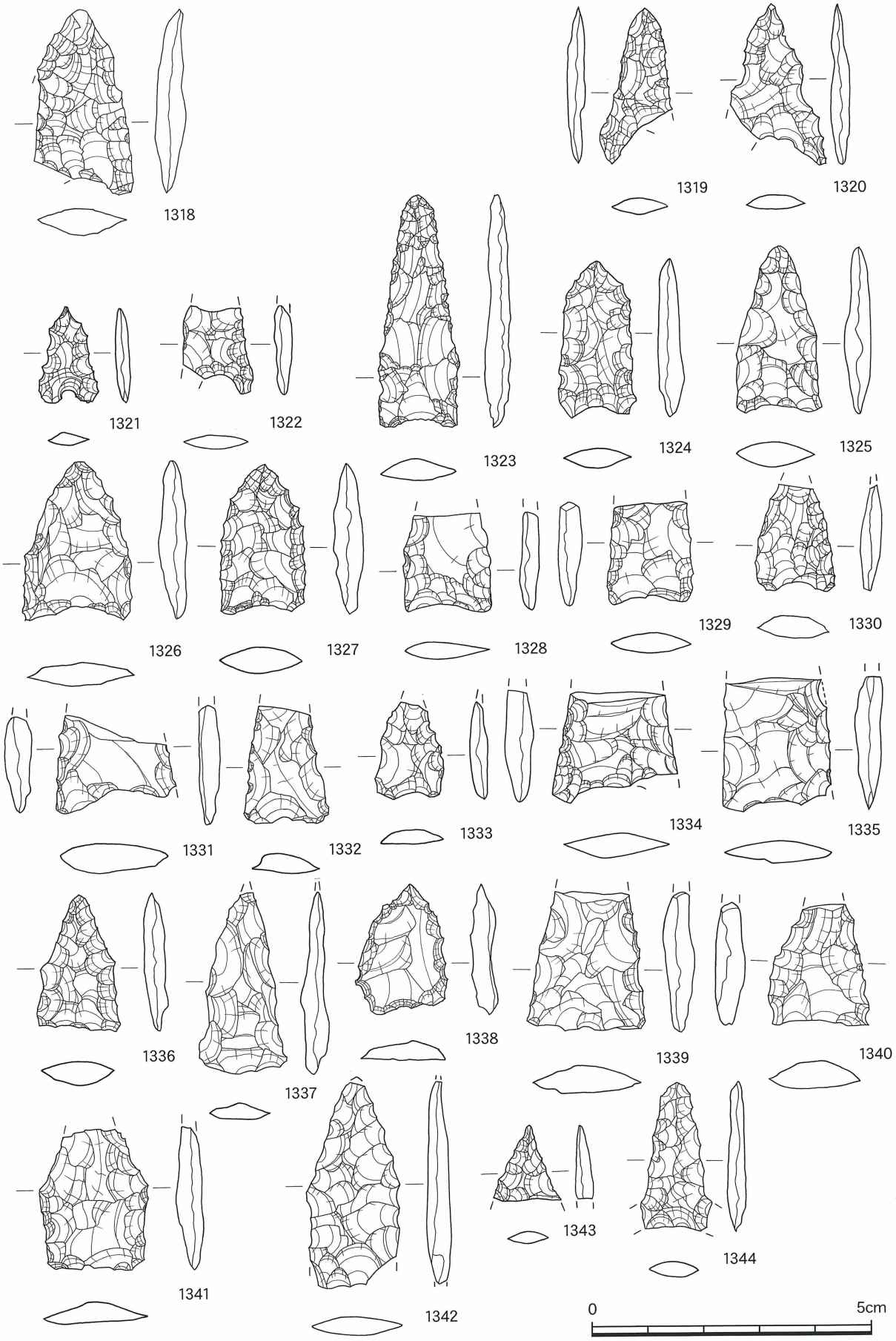
第99図　岩鼻岩陰遺跡13区出土縄文土器2(S=1/3)



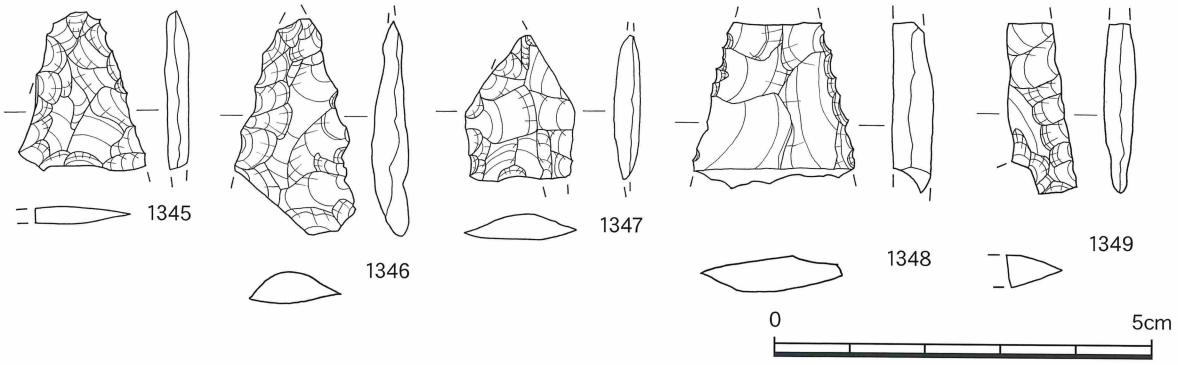
第100図　岩鼻岩陰遺跡13区出土縄文土器3(S=1/3)

もので、外面に3条の沈線と縄文がみられる。後期の西平式である。1295～1298は底部で、いずれも円盤貼付状の外観を呈する。晩期の所産であろう。

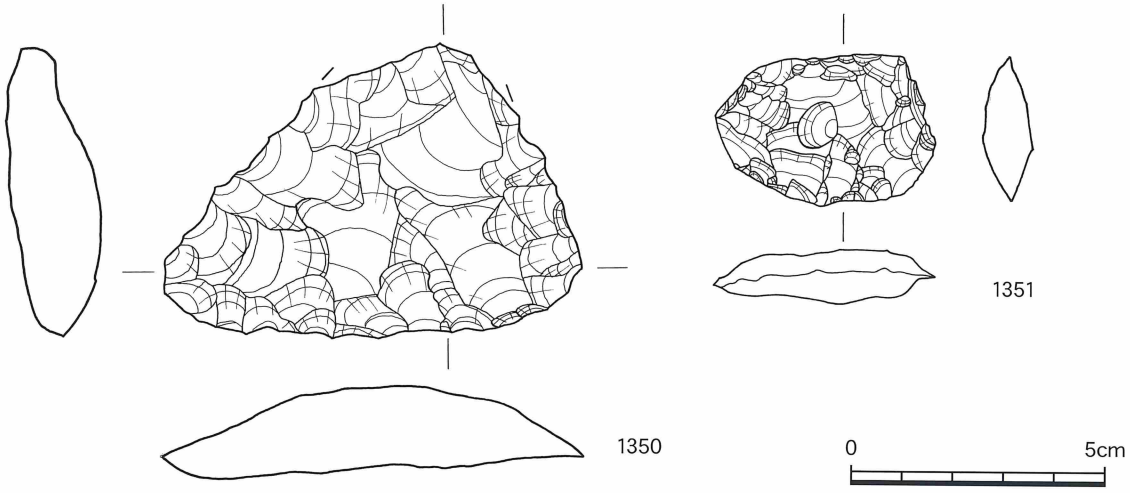
石器のうち1319～1349は石鏃で、1326、1331、1332、1335、1337、1339、1341、1348がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。欠損するものも多いが、形態の分かるもののほとんどが五角形状を呈する。将棋の駒状に肩部は張るが、肩の位置は様々で、基部に近い位置にあるものから先端に近いものまでみられる。抉りは浅いものが主体となる。このなかで、1319と1320は側縁が直線的にのび先端部ちかくで角度を変えるもので、



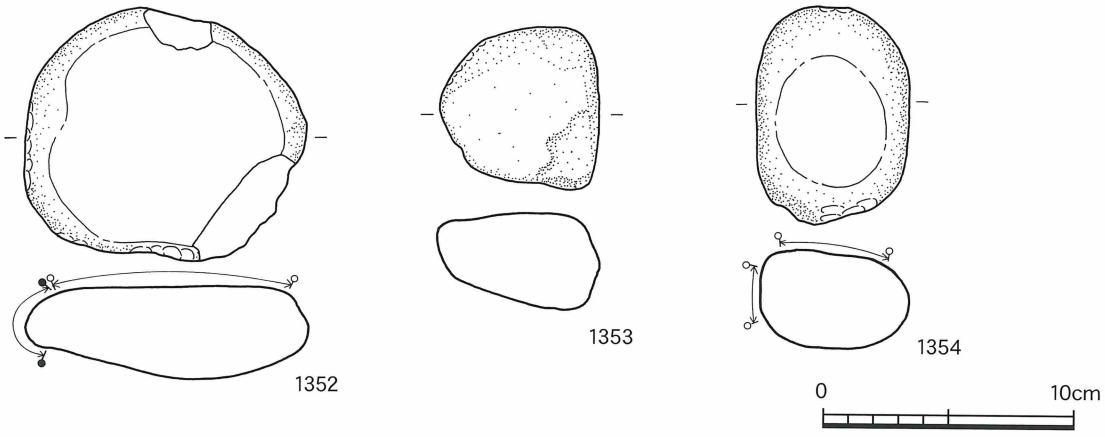
第101図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器1（S=1/1）



第102図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器2(S=1/1)

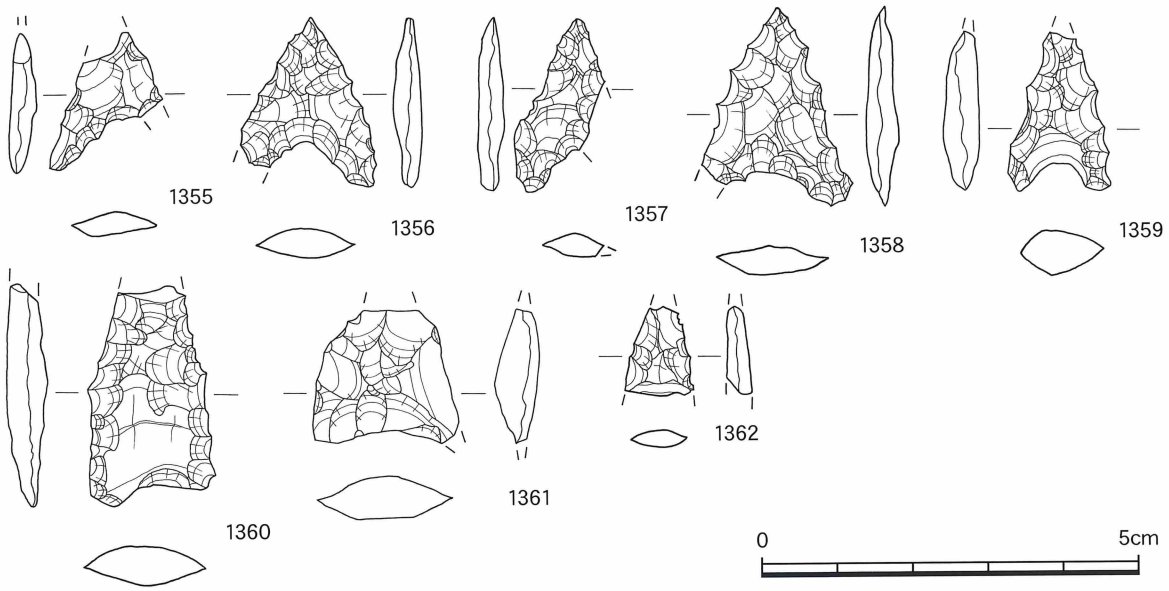


第103図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器3(S=2/3)

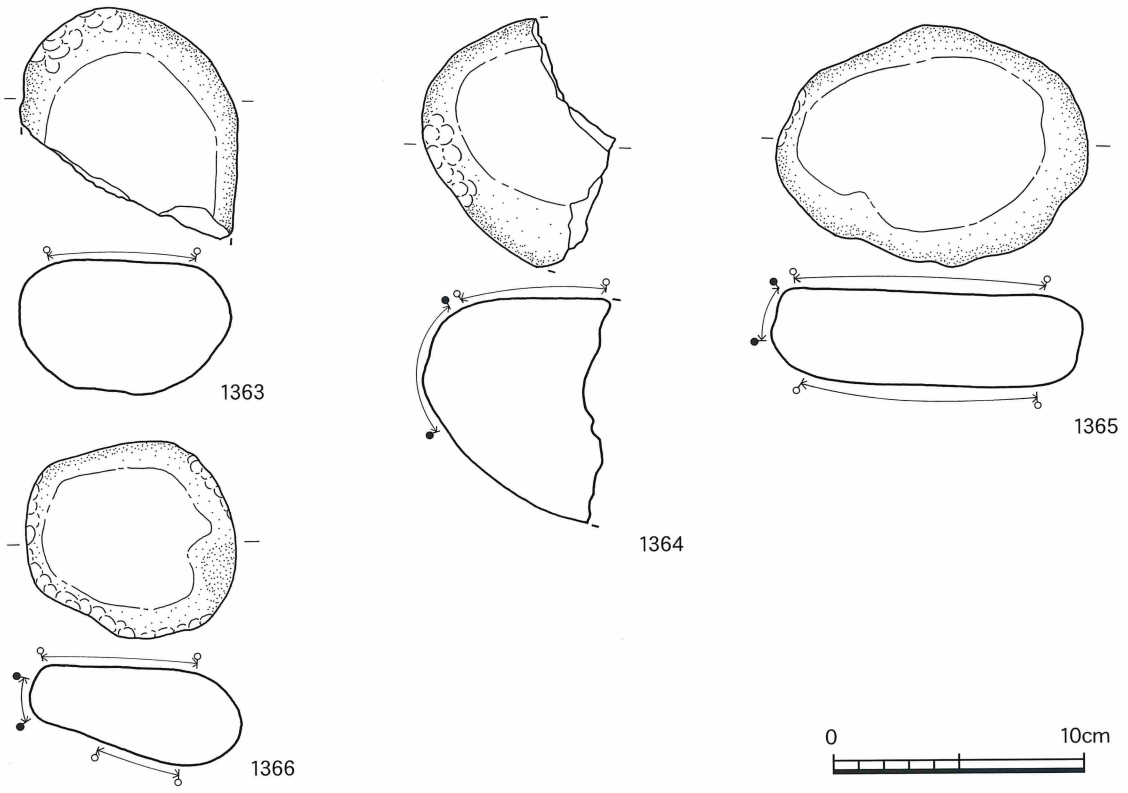


第104図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器4(S=1/3)

他に比べ抉りは深く低い三角形状を呈する。両者は他よりも古相か。1350はつまみ部を欠損する石匙の可能性をもつ。1351はスクレイパーである。以上は姫島産黒曜石製である。834、1352～1354は磨石・敲石である。834は円礫を利用したもので、上面に磨り面が残り、側面に敲打痕が見られる。1352は扁平な円礫で、上面に

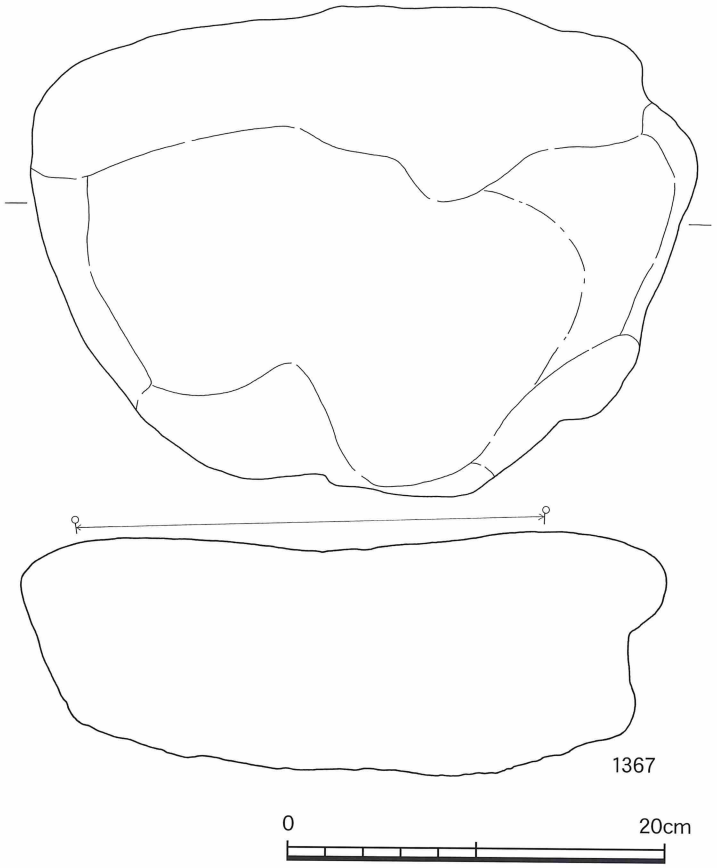


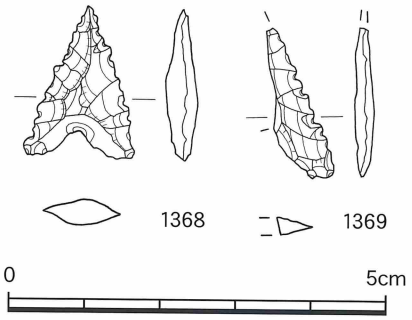
第105図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器5(S=1/1)

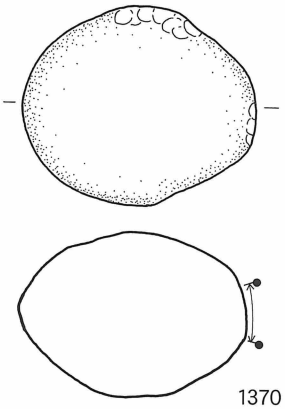


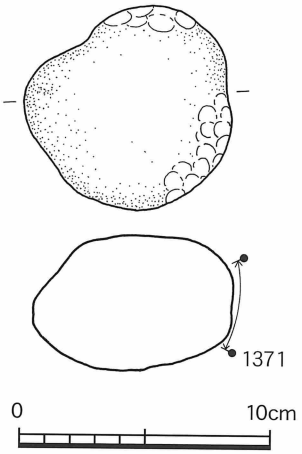
第106図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器6(S=1/3)

磨り面が、側面に敲打痕が残る。1353は側面に敲打痕がみられる。1354も円礫を利用したもので、上面と側面に磨り面がみられる。1372～1375はサヌカイト製の製品である。1372は縦長の石匙である。横長剥片の端部に両方からわずかに抉りをいれてつまみ部を作り出すと同時に、縁辺部に調整剥離を施す。1373も石匙。小型の剥片を利用したもので、小さなつまみ部を作り出す。1374は薄い横長剥片を利用したスクレイパーで縁辺部に調整剥離が施される。1375は横長剥片を利用したスクレイパーで、縁辺に剥離を加え刃部とする。







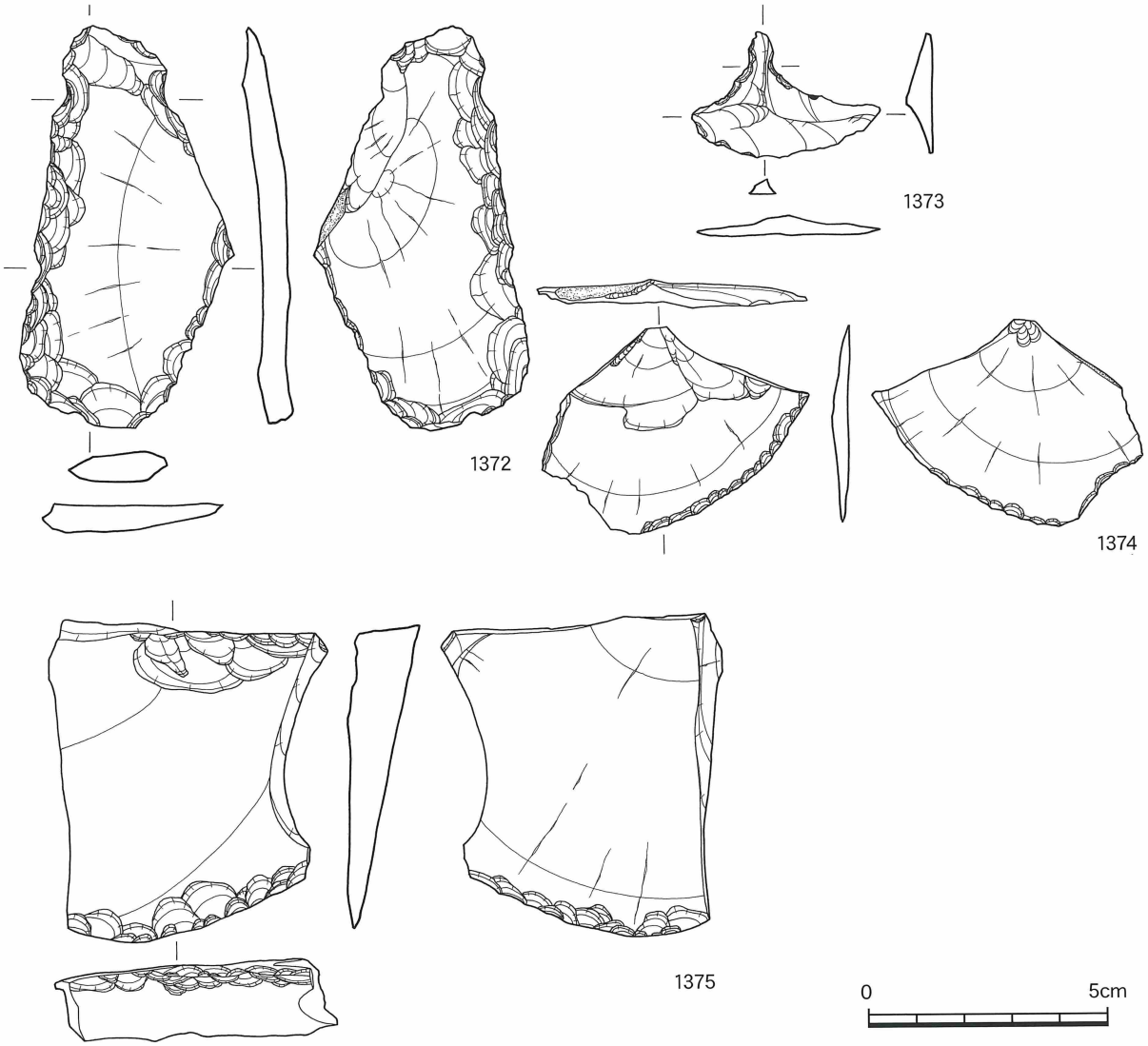


第107図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器7（S=1/1，S=1/3，S=1/4）

Ⅱ2層（第100図1299～1312、第105図1355～1362、第106図1363～1366、第107図1367）

1299、1300は口縁部外面に2条の沈線と縄文がみられる。後期の西平式である。1301、1302は口縁部がくの字状に立ち上がるが外面無文である。西平式であろう。1303は口縁部外面に疑似縄文が帯状に施文されるもので、粘土紐を付加し波頂部を形成する。波頂部上面には沈線や刺突がみられる。1304は外面口縁帯に沈線と疑似縄文が施文されている。1305は口縁部外面に疑似縄文が帯状に施される。頚部は無文である。1306は器高の低いもので、体部は半球形を呈し、頚部が比較的短く立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は端部が帯状に肥厚する。頚部は無文で体部と口縁部に縄文が施される。1308は口縁部外面に縄文が帯状に施文される。1307と1309は無文の深鉢である。1307は口縁部外面が帯状に肥厚し口縁帯を形成する。1309は波頂部である。1310は屈曲部より上に縄文が施される。1311は胴の屈曲部資料で、屈曲部の上部に巻貝による沈線が2条施される。1312は平底の底部である。以上のうち1303～1310は後期の石町式である。1311は時期が下る可能性がある。

石器のうち1355～1362は石鏃で、サヌカイト製の1362を除きすべて姫島産黒曜石製である。形態が分かるもののうち、1360は明確な肩部を有する五角形状のものである。基部の抉りは浅い。1361は欠損品であるが、基部の状況が1360に類似する。1355～1359は幅が広くやや深い抉りを有する。1363～1366は磨石・敲石である。1363は欠損品であるが、円礫の平坦な一面を磨り面として利用している。1364も欠損品である。平坦な一面を磨り面として利用している。加えて側面の一部に敲打痕が残る。1365は扁平な礫を利用している。上下面



第108図　岩鼻岩陰遺跡13区出土石器8(S=2/3)

を磨り面として、側面には敲打痕がみられる。1366はやや扁平な円礫で、上下面に磨り面が、側面に敲打痕が各々残る。1367は台石である。20.5×34.0cmで、上面の平坦面を磨り面として利用している。

Ⅳ層（第100図1313～1317、第107図1368～1371）

1313は口縁部が直立する深鉢である。外面は縄文地に横走・斜走の沈線が施される。1314も口縁部直立の深鉢である。外面には凹線状のものが横走する。口縁端部は外側がやや肥厚し、刻みをいれる。1315は内外面無文である。器厚はやや厚めで、口縁部直立する。口縁端部上面に浅い刻みがみられる。1316は口縁部が直立する深鉢である。外面は条痕地に、凹線が施される。凹線は口縁下に集約されており、3条の横走凹線が縦位の短い凹線に切られる。これは縄文時代後期初頭の西和田式である。1313～1315も1316と同様もしくは前後する時期に比定されよう。1317は器厚の薄い無文土器である。

石器のうち1368、1369は姫島産黒曜石製の石鏃である。両者とも二等辺三角形状の形態を呈する。1370、1371は敲石である。円礫を利用したもので、端部に敲打痕がみられる。

17　14区

(1)　土層と遺物出土状況（第109図）

奥壁近くには、近世以降の所産と考えられる岩盤を方形に穿った遺構（SK001）がある。しかし最奥部がわずかに残存しており、岩盤は緩やかな凹凸をもち奥壁から急傾斜で下っていたと思われる。最奥部から約2.0mのところで平坦気味になる。この平坦部は幅1.4mで、川方向に傾斜する。再び若干傾斜した後に、奥壁から4.3mのところで平坦になる。ここには、0.1～0.7mの大小の礫が多数重なる。旧河道が埋没する過程で順次残されたものと考えられる。標高は奥壁が160.2m、最初の平坦面が158.8～158.9m、岩盤の最も低い部分が158.2～158.3mである。奥壁から上方については、斜方向に立ち上がり、その後奥壁から2.8m上方で垂直気味になる。雨落ち線は奥壁から約2.8mである。遺物密集部分の約半分が雨落ち線の内側にあり、他は外側に広がる。

本調査区の層位について述べる。撹乱層等のⅠ層は、奥壁に近い部分を除き調査区全体にみられる。川に近い調査区の東端には水田関連土層が残る。Ⅱ0層は弥生時代早期に比定できる層で、奥壁に近い部分に約1.0m残存する。これには、焼土7が伴う。焼土7は東西0.4m、南北0.2m以上、厚さ数cmである。弥生時代早期の遺物は各調査区で出土しているが、Ⅱ1層などから縄文時代晩期の遺物と混在する状況で、Ⅱ1層と明確に区別してとらえることはできなかった。このようにⅡ0層が残存するのは本区と15区のみである。Ⅱ0層下にはⅡ1層がみられるが、奥から約2.5m残存するのみである。Ⅱ1層はa層、b層、b`層の3層に分けられる。遺物は上層のⅡ1a層とⅡ1b層に集中する。Ⅱ1b層下には焼土6がみられる。焼土6は東西0.5m、南北0.3m以上で、厚さは数cmである。Ⅱ1b`層はⅡ2層への漸移層的なもので、奥から約1.6mのみ確認することができる。遺物量はⅡ1a層やⅡ1b層に比べるとかなり少ない。また、焼土6の南側0.3mに焼土5がある。径0.3mで層位的にはⅡ1a層からⅡ1b層にかけてみられる。Ⅱ1層下にはⅡ2層があり、Ⅱ2a層とⅡ2b層の2層に分層することができる。両層ともⅡ1層よりは東に伸びるが、水田関連土層により切られる。層厚はⅡ2a層が0.05～0.2m、Ⅱ2b層が0.05～0.1mである。Ⅱ2層は岩陰部分から外方に上るように堆積する。Ⅱ2層出土遺物は、Ⅱ1層に比べると非常に少ない。Ⅱ2層の下には、Ⅳ層の河川堆積土がみられる。これらには大小の礫が含まれ、下層ほど砂質が強くなる。

本調査区は、試掘トレンチ1と重複する。トレンチ部分の遺物がドットされていないが、本来は隙間なく遺物が分布していたものと思われる。遺物の平面的な分布をみてみると、Ⅱ0層、Ⅱ1層、Ⅱ2層とも遺物が奥壁から1.5～4.0mの範囲に集中して分布する。この遺物集中範囲に伴い、Ⅱ0層には焼土7が、Ⅱ1層に伴い焼土5、焼土6が形成されている。遺物量はⅡ1層が圧倒的に多い。また、Ⅱ1層には大型の台石も数個みられることから、焼土の存在と併せ生活空間の中心的な場であったことをうかがわせる。

(2)　遺物

Ⅰ層（第110図1376、第113図1428、第122図1475）

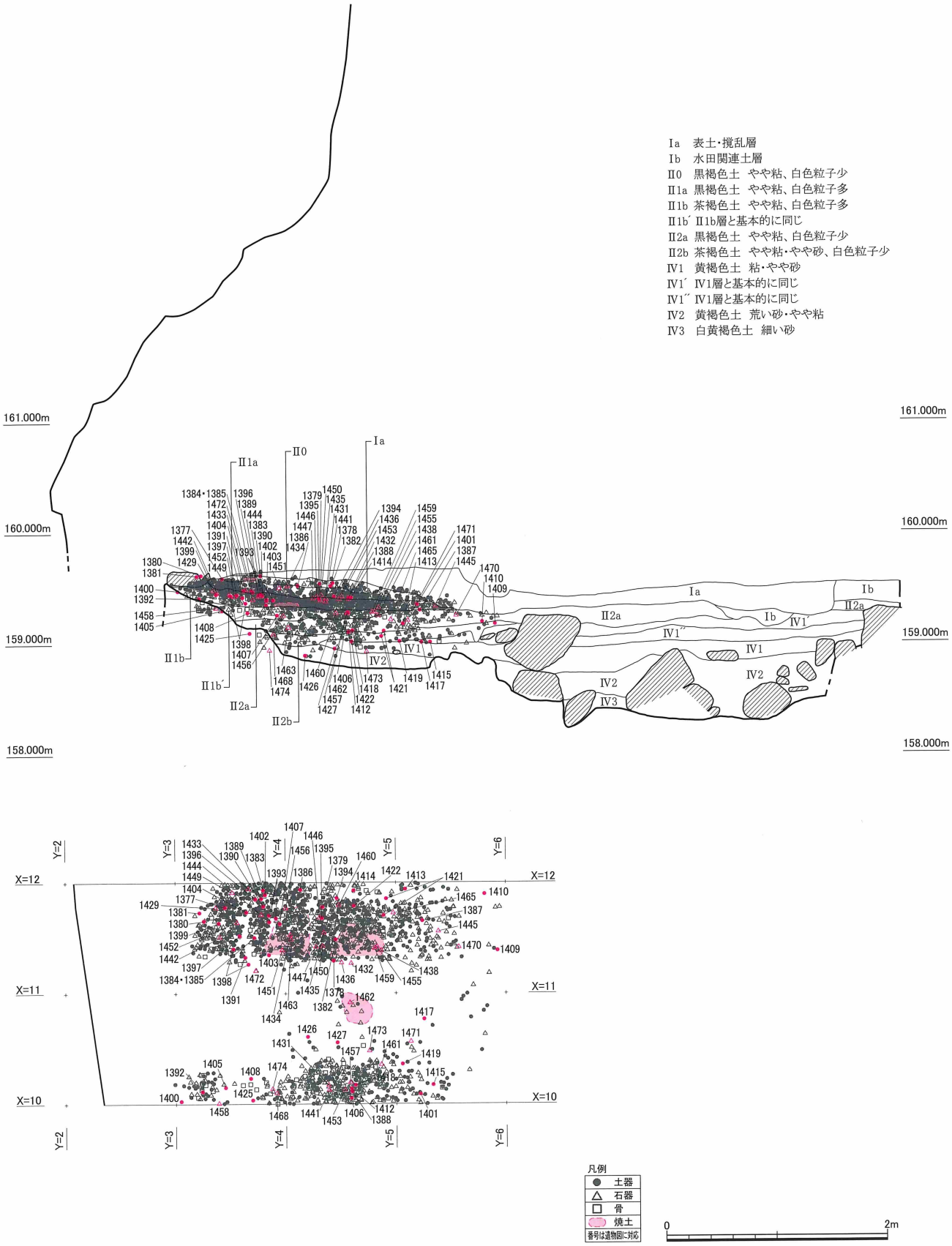
1376は平底の底部である。縄文時代後晩期のものか。1428はサヌカイト石核である。1475は姫島産黒曜石製の石鏃である。基部は平基で、側縁は脚部から先端に向かい斜めに伸びるが、口縁部近くで角度を変え先端にいたる。

Ⅱ0層（第110図1377～1382）

1377は刻目突帯文甕である。口縁下に断面三角形の突帯を付し、大きな刻みを施す。また、口縁端部上面には浅い刻みが連続的にみられる。1378は口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、大きな刻みを付す。1379も口縁下に断面三角形の突帯を付し、小さな刻みを施す。1380は口縁部近くが外反し、刻目突帯を貼り付ける。以上は弥生時代早期に比定される。1381、1382は無文土器で、1381は波状を呈する。

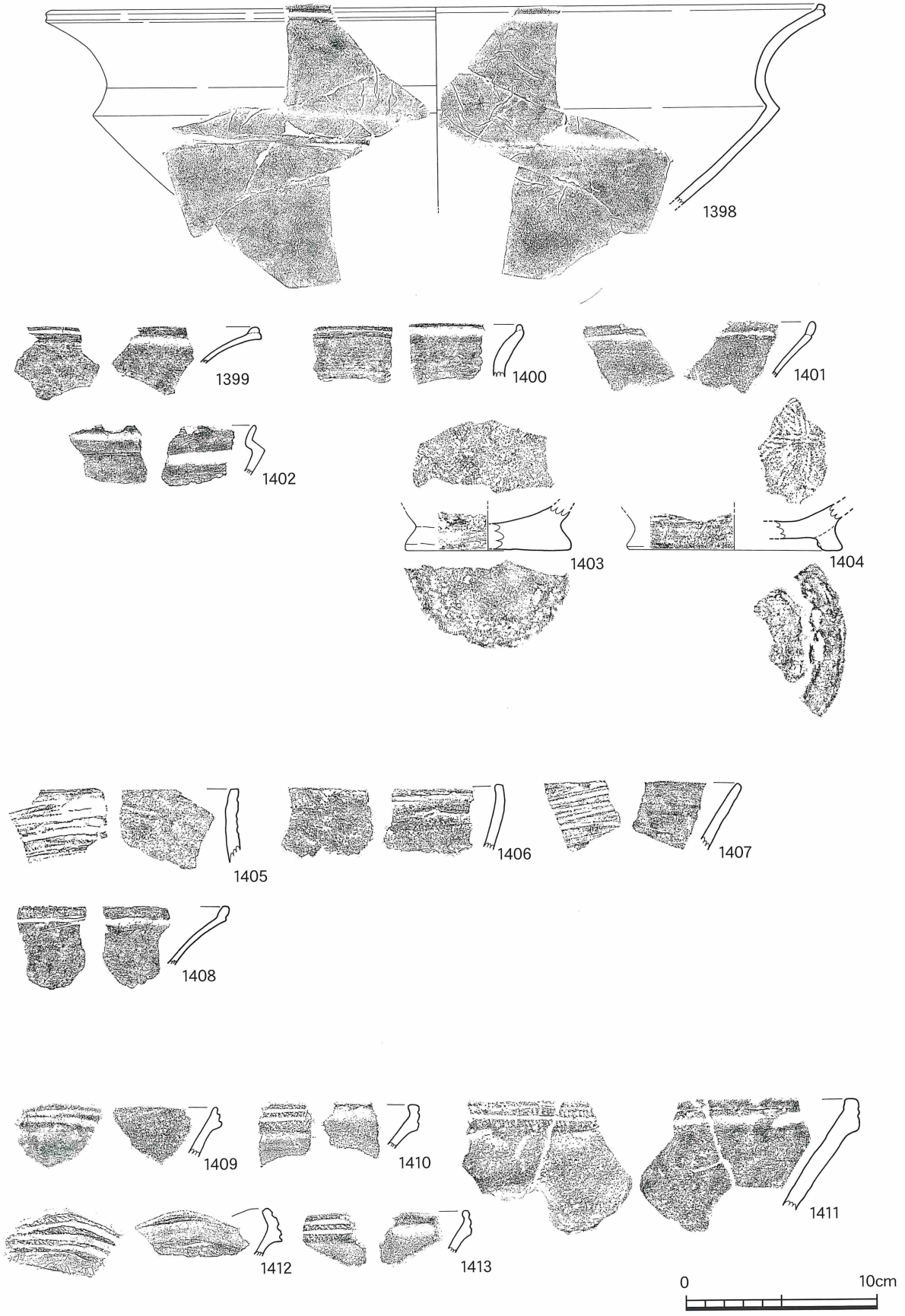
Ⅱ1層（第110図1383～1397、第111図1398～1408、第112図1414、第114図1429～1449、第115図1450～1452、第116図1453、第117図1454～1460、第118図1461、1462、第121図1471、1472）

1383～1387は弥生時代早期の刻目突帯文甕で、Ⅱ0層からの落ち込みと考えられる。1383は口縁下に断面三角形の突帯を付し、大きな刻みを施す。1384は口縁端部が細くなり、外面口縁下が段状を呈する。刻みはこの

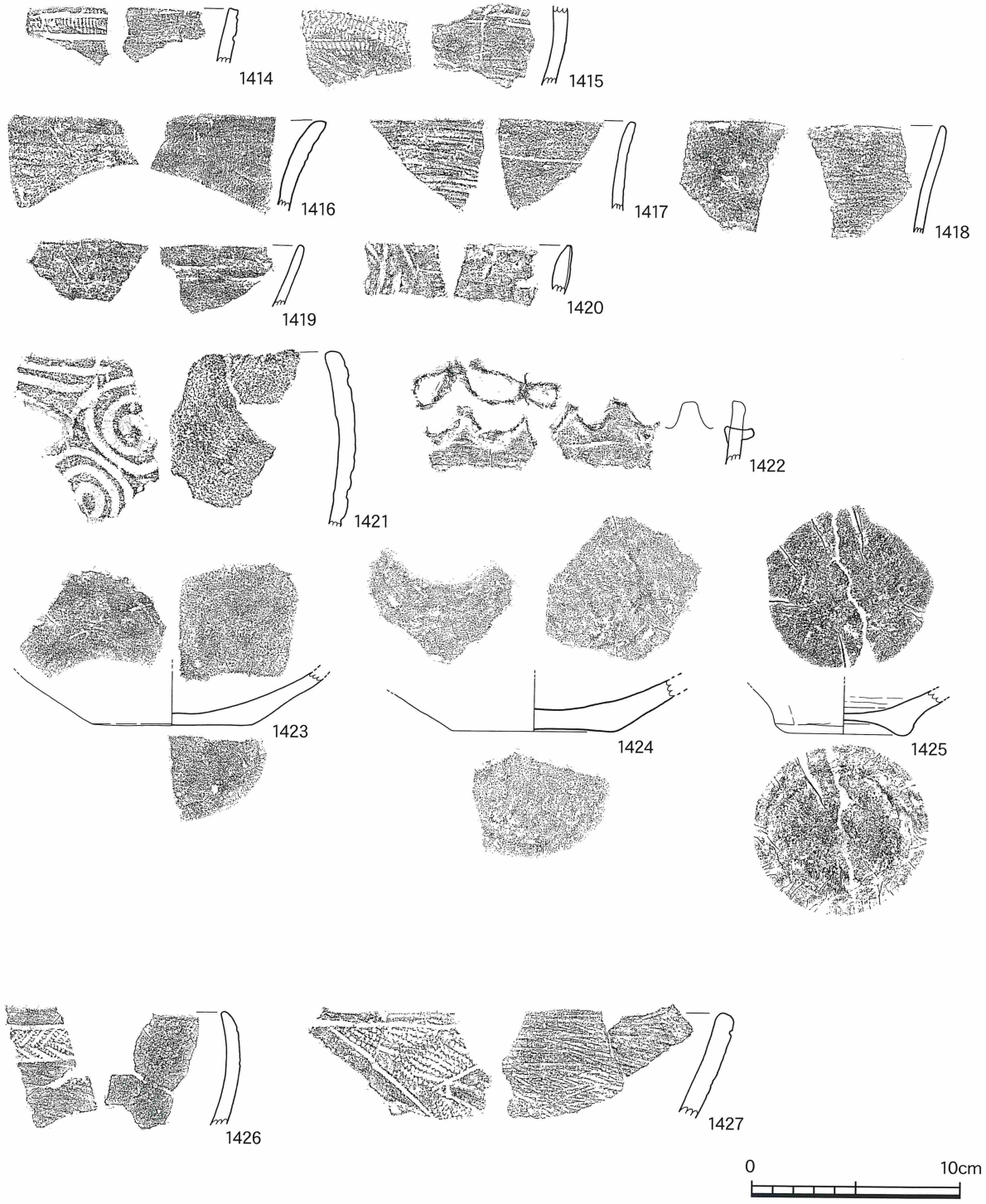


第109図　岩鼻岩陰遺跡14区平面図・土層図(S=1/50)

第110図　岩鼻岩陰遺跡14区出土縄文土器(S=1/3)



第111図　岩鼻岩陰遺跡14区出土縄文土器2（S=1/3）

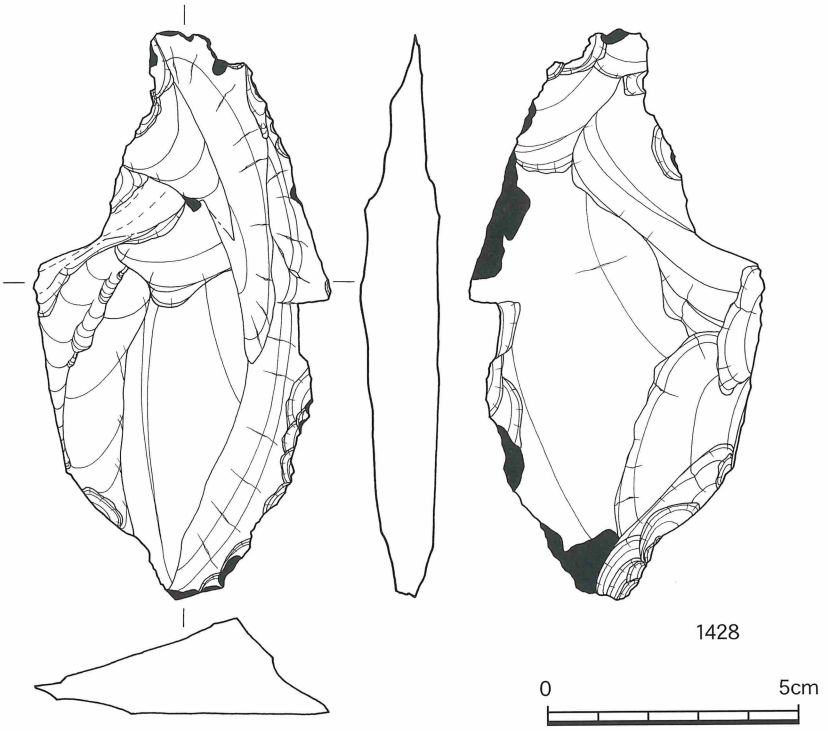


第112図　岩鼻岩陰遺跡14区出土縄文土器3(S=1/3)

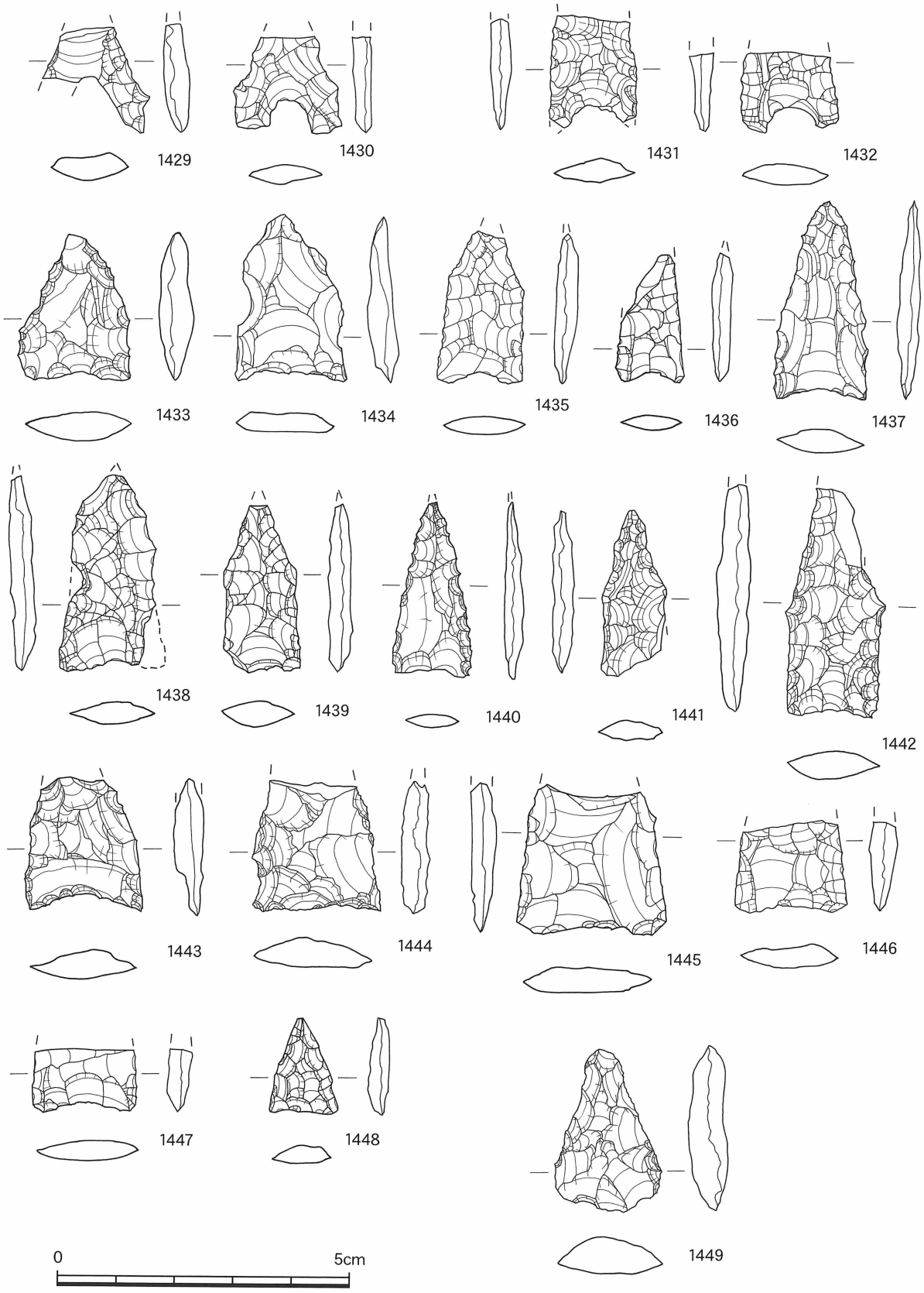
段状の部分に付される。1385は口縁端部外面に断面三角形の突帯を付し、刻みを加える。1386は大きな刻みを有する突帯を張り付ける。1387も口縁端部外面に断面三角形の突帯が付され、刻みが施される。1388、1389は口縁部外面に沈線をもつ深鉢である。両者とも細沈線が縦位に施される。上菅生B式直前あるいは併行する段階に位置づけられる。1390は粘土紐接合の際の段を利用し突帯状に表現したもので、内外面条痕調整である。晩期前半の所産である。1391～1397は内外面無文の深鉢である。ナデ調整あるいは条痕調整が施される。1398～1402は浅鉢である。1398は復元口径40.0cmを測るものである。頸部立ち上がり部で稜をもち、頸部は大きく外反する。口縁部が頸部から直立気味に立ち上がるが、低平化が著しい。口縁外面には1条の沈線がみられるが、粘土紐接合時の段を利用したものである。1399も口縁立ち上がり部の低平化が進行したものである。1400の口縁部は1398、1399に比べ細い粘土紐を貼り付け、退化傾向が強い。1401は口縁部の立ち上がりが緩やかで、粘土紐接合時の段を利用した沈線が1条みられる。以上の浅鉢は晩期前半の新相に比定できる。1402は体部がくの字状に稜をもち、口縁部が外傾し短く立ち上がる。上菅生B式併行段階に位置づけられる。1403、1404は深鉢の底部である。1403は底面に貼り付けを行い厚底にする。1404は粘土紐を貼り付け高台状にする。1414は外面に沈線と疑似縄文がみられる。後期の石町式か。

1405～1408は、遺物が集中するⅡ1a層の下層であるⅡ1b層から出土したものである。1405は口縁外面に横走沈線を施す深鉢である。晩期前半の所産である。1406、1407は内外面無文の深鉢口縁部である。1406は内湾気味である。1408は浅鉢である。やや外傾する口縁部が立ち上がり、外面に沈線が1条みられる。

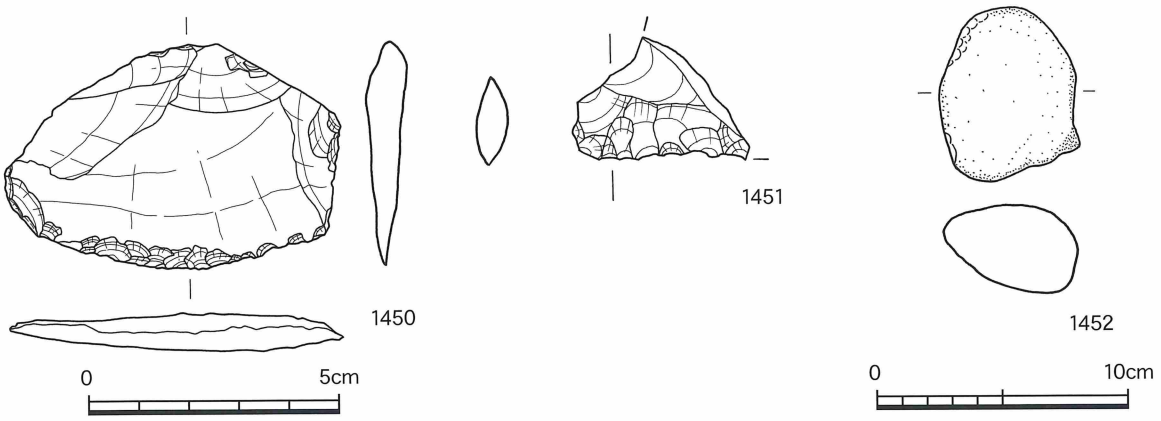
石器のうち1429～1449、1454～1460は石鏃である。このうち1454～1460は、遺物が集中するⅡ1a層の下層であるⅡ1b層から出土したものである。1429～1449のうち、1433、1434、1437、1440、1443、1445はサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。全体の形態が分かるもののうち、1429、1430を除き他はすべて五角形状を呈する。五角形状を呈するものの基本形態は、1435などにみられるように基部が緩やかにわずかに凹み、両側縁が直線的にのび、肩部から先端に向かい尖る。肩部の位置は個体によりバラツキがみられ、低い位置にあるものや先端に近い位置にあるものまでみられる。また、肩部をわずかに外方に尖らせ強調するもの（1439、1441、1442、1445）もある。1429、1430は脚部が外方に張り、やや深い抉りを有するものである。1449は未成品か。1454～1460はすべて姫島産黒曜石製である。1455を除き五角形状を呈する。1454は長さが短く抉りも深いもので、五角形状を呈する一群の中においては様相をやや異にする。1450、1451はスクレイパーである。1450はサヌカイト製で、薄い横長剥片を利用し縁辺部に調整剥離を施し刃部とする。1451は姫島産黒曜石製である。1452、1453、1461、1462、1471、1472は敲石、台石である。



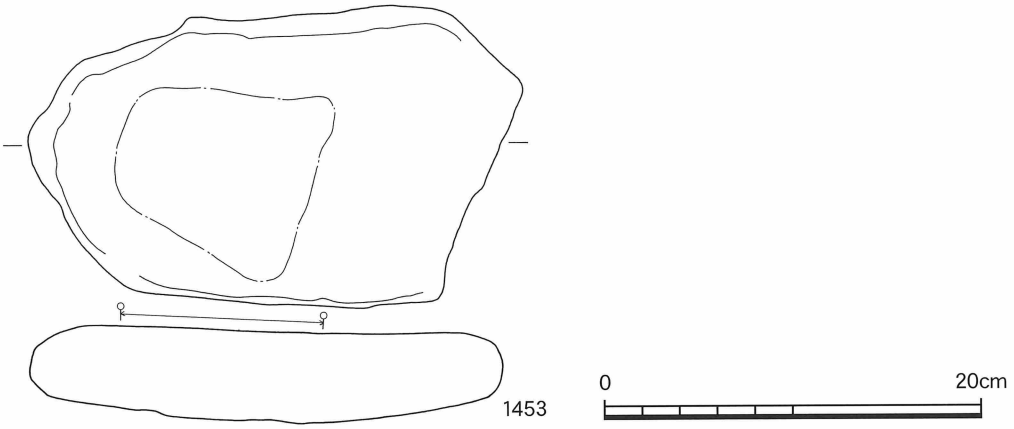
第113図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器1（S=2/3）



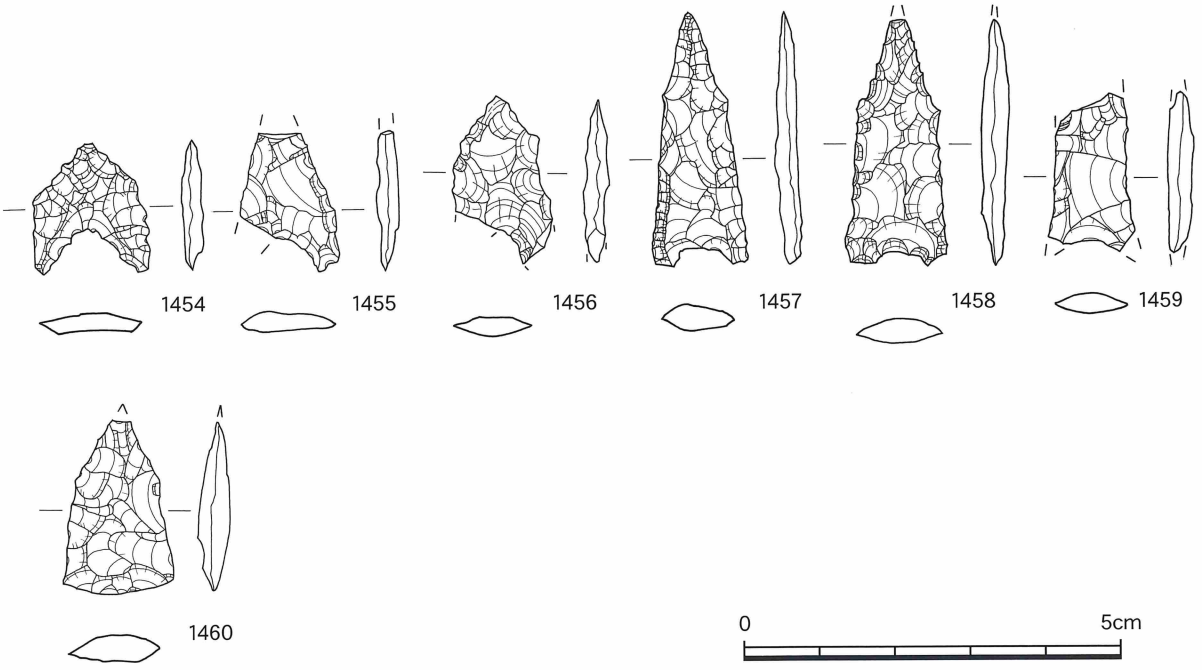
第114図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器2（S=1/1）



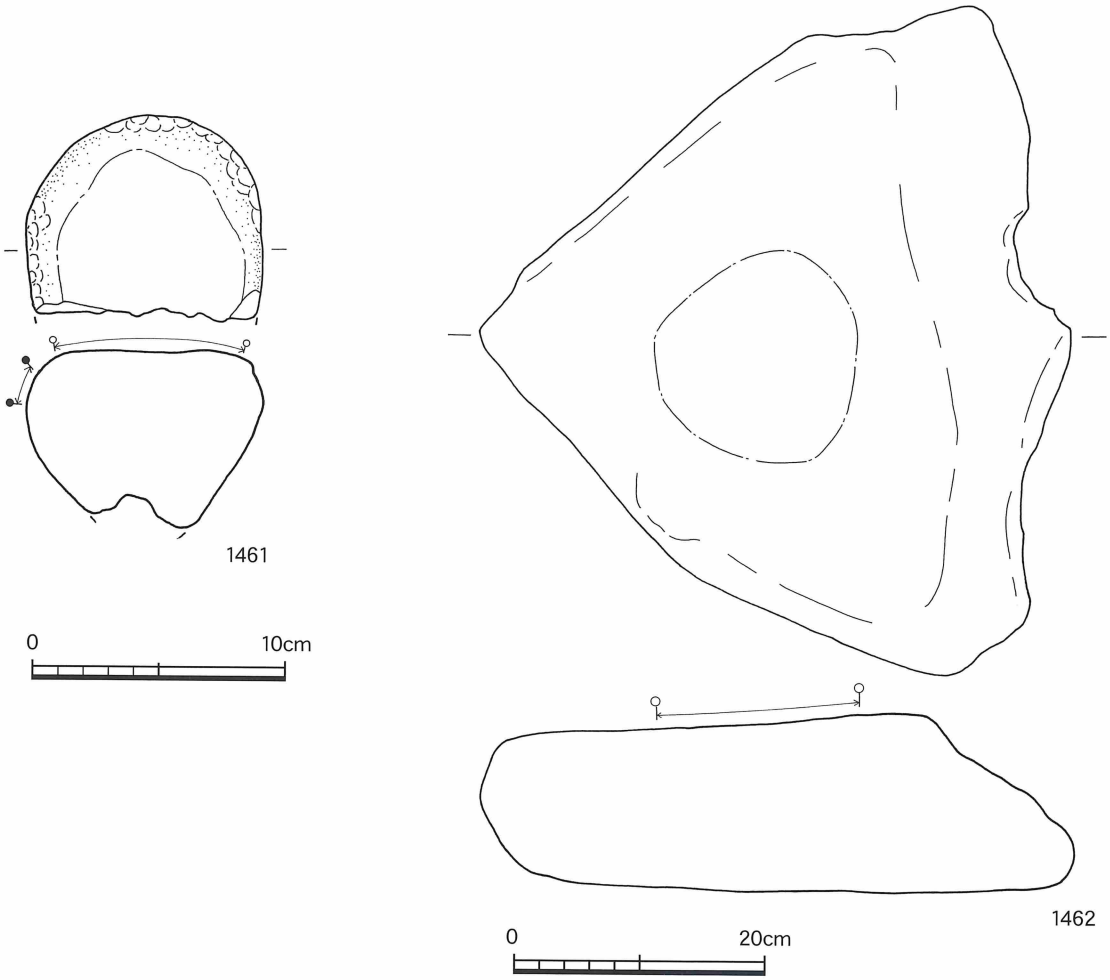
第115図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器3(S=2/3，S=1/3)



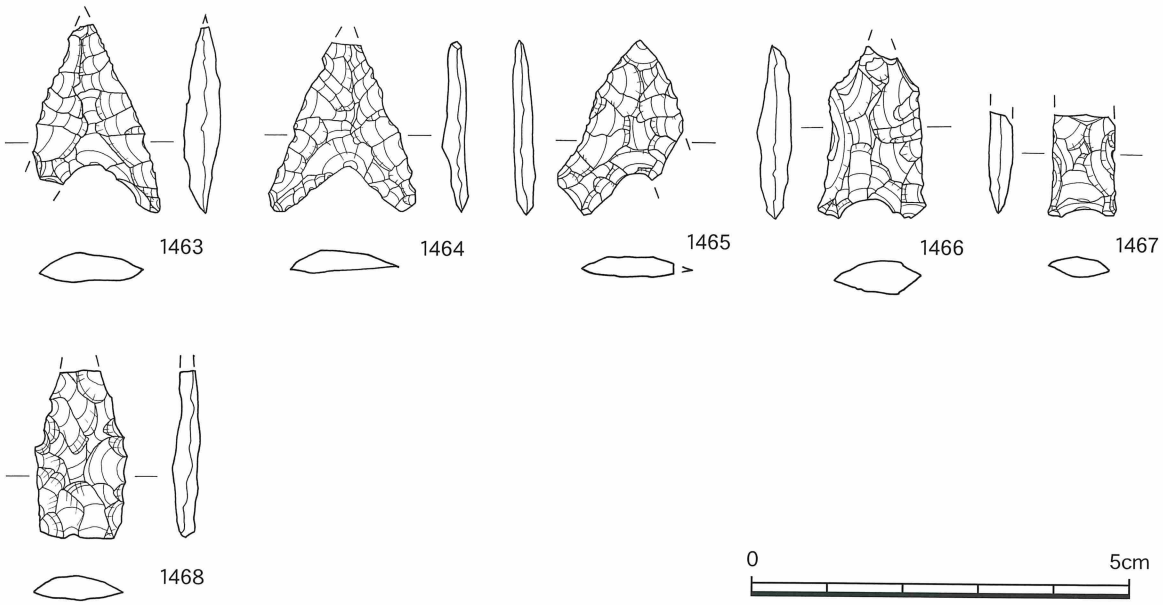
第116図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器4(S=1/4)



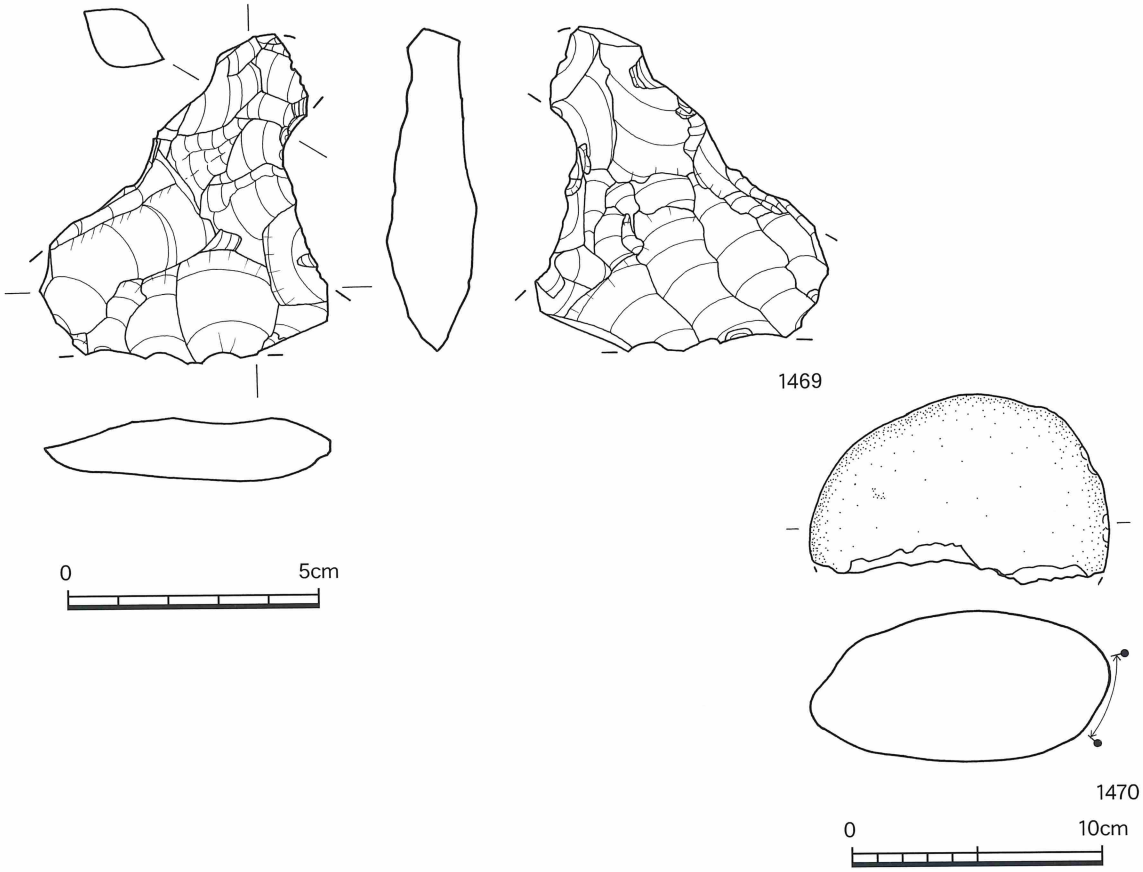
第117図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器5(S=1/1)



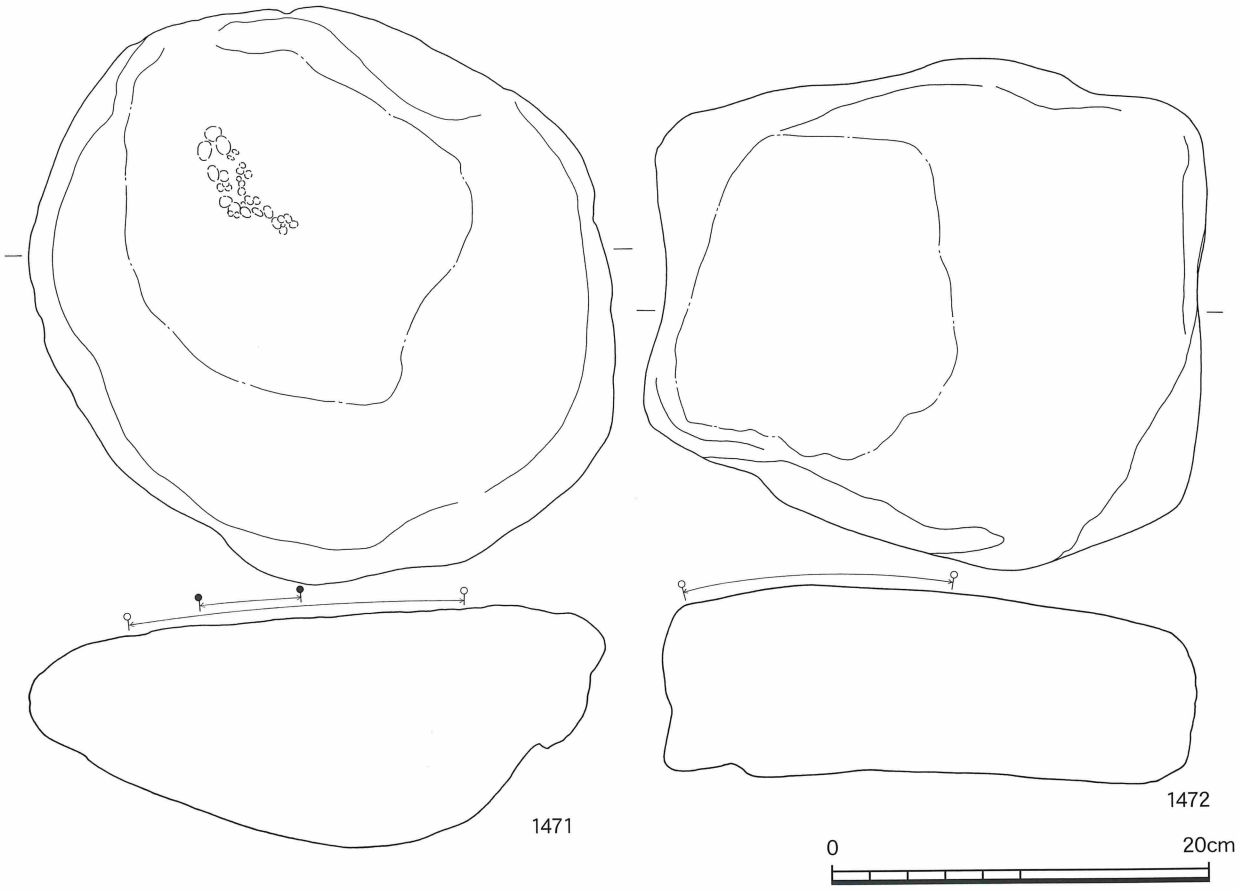
第118図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器6（S=1/3，S=1/6）



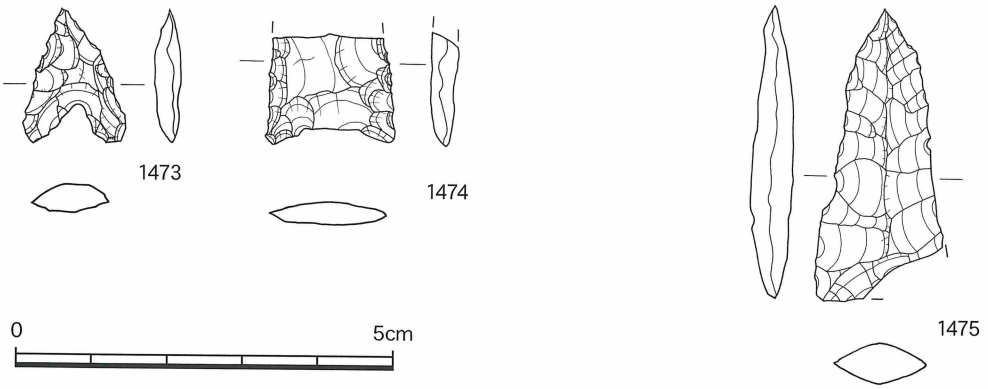
第119図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器7（S=1/1）



第120図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器8（S=2/3，S=1/3）



第121図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器9（S=1/4）



第122図　岩鼻岩陰遺跡14区出土石器10(S=1/1)

このうち、1461、1462、1471はⅡ1b層出土である。1452は円礫を利用した敲石である。1453は台石である。35.3×15.7cmで、一部に磨り面が残る。1461は円礫を利用した磨石で、平坦な面が磨り面として利用されている。また。端部に敲打痕が残る。1462は台石で、52.8×48.0cmを測る大形品である。片面に磨り面として利用した痕跡が残る。1471も大形の台石で、30.3×30.7cmを測る。厚みのある石材を利用しており、平坦な面をもつ一面が磨り面として利用されている。併せて敲打痕も認められる。1472は大形の台石で、26.9×29.3cmを測る。扁平な石材を利用しており、片面が磨り面として利用されている。

Ⅱ2層（第111図1409～1413、第112図1415～1425、第119図1463～1468、第120図1469～1470）

土器のうち1409～1413はⅡ2a層から出土したものである。1409は口縁端部が上下に肥厚し、沈線が2条施される。西平式から三万田式にかけてのものである。1410、1413は口縁部が直立し、外面に縄文と沈線2条がみられるものである。1413は1410に比べ口縁部がやや細く内傾気味である。1412は口縁部波頂部である。口縁部はわずかに内湾気味に内傾して立ち上がる。外面には、縄文と沈線3条が施される。以上の1410、1412、1413は西平式である。1411は頸部から器厚の厚い口縁部が短く直立する。口縁部外面には沈線2条と疑似縄文が施文される。石町式新相に比定できよう。

1415～1425はⅡ2b層から出土したものである。1415は胴部資料で、外面に疑似縄文が施されている。石町式か。1416～1419は内外面無文の深鉢である。1417は外面に横方向の条痕調整が施される。1420は口縁部資料で、端部はやや尖り気味である。外面に沈線状のものがみられる。1421は口縁部資料で、胴部から内湾しながら口縁にいたる。外面には沈線により文様が描かれており、渦巻き文が上下に連なる。後期中葉の所産と思われる。1422は口縁端部に深くて幅の広い刻みを連続的に施す。中期～後期初頭に位置づけられる。1423～1425は底部資料で、いずれも平底である。

石器のうち1463～1468は石鏃で、サヌカイト製の1467を除き、いずれも姫島産黒曜石製である。1463、1464は二等辺三角形状を呈するもので、抉りは深い。1465も二等辺三角形状をなすが、脚部が外方に張る。側縁は脚部から先端に向かい斜めに伸びるが、口縁部近くで角度を変え先端にいたる。抉りU字状でやや深い。大きな意味で五角形状であるが、1466などの五角形状とは大きく異なる。1466～1468は両側縁が直線的に平行してのび、肩部か先端に向かい尖る。基部は平基または浅い抉りである。1466などの五角形状のものは、本岩陰ではⅡ1層の晩期に顕著にみられるもので、本層出土資料は上層からの落ち込みの可能性がある。1469は姫島産黒曜石製の石匙と思われるが、つまみ部と匙部の一部を欠損する。1470は敲石である。円礫を利用したもので、側縁部に敲打痕が残る。

Ⅳ層（第112図1426、1427、第122図1473、1474）

1426は口縁部内湾するもので、外面口縁下に横走する2条の沈線を施し、その間に縄文と斜行沈線が施文される。後期初～前葉の所産か。1427は外傾する口縁で、口縁端部は丸みをもつ。外面には磨消縄文が施文される。

石器は1473と1474の石鏃である。いずれも姫島産黒曜石製である。1473は二等辺三角形状の形態を呈し、抉りも深い。1474は浅い抉りで、両側縁が平行して直線的にのびる。

18　試掘トレンチ1

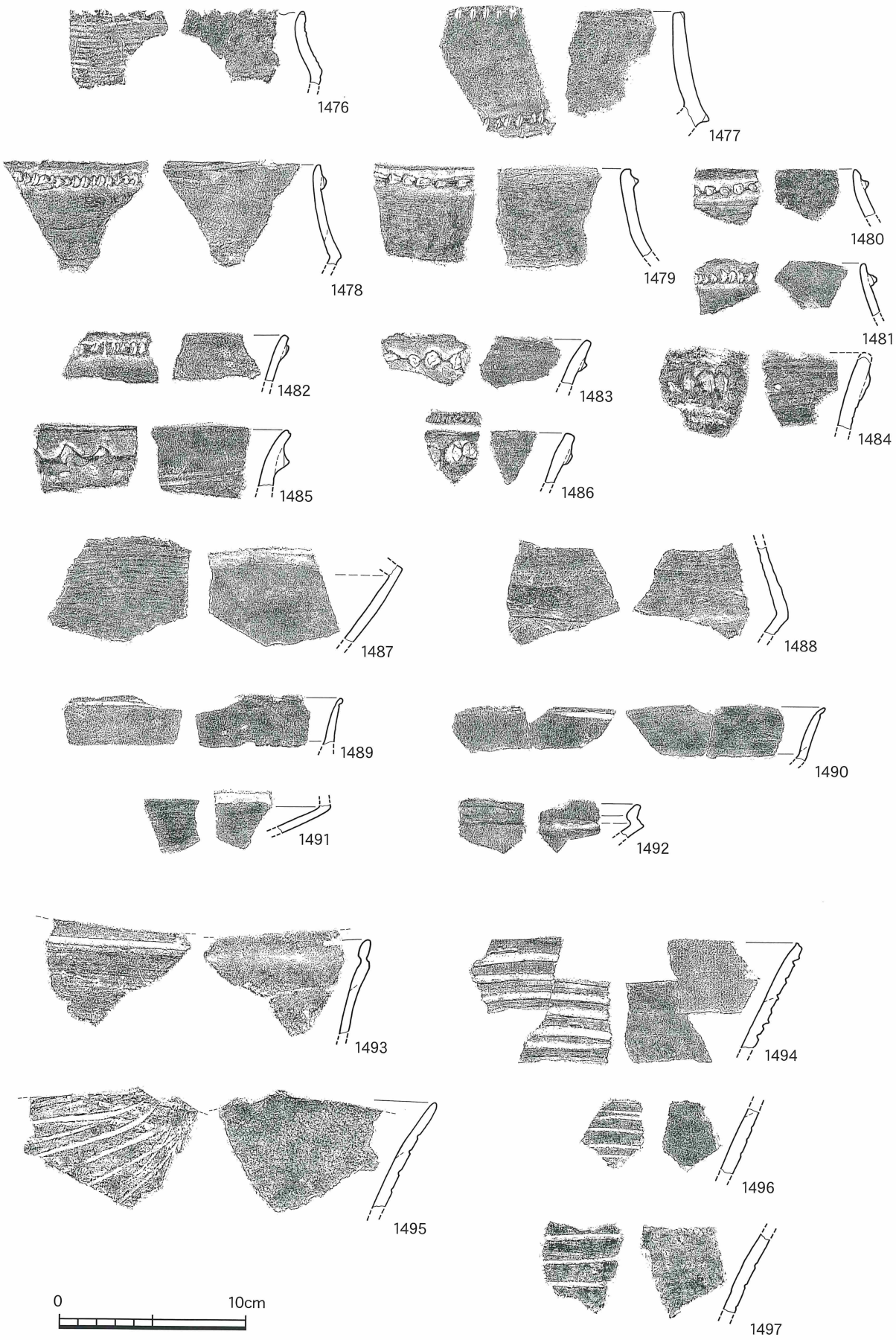
(1)　遺物出土状況

試掘トレンチ1は14区内に重複した位置に設定されている。試掘調査は全て手掘りで行われ、遺物の出土状況などを詳細に把握しながら進められた。掘削は一部を除きⅡ2層まで行われ、弥生時代早期や縄文時代晩期の遺物などが大量に包含されるのを確認している。併せて、焼土や大型の台石なども検出したため、岩陰における生活空間の中心を占めるであろうことが推測された。

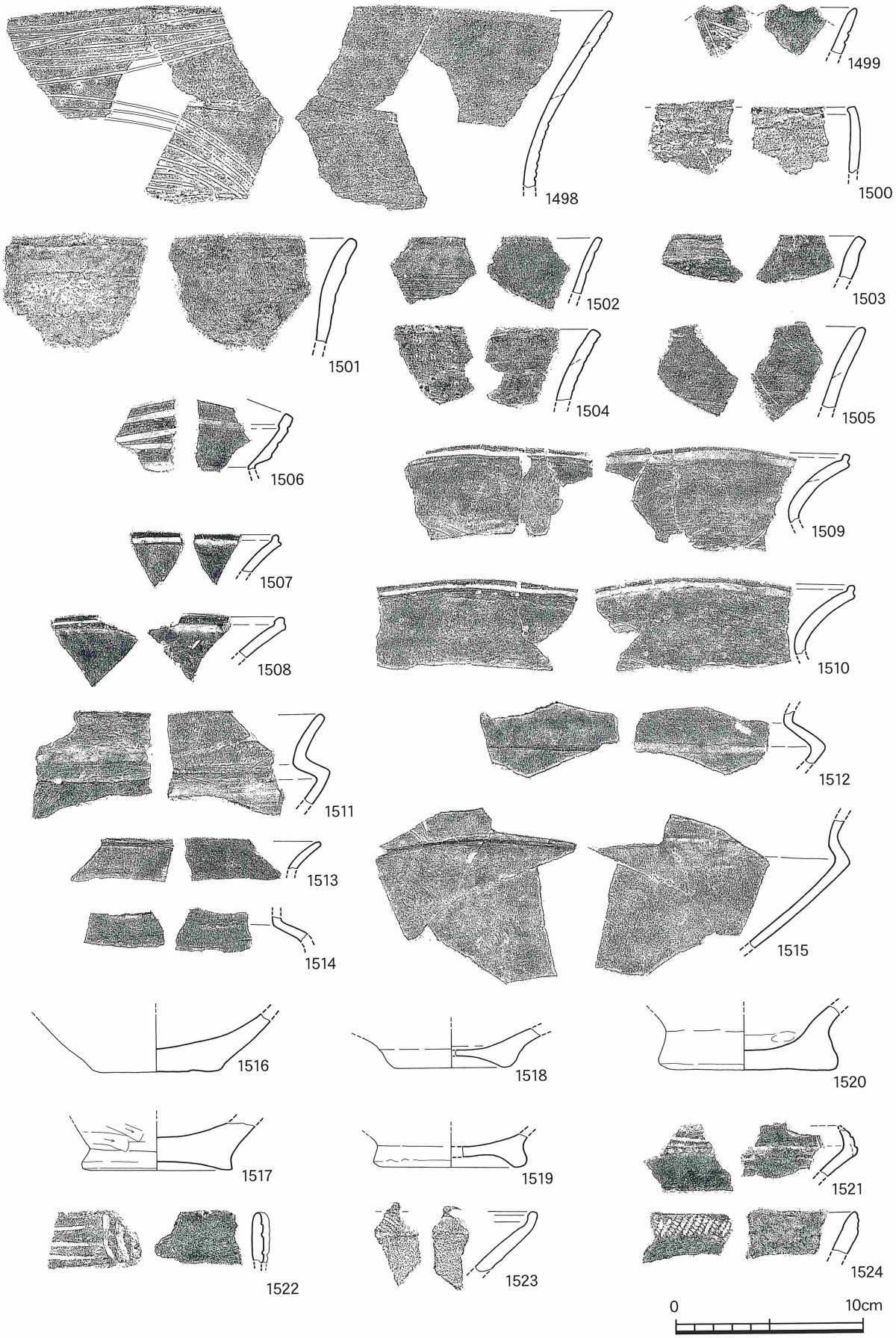
(2)　遺物（第123図1476～1497、第124図1498～1524、第125図1525～1532）

1476～1492は弥生時代早期に比定できるものである。1476、1477は突帯が付かないものである。1476は肩部が大きく張り、口縁部に向かい内傾しやや外反しながら立ち上がる。口縁端部上面に刻みが施される。外面は条痕調整である。1477も同様な器形を呈するが、肩部が外方に肥厚し強調され刻みを施す。また、口縁端部は角張り、端部外面に刻みがみられる。1478～1486は外面口縁下に刻目突帯を付す一群である。1478は唯一肩部から上部が分かる資料である。突帯は口縁下のみで、肩部には付されない。1477のように肩部に刻みを施す例もみられるが、本遺跡において肩部に刻目突帯を付すあるいは刻みを入れる例はほとんど見ることができない。1478の突帯は断面三角形で細かな刻みが施される。1479は外面口縁端部直下に断面三角形の突帯を付し、刻みを加える。1480、1481とも外面口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、比較的細かい刻みを施す。1482は幅に比しやや低めの突帯が外面口縁下に付く。刻みは比較的細かなものが施される。1483は断面三角形の突帯が外面口縁下に貼り付けられ、比較的大きめの刻みが施される。1484は外面口縁下に幅広で低い突帯が貼り付けられ、大きめの刻みが加えられる。1485は口縁部外反気味で、外面口縁下にやや高めの断面三角形の突帯が付される。1486はやや低めの突帯が貼り付けられ、大きめの刻みを施す。また、口縁端部上面に浅い刻みをいれる。1487、1488は体部の資料である。1487は浅鉢と思われる。1488は甕で、肩部に刻みなどは施されない。1489～1492は浅鉢である。1489、1490は口縁部がやや外傾気味に直立するものである。端部は細くわずかに外反気味である。外面口縁下には、口縁端部の粘土紐接合の際の段を利用した沈線が1条はいる。1491は頸部の立ち上り部分である。1492は体部が大きく張り稜をもつ。極めて短い頸部が内傾した後、口縁部が外方に折れる。

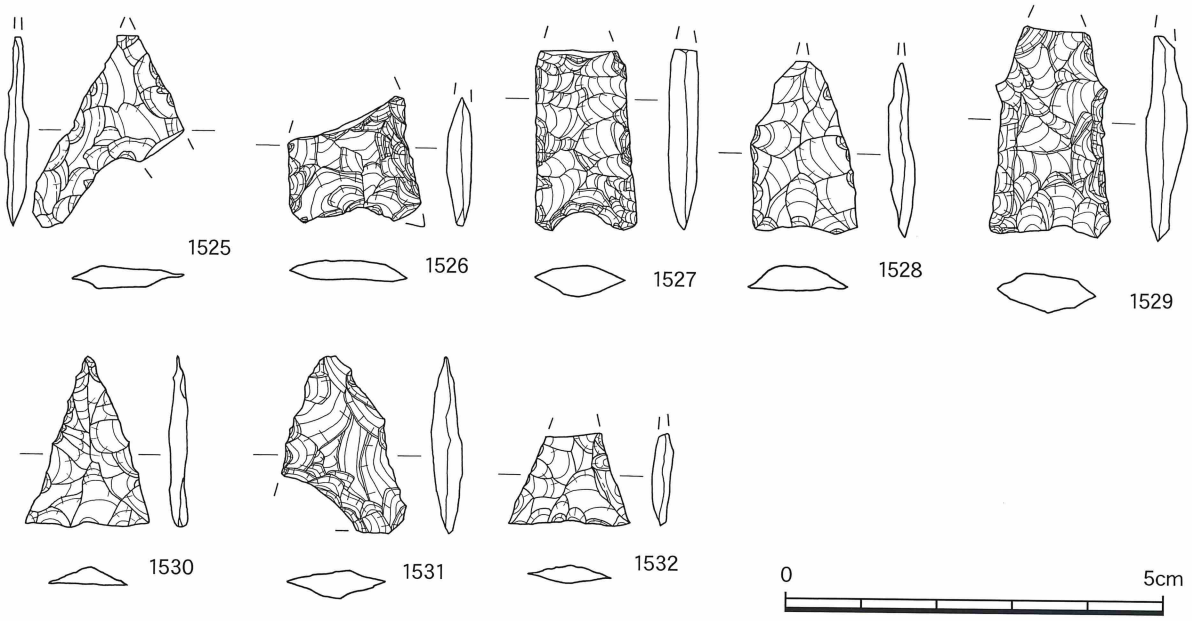
1493～1515は縄文時代晩期前半に位置づけられる一群である。1493は波状口縁を呈する深鉢である。外傾気味に伸びた頸部に、粘土紐を接合し口縁部としている。口縁端部は丸く仕上げられ、内外面には粘土紐接合時の段を利用した沈線がみられる。瀬戸内系の器形で、晩期前半でも古相に比定できる。1494～1499は口縁部外面に沈線を施す深鉢である。1494は口縁部が大きく拡張するもので、外面に横走沈線が施される。坂口式に後出する特徴をもつ。1495は口縁部が大きく拡張し、外面にやや細線化した沈線が施される。口縁端部には低いリボン状突起が付され、外面の沈線はリボン状突起部から弧状に展開する。1494よりもさらに後出するもので、上菅生B式の古相に並行するか。1496、1497は口縁部資料で、細線化した沈線が間隔を空けて施される。1498は口縁文様帯が大きく拡張したものである。外面には細線化した沈線が弧状に描かれる。1495と同様な時期であろう。1499は口縁端部にリボン状の突起が付されるもので、外面には細線化した沈線文がリボン状突起部から弧状に描かれる。やはり1495と同様な時期と考えられる。1500～1505は内外面無文の深鉢である。1506～1515は浅鉢である。1506は体部から頸部が短く外傾し肥厚した口縁帯に続くものである。波状口縁を呈し、外面に沈線による文様がみられる。また、内面口縁下は段がつく。坂口式に相当する。1507～1510は大きく外反する頸部から口縁部が短く立ち上がる一群である。いずれも口縁部の立ち上りの低平化がみられ、口縁部外面に粘土紐接合時の段を利用した沈線が1条みられる。坂口式に後出する段階のものか。1511は大きく張って稜をもつ体部から頸部が外反気味に外傾するものである。口縁端部周辺には沈線や段はみられない。



第123図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ1出土土器1（S=1/3）



第124図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ1出土土器2(S=1/3)



第125図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ1出土石器（S=1/1）

上菅生B式に併行する段階か。1512、1515は体部が張って稜をもつものである。1513は口縁部で、頸部から外反しながら口縁にいたる。1511と同様な時期か。1514は体部から頸部が立ち上がる。1516～1520は底部である。1516は平底である。晩期前半の古相か。1518は凹み底を呈する。後期後半から晩期前半の古相に比定できる。1517、1520は粘土を貼り付け底面を厚く、あるいは円盤張り付け状を呈するもので、晩期前半の新相に主体を置く。1519は高台状に貼り付ける。

1521～1524は後期の所産と考えられるものである。1521は口縁部が頸部から内傾して立ち上がる。外面に2条の沈線が施される。三万田式か。1522は外面文様帯に3条の沈線が横走する深鉢である。沈線が切れる部分に縦位の隆帯を張り付け、隆帯上には沈線が入る。石町式の新相である。1523は浅鉢で、口縁部が短く内湾気味に立ち上がる。口縁部外面には縄文が施される。石町式に比定できる。1524は深鉢で、口縁端部外面に幅狭の帯状に縄文が施文される。石町式である。

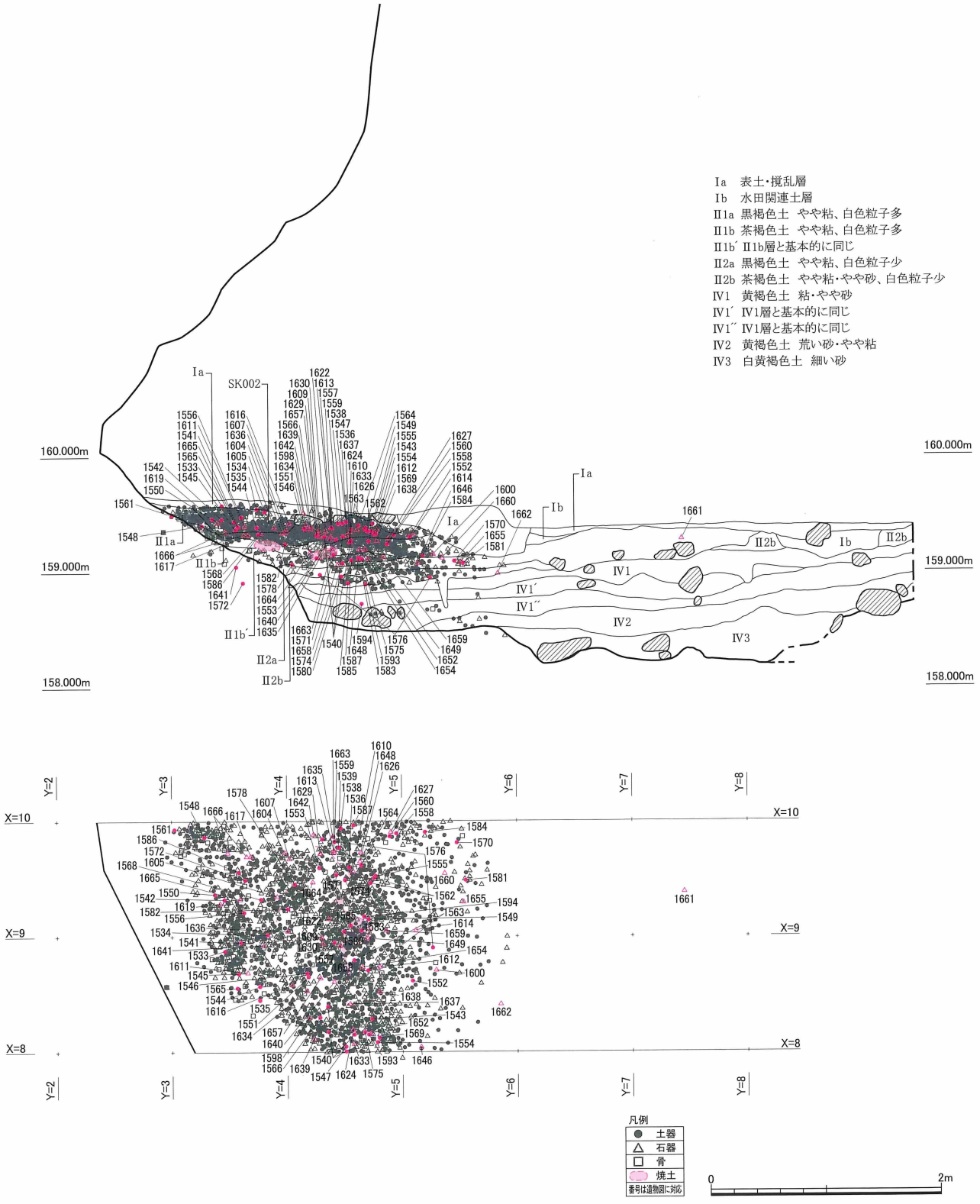
1525～1532は石鏃である。1525、1526、1531がサヌカイト製で、他はすべて姫島産黒曜石製である。1525は二等辺三角形状を呈し、抉りも深い。1526～1529は五角形状を呈するもので、基部から両側縁が直線的に平行して伸びる。そして、肩部から先端部に向かい尖る。基部は浅い抉りである。1529は肩部を外方に突起させ強調する。1530、1531は斜めにのびる側縁が途中で角度を変え先端にいたる。

19　15区

(1)　土層と遺物出土状況（第126、127図）

岩盤は奥壁から急激に下がる。奥壁から約1.5mでさらに傾斜が増して下がった後に平坦面となる。平坦面は約1.7m続き、再び下方に傾斜する。そして、最終的な平坦面となるが、この面は細かな凹凸がみられる。旧河道の堆積土に相当する部分には、0.1～0.5mの大小の礫が多数含まれる。標高は奥壁が160.05m、最初の平坦面が158.5m、最も低い部分の平坦面が158.25～158.35mである。奥壁から上方については、斜方向に立ち上がり、その後奥壁から2.8m上方で垂直気味になる。雨落ち線は奥壁から約2.5mである。遺物密集部分の大半が雨落ち線の内側にあり、一部が外側に広がる。

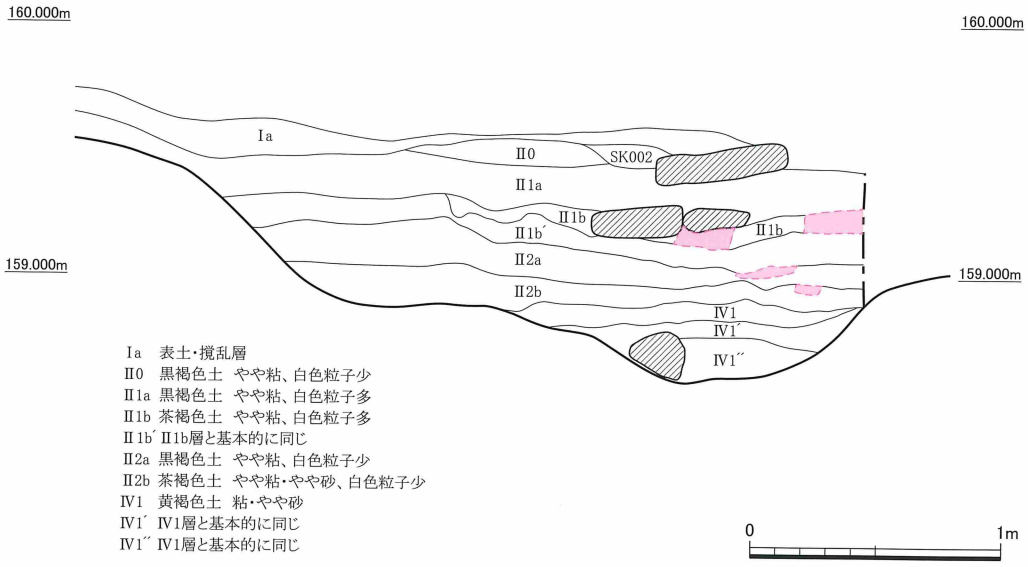
本調査区の層位について述べる。調査区全体に撹乱層等のⅠ層がみられ、層厚は数～0.45mである。調査区東端には水田関連土層が残る。14区で残存していた弥生時代早期に比定できるⅡ0層は、本調査区の北壁の土層



第126図　岩鼻岩陰遺跡15区平面図・土層図(S=1/50)

では確認できない。しかし、西壁の土層（第127図）では一部Ⅱ0層が残存する。Ⅱ1層の直上に台石もみられることから、独立した文化層として捉えることは可能である。しかし、Ⅱ0層が部分的にしか残存しないことと、遺物がⅡ1層から連続的に堆積していることなどにより、Ⅱ0層の遺物のみを分離するのは難しい。Ⅱ0層下にはⅡ1層がみられる。Ⅱ1層は奥から約3.0m残存するのみで、それよりも東側は削平等により残存しない。Ⅱ1層は、隣接する14区と同様に、a層、b層、b`層の3層に分けられる。このうちⅡ1b`層は奥壁に近い部分にしか残存しない。遺物は上層のⅡ1a層とⅡ1b層に集中する。本調査区では焼土が多数確認されている。平面図に示す焼土2、焼土3、焼土4はいずれもⅡ1b層中にみられる。焼土2は南北0.5mを測る。焼土3は不定形で、最大南北0.9mである。焼土4は径0.3mの規模である。このうち、焼土3は西壁の土層（第127図）に見ることができる。焼土3がⅡ1b層中にあり、その上に台石が置かれる。焼土や台石が、場所を少しずつ移動していることが分かる。隣接する14区と併せこの付近が、岩陰における生活空間の中心として利用されてきた様が推察できる。Ⅱ1層下にはⅡ2層がある。本層も隣接する14区と同様に、Ⅱ2a層とⅡ2b層の2層に分層することができる。Ⅱ2a層は東まで続くが、Ⅱ2b層は東まで伸びない。層厚はⅡ2a層が0.05～0.3m、Ⅱ2b層が0.05～0.1mである。Ⅱ2層は岩陰部分から外方に上るように堆積する。Ⅱ2a層上面での標高を比べると、最奥部で159.05m、雨落ち線の外側で159.4mである。また、Ⅱ2層出土遺物は、Ⅱ1層に比べると非常に少ない。しかし、西壁の土層（第127図）をみると、Ⅱ2a層に伴う焼土19とⅡ2b層に伴う焼土20がみられる。いずれも小規模な焼土であるが、各々の層に生活面があったことが確認できる。土器などもまとまっていることから、本区を中心とした後期集中部④として捉えることが可能である。これらは、概ね後期の石町式～西平式の時期に相当するものと考えられる。Ⅱ2層の下には、Ⅳ層の河川堆積土がみられる。これらは、奥壁に近いほど薄く、川に近い東側にいくにつれ層厚が厚くなる。また、大小の礫が多数含まれる。下層ほど砂質が強く、上層になるほど粘質を帯びてくる。

本調査区出土遺物の平面的な分布をみてみる。Ⅱ0層は部分的にしか残存しないため、Ⅱ0層単独の分布は定かではない。しかし、Ⅱ1層に混在するかたちで弥生早期遺物が全体に散見できる。Ⅱ1層の遺物は、奥壁から0.8～3.5mの間に集中する。その密集度は高く、まさに足の踏み場がないという状況である。焼土や台石もこの付近に集中することから、同じ場所で生活が繰り返されたことを示しているのであろう。Ⅱ2層は、Ⅱ1層に比べると遺物量は圧倒的に少ない。しかし、Ⅱ1層と同様な場所に遺物が集中する。Ⅱ2層は調査区の東端までのびるが、雨落ち線の外側では遺物の包含は極めて散発的であった（この部分はドットマップせずに遺物を取り上げている）。Ⅱ2層についても、分布の中心に焼土が存在することから、生活空間の中心的な場であったことをうかがわせる。



第127図　岩鼻岩陰遺跡15～16区西側土層図（S=1/30）

(2) 遺物

Ⅰ層（第131図1595～1597）

1595～1597は石鏃で、いずれも姫島産黒曜石製である。1595は完形品で、五角形状を呈する。基部から両側縁が直線的に平行して伸び、肩部から先端部に向かい尖る。肩部は片方がわずかに強調され、外側に突出する。基部は浅い抉りである。1596、1597は二等辺三角形状を呈するもので、基部は抉りが施されない平基である。

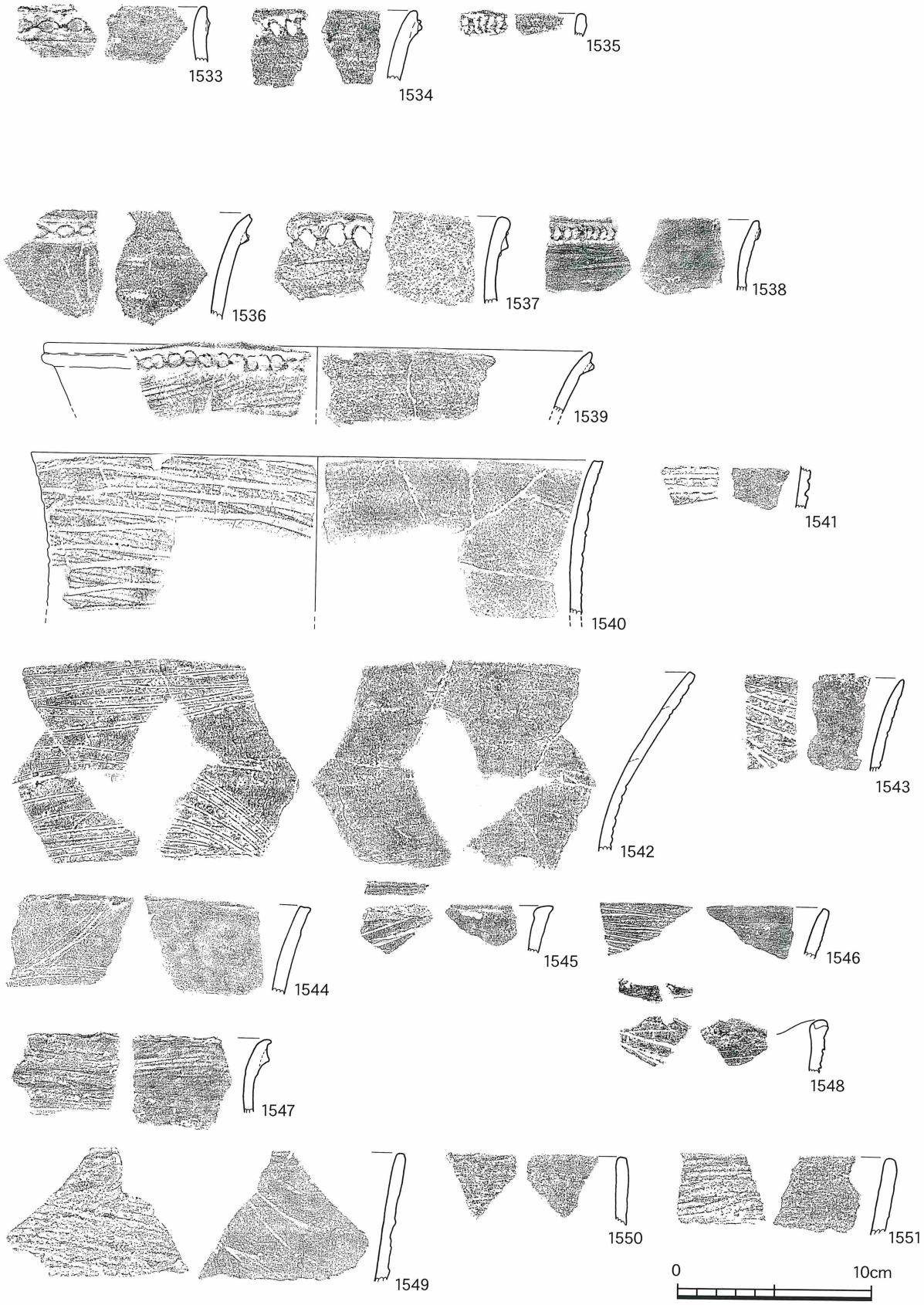
Ⅱ0層（第128図1533～1535、第131図1598）

1533は先端部が尖り気味で、外面口縁下に低い突帯を貼り付け刻みを施す。1534は外面の口縁端部直下に断面三角形の突帯を付し、刻みを加える。以上は弥生時代早期に位置づけられる。1535は口縁端部外面に縄文が施文されている。縄文時代後期のものか。

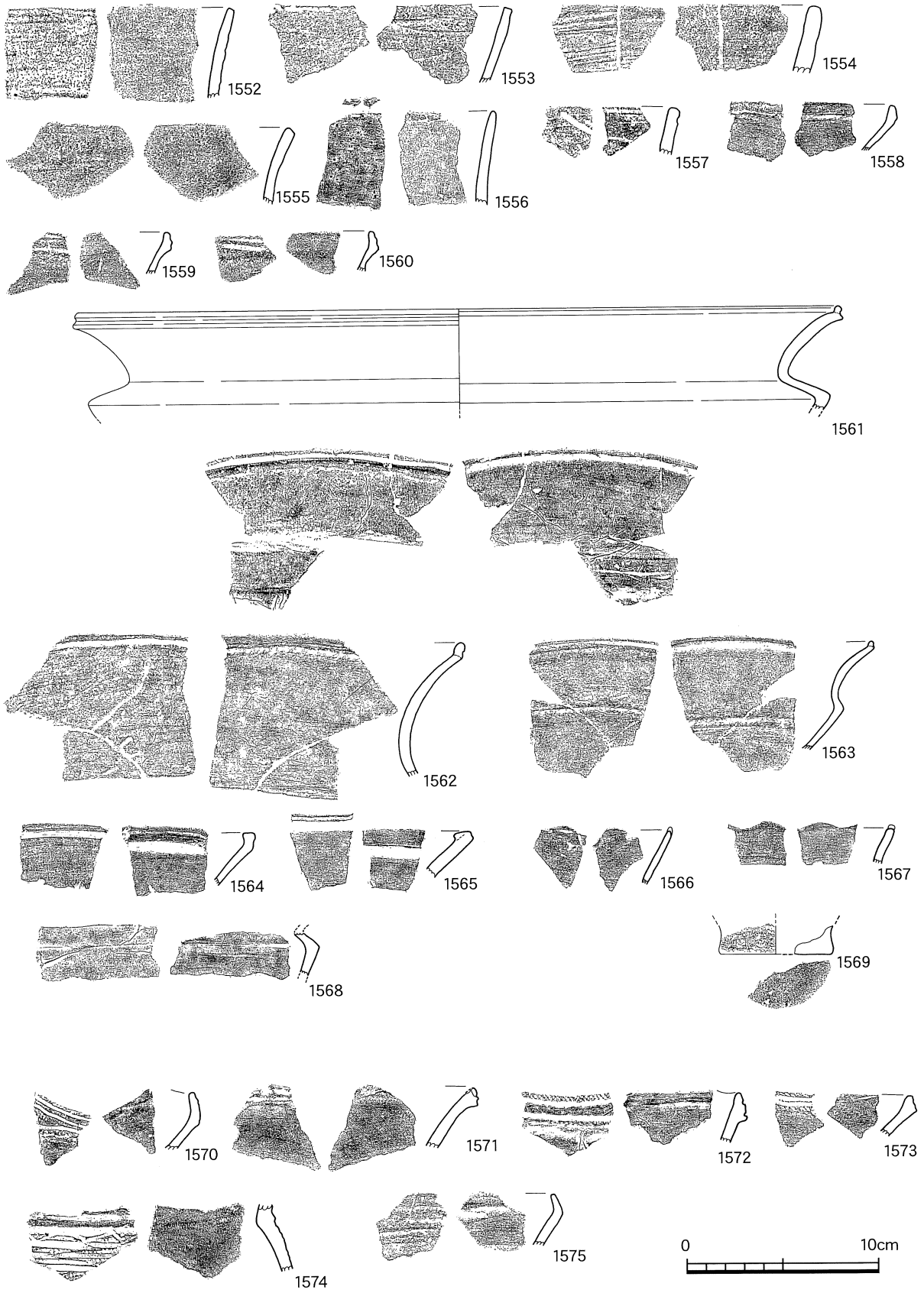
石器は1598の姫島産黒曜石製石鏃である。先端部を欠くが、五角形状を呈するものと思われる。肩部が低い位置にあり、基部の抉りは浅いU字状である。

Ⅱ1層（第128図1536～1551、第129図1552～1569、第131図1599～1613、第132図1614～1636、第133図1637～1642、第136図1663、1664、第137図1665、1666）

1536～1539は弥生時代早期の刻目突帯文甕である。1536は外面口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、刻みを付す。口縁端部は細くなり、断面方形を呈する。1537は口縁端部を丸くおさめる。外面口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、大きめの刻みを施す。1538は外面口縁下に突帯を付し、小さな刻みを比較的密に施す。1539は復元口径28.0cmで、口縁端部は尖り気味である。外面口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、やや大きめの刻みを加える。外面は条痕調整である。1540～1546、1548は外面に沈線文が施される深鉢である。1540は復元口径29.4cmを測る。口縁帯が著しく拡張し、外面に多条の横走沈線文がやや間隔をあけ施される。1541は口縁帯の破片で、横走沈線文が施される。1540、1541は縄文時代晩期前半の坂口式に後出するものである。1542は試掘トレンチ1出土破片と接合したもので、試掘トレンチ1出土遺物（第124図1498）として報告したものと同一資料である。1543はやや細線化した沈線が斜走する。1544は口縁端部が角張り、外面に細線化した沈線による文様がみられる。数条の横走沈線から口縁端部に向かい斜走及び縦走の沈線が施される。全体に沈線文は雑である。1545は口縁端部が内外にわずかに肥厚する。外面に細線化した斜走沈線がみられる。1546は細線化した沈線が横方向に雑に施される。1548は外面に細線化した沈線が横方向及び斜方向に施される。口縁端部には小さなリボン状突起が付される。1542～1546、1548は上菅生B式直前あるいは上菅生B式併行段階に比定することができる。1547は口縁端部が尖り気味で、外面口縁下に断面三角形の無刻目突帯が付される深鉢である。内外面は条痕調整である。上菅生B式である。1549～1556は内外面無文の深鉢で、後晩期に位置づけられるものである。1549、1551、1552、1554の外面は条痕調整がみられる。1557は外面に沈線がみられる。1558は深鉢で、口縁部が短く立ち上がる。後期の三万田式か。1559、1560は深鉢で、外面に2条の凹線が施される。三万田式～御領式か。1561～1568は晩期の浅鉢である。1561は13区出土破片と接合したものである。復元口径39.2cmで、胴部最大径部が稜をもち再び内側に短く折れる。頸部が大きく外反し低平化が進行した短い口縁部が立つ。胴部最大径と口径はほぼ同じである。口縁部は細い粘土紐を継ぎ足したもので、接合時の段を利用し沈線としている。1562は頸部が大きく外反するもので、口縁部がやや緩やかに立つ。口縁部の低平化はみられない。外面に段状の沈線が1条施される。1563は胴部最大径部分で稜をもち、そこから頸部が大きく外反しながらのびる。やや低平化傾向がうかがえる口縁部が立ち、外面に1条の沈線文が施される。口径は胴部最大径に比べ圧倒的に大きい。1564は頸部からしっかりした口縁部が立つ。外面には浅くて広めの沈線が1条施される。1565は斜めにのびる頸部がそのまま口縁部にいたるもので、口縁端部内面が帯状に肥厚する。1566、1567は頸部が直線的にいたるもので、小さなリボン状突起が付される。1568は胴部資料で、胴部最大径部分が張って稜をもつ。以上の浅鉢のうち、1562及び1564は坂口式である。1561、1563は口縁部の低平化がみられることから坂口式に後続する段階に比定できよう。1565は上菅生B式である。1566及び1567は上菅生



第128図　岩鼻岩陰遺跡15区出土縄文土器1(S=1/3)



第129図　岩鼻岩陰遺跡15区出土縄文土器2（S=1/3）

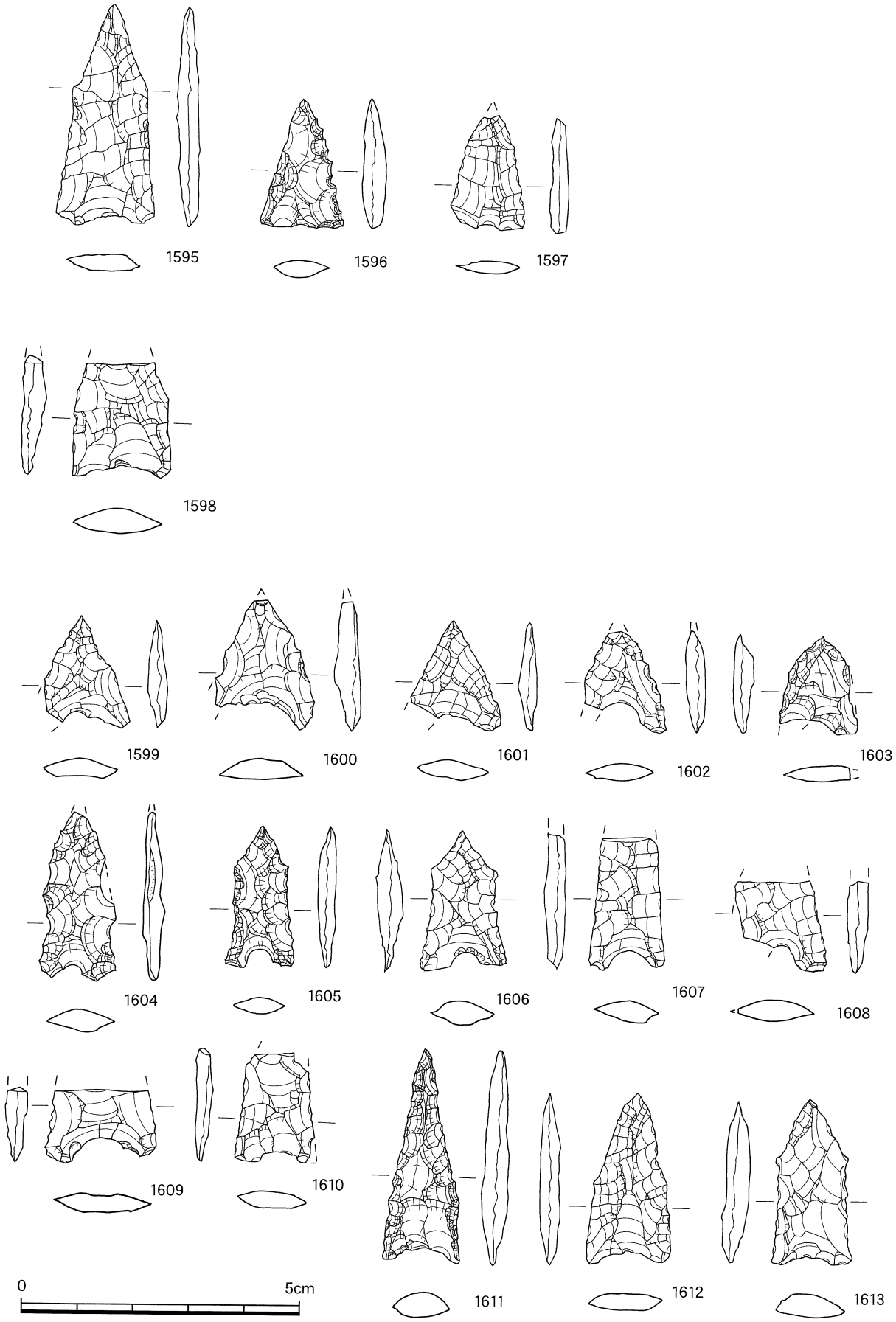
第130図　岩鼻岩陰遺跡15区出土縄文土器3（S=1/3）

B式古相段階に比定できるものと思われる。1569は底部資料で、円盤貼り付け状の厚底を呈する。上菅生B式段階に位置づけられる可能性を有する。

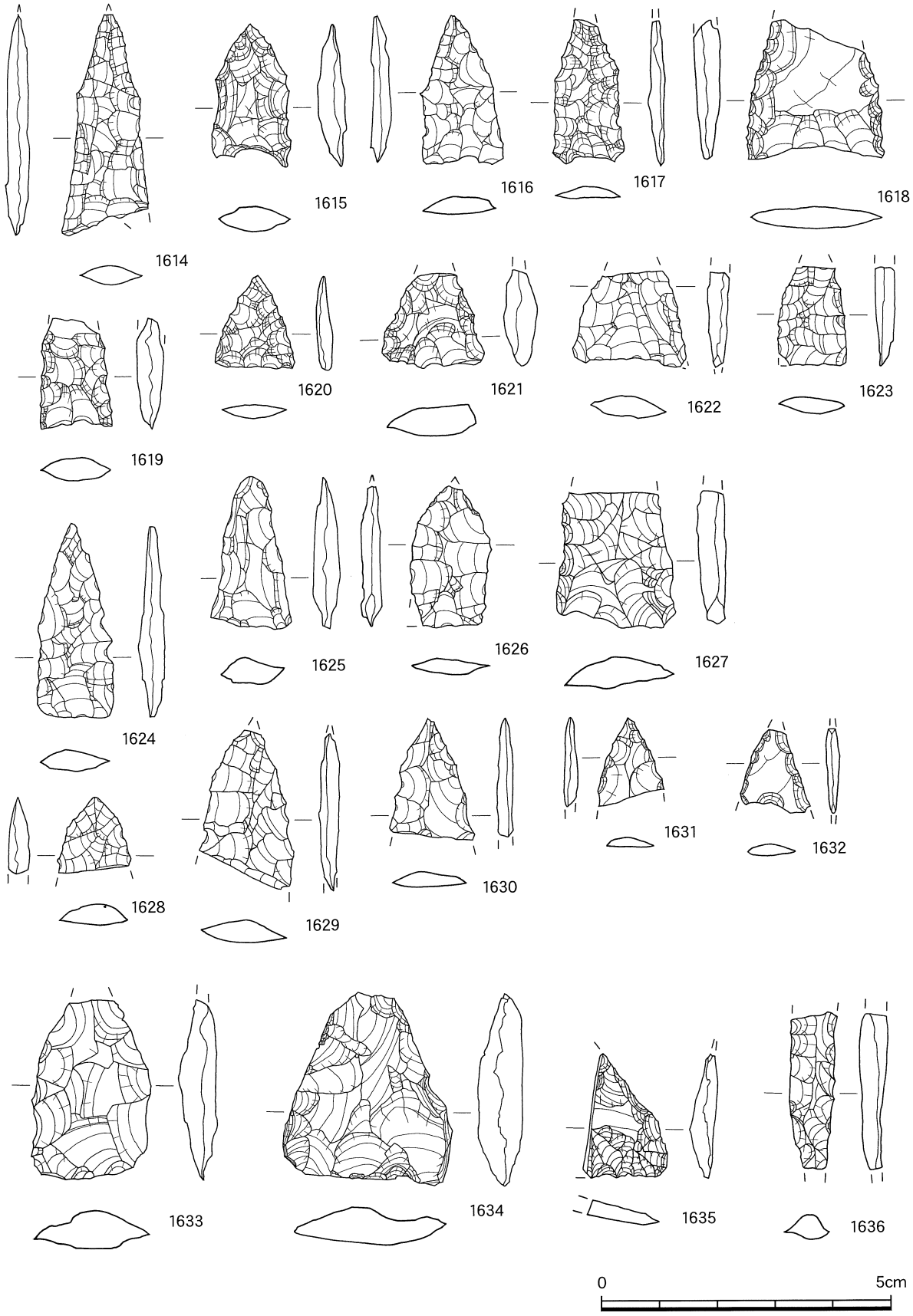
石器のうち1599～1632は石鏃である。34本のうち、1603、1613、1615、1618、1625、1631の6本がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。以上のうち、1599～1602は二等辺三角形状を呈する。1599～1601は幅広で浅い抉りが施される。1602はやや深く、幅広のU字状を呈する。1603～1619、1623～1627は五角形状を呈する。基本的な形態は、1605にみるように両側縁が基部から平行し直線的にのび、肩部から先端部に向かい尖る。総じて肩部は上方に位置するものが多いが、中ほどに位置するもの（1604、1612、1616）や下方に位置するもの（1611、1618）もみられる。また、肩部が強調されるものもみられ、両肩（1606、1613、1614）あるいは片側（1605、1612、1615、1616、1617）をわずかに外方に突起させる。また、基部の抉りについては、U字状に抉るもの（1603～1608）、幅広で浅く抉るもの（1609～1619）、平基のもの（1623～1627）がみられる。1620、1628～1632は先端部の破片資料である。このうち、1628は側縁が斜方向にそのまま先端部にいたるのではなく、先端近くで角度を変える。ここで主体を占める両側縁が平行し直線的にのびる五角形状のものとは異なる形態である。1633、1634は石鏃の未成品と思われるもので、1633はサヌカイト製、1634は姫島産黒曜石製である。1635は欠損品で、姫島産黒曜石製である。スクレイパーあるいは石匙の一部と考えられる。1636は姫島産黒曜石を細長く加工したもので、断面は三角形を呈する。上下を破損するが、石錐と思われる。1637～1642、1663、1664は敲石・磨石・台石である。1637は円礫を利用したもので、大きく欠損する。側縁部に顕著な敲打痕がみられる。1638は一部欠損する磨石である。円礫の比較的平坦な面を磨り面として使用し、側縁の一部には敲打痕が残る。1639は敲石の欠損品である。側縁の一部に敲打痕がみられる。1640は直方体状の円礫を利用した磨石で、平坦面のうち3面を磨り面としている。また、先端の尖った部分に敲打痕が残る。1641は扁平な板状の石材を利用した磨石で、上下面を磨り面としている。1642は台石である。33.5×42.3cmの大形品で、上下の平坦な面を磨り面として利用している。1663も大形の台石である。欠損品と思われるが、現状で36.8×34.7cmを測る。片面が磨り面として利用されている。1664も大形の台石である。32.7×57.4cmで、比較的扁平な形状を呈する。上下面が磨り面として利用されている。1665と1666はサヌカイト製のスクレイパーである。1665は薄い横長剥片を利用し、縁辺部に調整を加える。1666も大きめの剥片の縁辺部に調整を加え、刃部を作り出す。

Ⅱ2層（第129図1570～1575、第130図1576～1592、第134図1643～1660、第135図1661、1662）

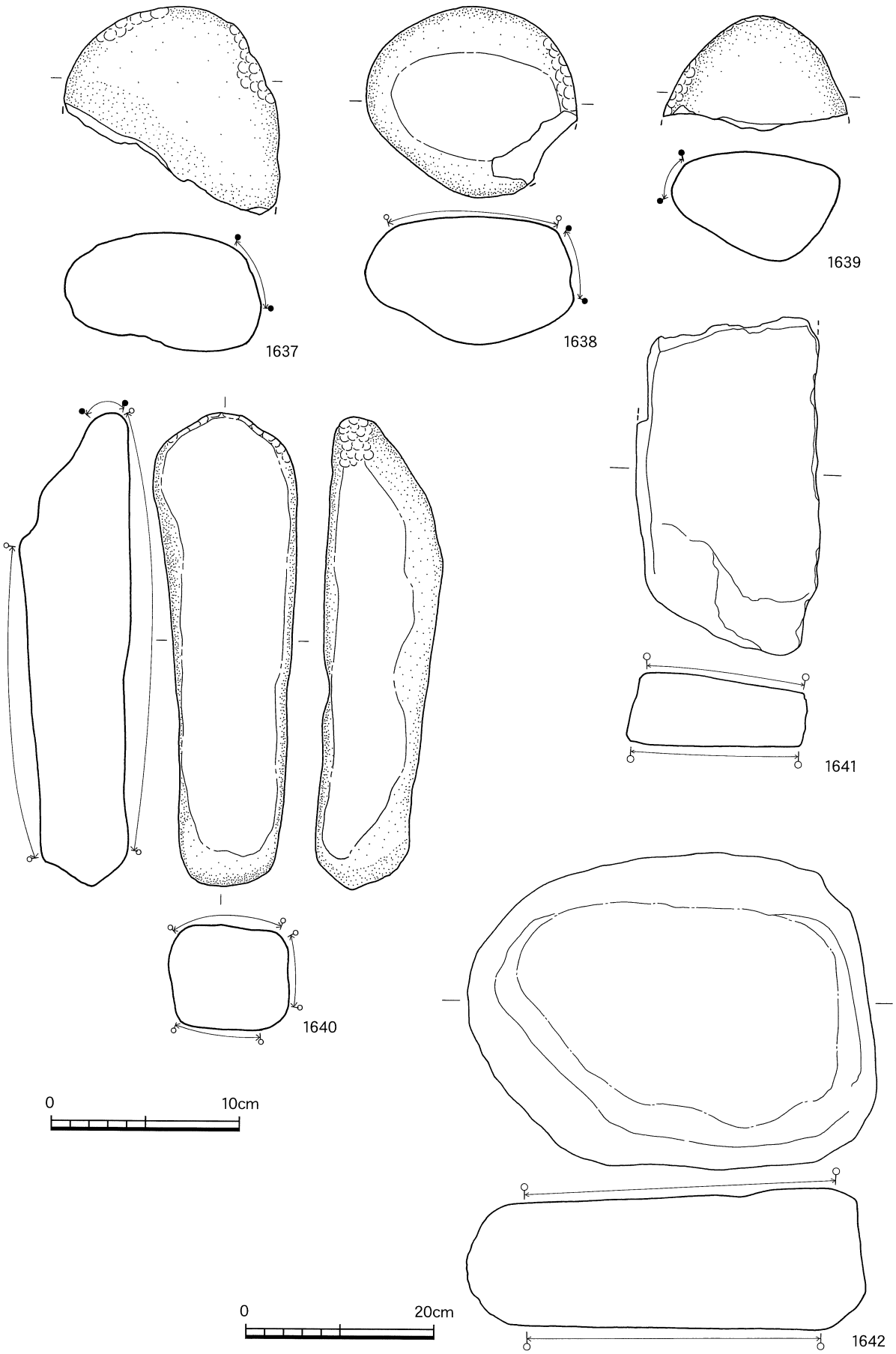
1570～1574は後期の西平式である。1570は深鉢口縁部の波頂部である。口縁部は頸部から内傾気味に立ち上がる。外面には3条の沈線と縄文が施される。1571は口縁端部を欠く深鉢で、口縁部外面には沈線と列点文がみられる。1572も深鉢口縁部で、断面三角形を呈する。外面には2条の沈線と縄文が施文される。1573も深鉢口縁部である。口縁の立ち上りが低く、やはり断面三角形を呈する。外面には2条の沈線と縄文がみられるが、2条の沈線は接するように施文されている。1574は深鉢の頸部から胴部にかけての資料である。横走沈線、沈線による波状文、縄文がみられる。1575は口縁部が内側にくの字状に折れる深鉢で、内外面無文である。西平式～三万田式か。1576～1582は石町式古相に位置づけられるものである。1576は深鉢の頸部から口縁部にかけての資料である。頸部は無文で外反しながら立ち上り、肥厚する口縁帯へと続く。口縁帯が比較的発達しており、幅が広い。口縁帯には疑似縄文を施した後に、3条の横方向の沈線を施文する。内湾する波頂部を有し、波頂部下には渦巻き文を配する。また、波頂部上面には浅い凹点状のものがみられる。1577は深鉢口縁部で、波頂部ちかくの資料である。緩やかに内湾し、発達した口縁帯に文様が施される。文様は疑似縄文地に沈線が3条施される。1578は口縁部内湾する深鉢である。外面の口縁帯に縄文が施文される。1579も口縁部が内湾する深鉢と考えられる。外面に縄文が施される。1580は深鉢で、無文の頸部から口縁部に続く。口縁端部外面に帯状に疑似縄文を施文する。1581は深鉢の頸部下から胴部にかけての資料である。頸部は無文で、わずかに段がつき胴部には疑似縄文が施される。1582は深鉢で、口縁部が頸部から折れて内傾し、幅の狭い口縁文様帯を形成する。外面には条痕が残る。1583～1587は内外無文の深鉢である。1583は器厚の薄いもので、口縁部



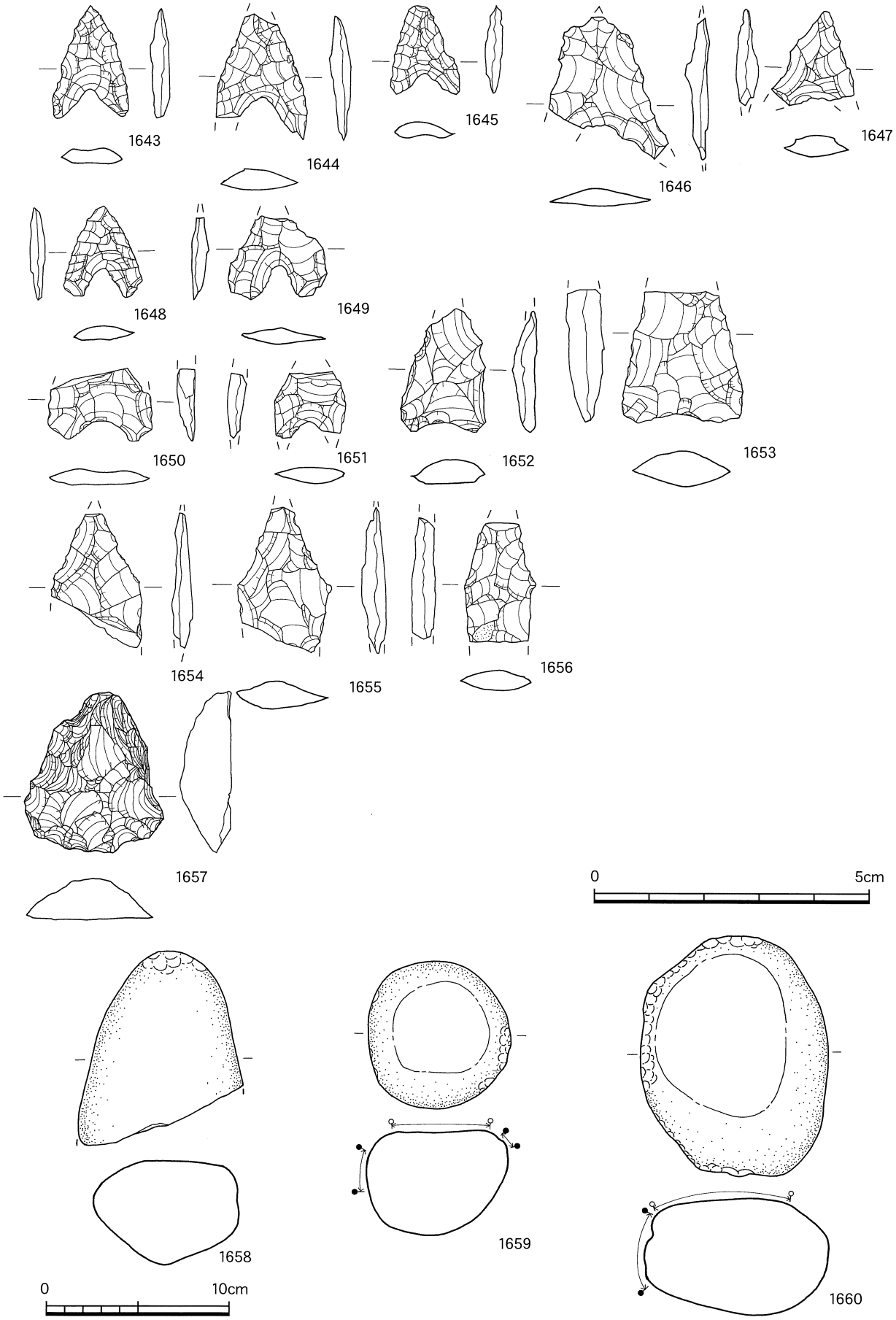
第131図　岩鼻岩陰遺跡15区出土石器1(S=1/1)



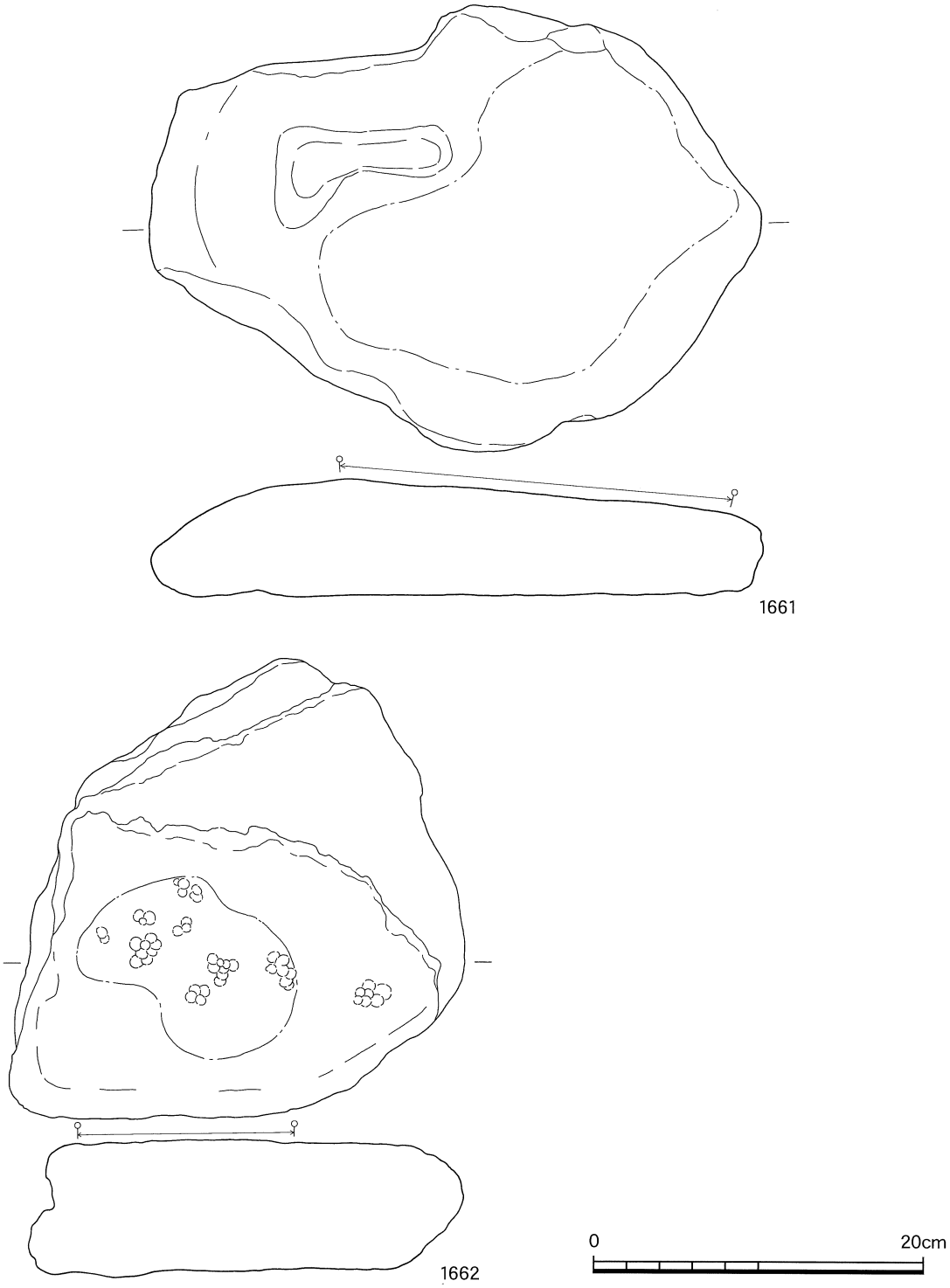
第132図　岩鼻岩陰遺跡15区出土石器2（S=1/1）



第133図　岩鼻岩陰遺跡15区出土石器3（S=1/3（1637～1641），S=1/6（1642））

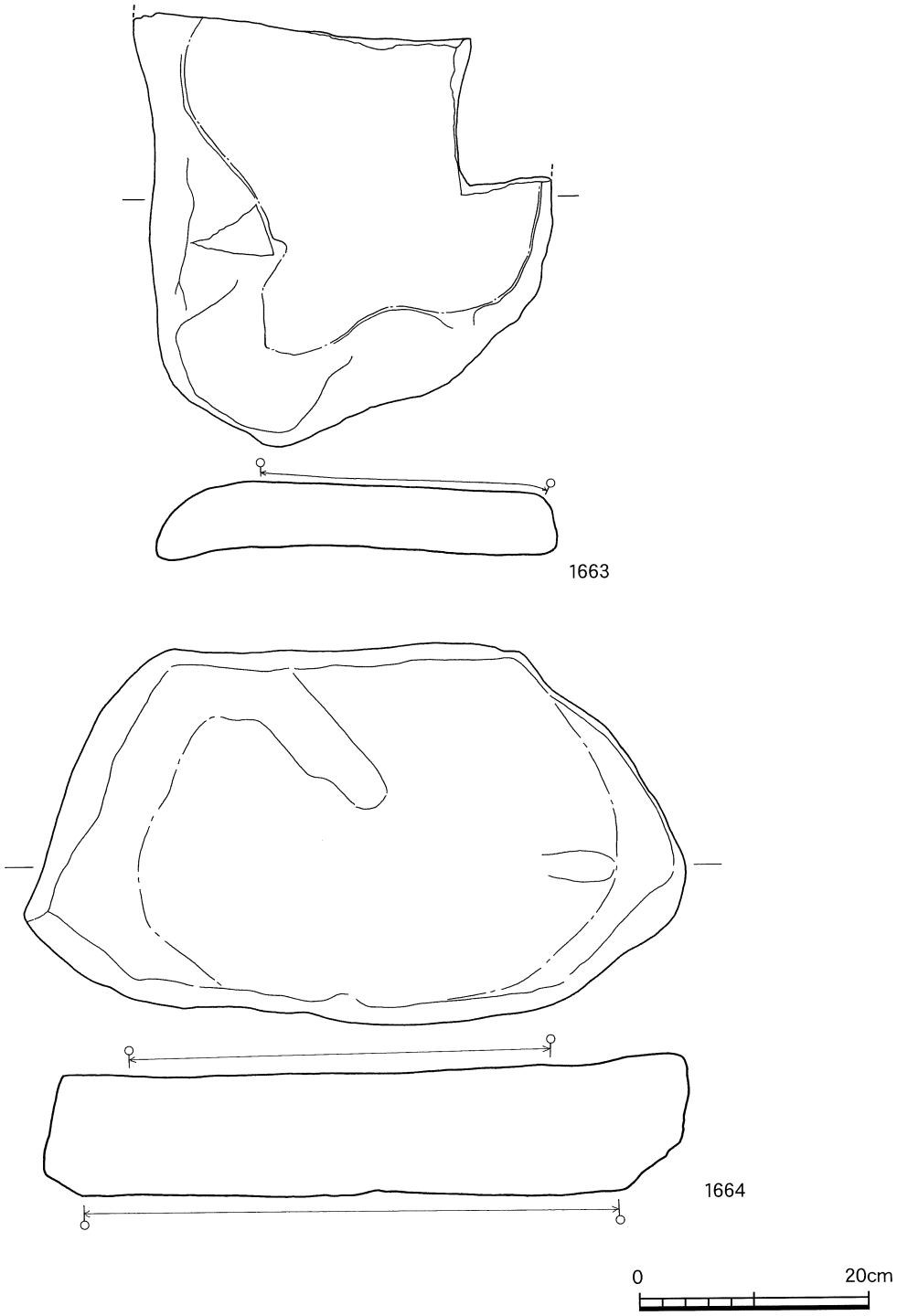


第134図　岩鼻岩陰遺跡15区出土石器4（S=1/1（1643～1657），S=1/3（1658～1660））



第135図　岩鼻岩陰遺跡15区出土石器5（S=1/4）

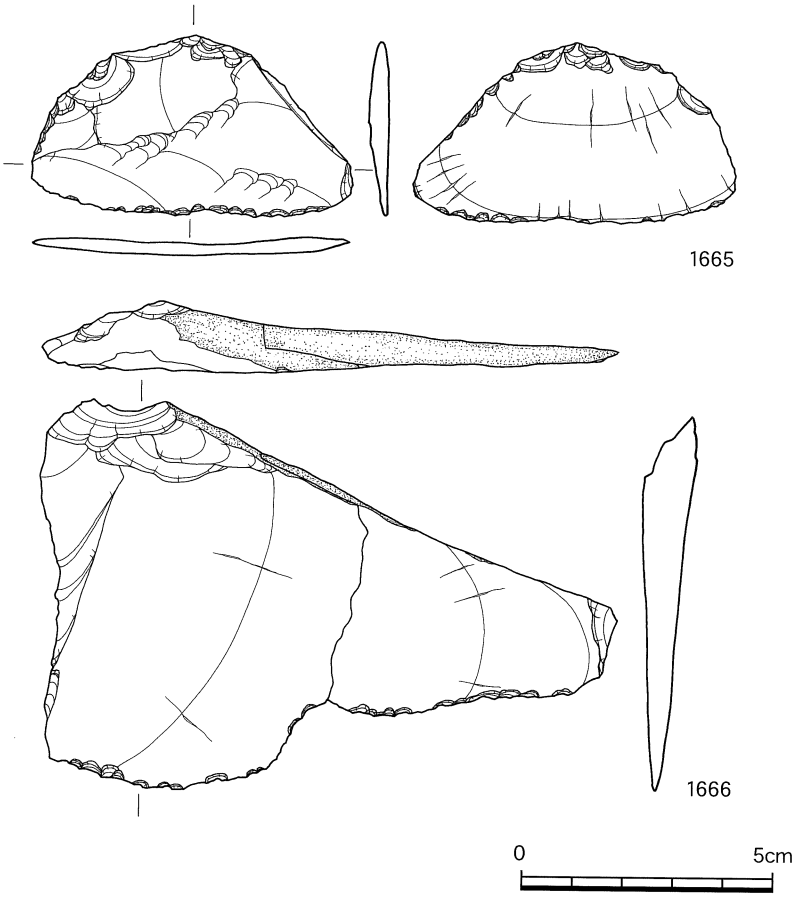
直立する。1584は深鉢で、わずかに内湾気味の口縁部である。口縁端部は尖り気味である。1585は口縁部外反気味の深鉢で、口縁端部は角張る。内外面とも条痕調整である。1586は口縁部外反するものである。1587は口縁部が直立気味の深鉢である。以上の無文土器は後晩期に比定できるであろう。1588、1589は浅鉢で、晩期の所産である可能性が高い。上層のⅡ1層からの混入か。1590～1592は底部である。1590は底面に粘土紐を張り付け、厚底を呈する。1591は底部の縁部に粘土紐を付加し、円盤貼り付け状にしたものである。1592



第136図　岩鼻岩陰遺跡15区出土石器6（S=1/6）

は平底の底部である。胴部の立ち上りが緩やかである。

石器のうち、1643～1656は石鏃である。このうち1647、1652、1655がサヌカイト製で、他はすべて姫島産黒曜石製である。1643～1648は二等辺三角形状を呈するもので、抉りは低い三角形を呈する。1649は脚部が誇張されており、抉りはU字状を呈する。1650～1656は五角形状を呈するもので、両側縁が平行し直線的にのび、肩部から先端に向かい尖る。肩部が強調され、外方に突起するもの（1655、1656）もある。基部は1650や1653のように浅い抉りが施される。1657は肉厚の製品である。スクレイパーと思われる。1658～1660は敲石



第137図　岩鼻岩陰遺跡15区出土石器7（S=2/3）

などである。1658は欠損品である。やや長めの円礫を利用しており、端部に敲打痕が残る。1659は円礫を利用した磨石で、平坦な面を磨り面としている。縁辺部に敲打痕がみられる。1660は円礫の平坦面を磨り面として利用している。縁辺部には敲打痕が残る。1661、1662は台石である。1661は27.0×37.0cmの大形品で、片面が磨り面として利用されている。1662も大形の台石である。27.6×27.6cmの扁平な石材を利用している。片面を磨り面としている。

Ⅳ層（第130図1593、1594）

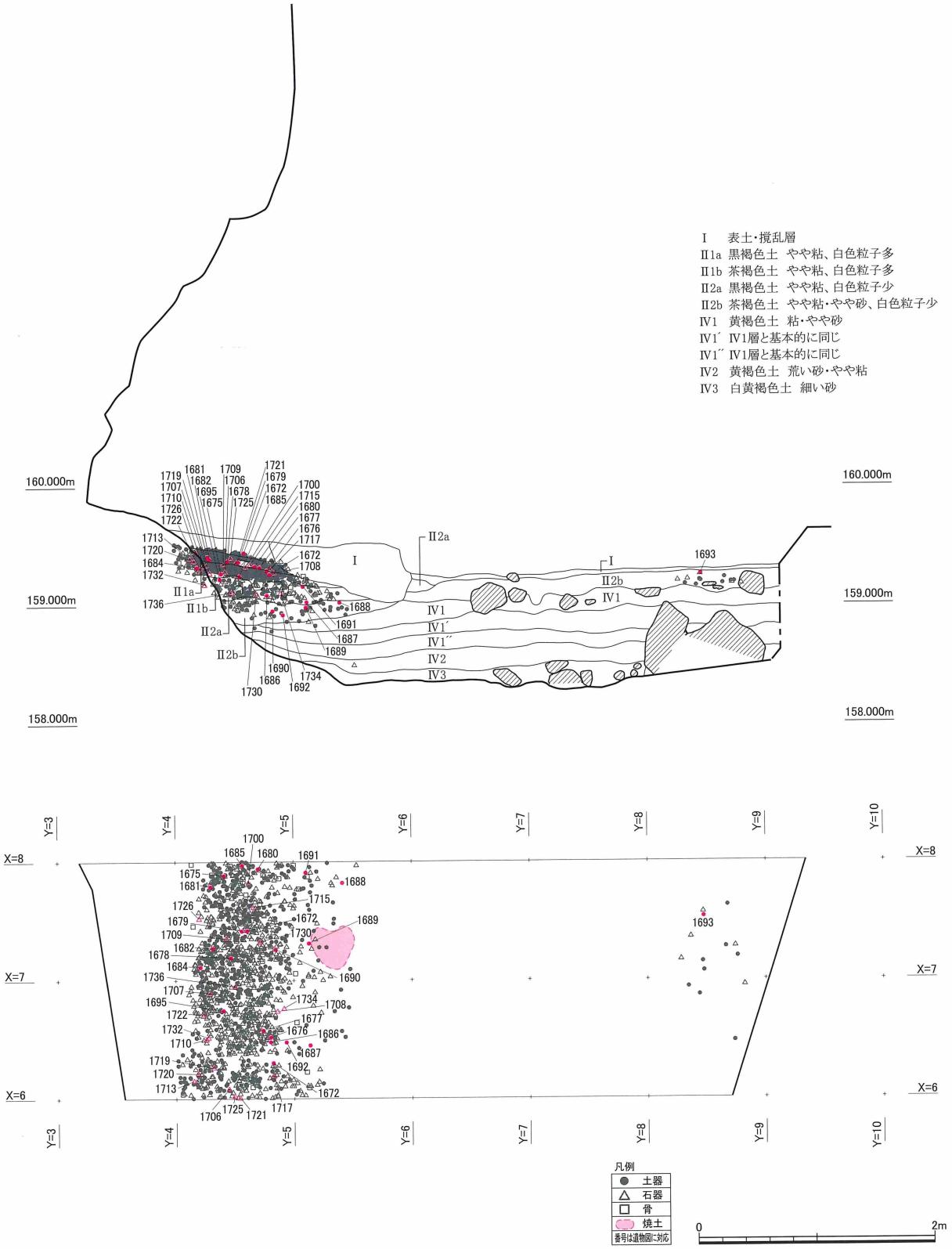
1593は深鉢である。外面に沈線と縄文による文様が施される。1594は内外面無文の深鉢である。

20　16区

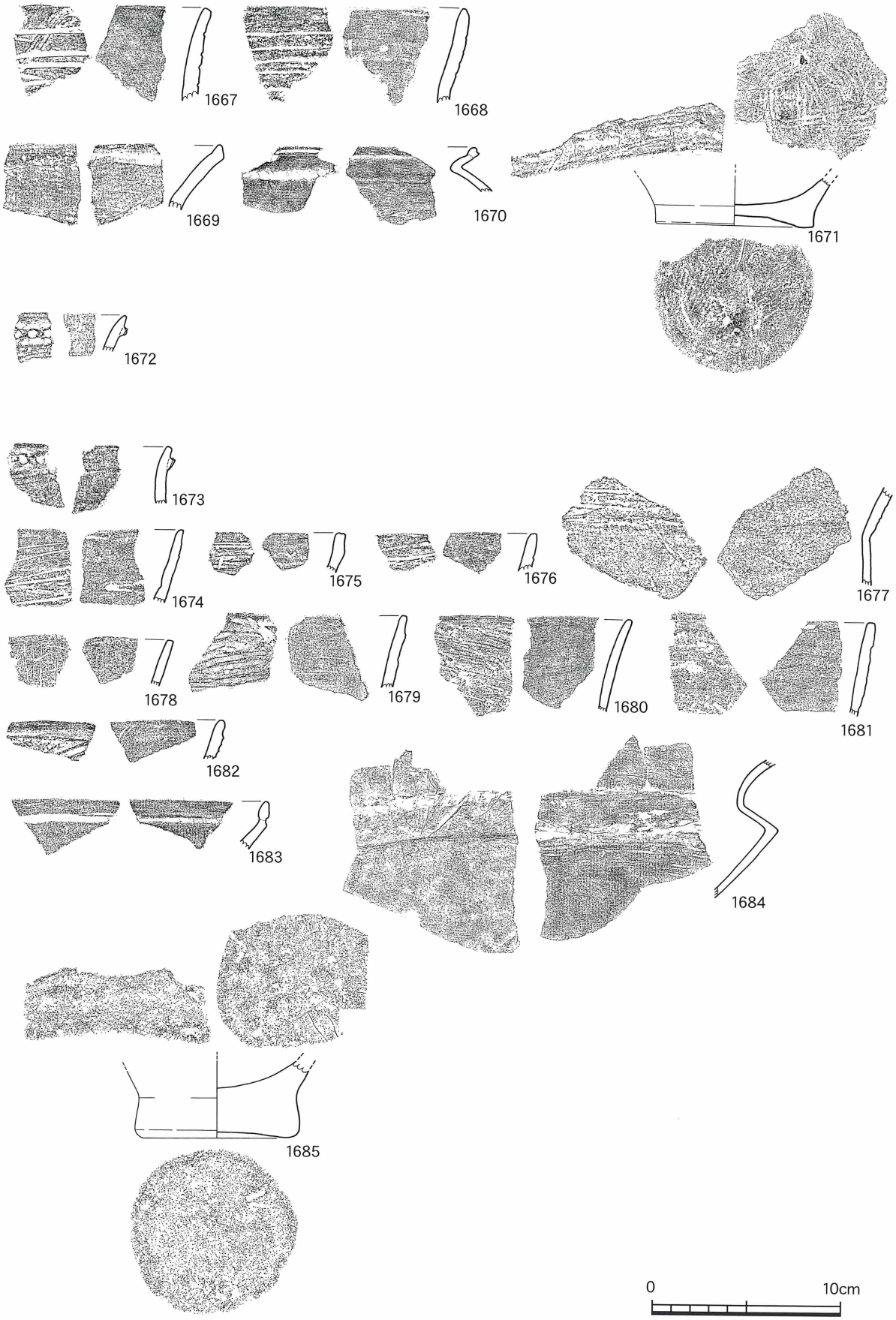
(1)　土層と遺物出土状況（第138図）

岩盤は、奥壁から約0.5m緩やかに下った後に急傾斜となり急激に下がる。奥壁から約2.2mで平坦面となる。平坦面は若干の凹凸をもち、川に向かいやや上りながら続く。この平坦面が旧河道の底となる。平坦面上の旧河道の堆積土に相当する部分には、0.1～0.7mの礫が多数見られる。その数は東に行くにつれ増加し、積み重なったような状況を呈する。標高は奥壁が159.9m、平坦面の奥壁側が158.3m、平坦面の東端が158.5mである。奥壁から上方については、斜方向に立ち上がり、その後奥壁から約2.5m上方で垂直気味になる。雨落ち線は奥壁から約1.9mである。北側の15区までの雨落ち線が奥壁から2.5m以上あったのに比べ、急激に雨落ち線が後退する。遺物密集部分の大半が雨落ち線の内側にあり、一部が外側に広がる。

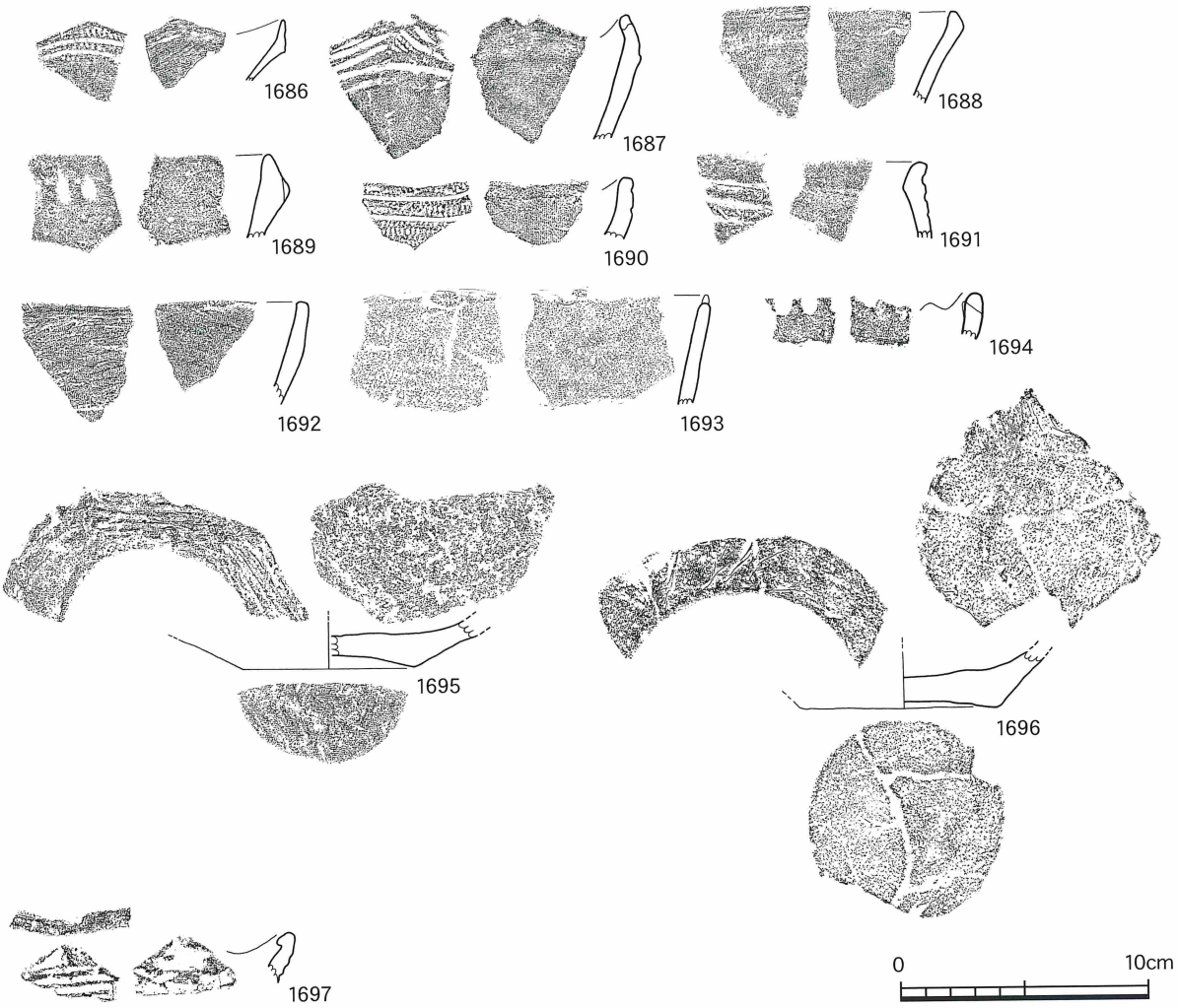
層位について述べる。調査区全体に厚さ0.05～0.5mのⅠ層（表土層、撹乱層）が見られる。北側の15区まで確認することができた水田関連土層は、ここでは存在しない。Ⅰ層の下にはⅡ1層がある。14区、15区で一部残存していた弥生時代早期に比定できるⅡ0層は、確認することができない。Ⅱ1層は奥壁から2.2mの地点までしか残存しない。それより東側は、撹乱や削平などのため消滅している。Ⅱ1層はa層、b層の2層に分けられる。隣接する14区や15区ではⅡ1層が3層に分層された状況とは異なる。遺物はⅡ1a層とⅡ1b層にみられ、連続的に堆積する。遺物の密集度は高いが、Ⅱ1a層とⅡ1b層でこれらを分けることはできない。晩期遺物の集中は12区～15区においても確認されており、本区もそれに続くものと考えられる。焼土や台石が集中する14区や15区がその中心になるものと思われ、広範囲になるが晩期集中部①として捉えておく。Ⅱ1b層下面で焼土1を確認した。焼土1は0.3×0.4mの広がりをもち、厚さ数cmである。Ⅱ1層の下にはⅡ2層がある。Ⅱ2層もⅡ2a層とⅡ2a層の2層に分層することができる。Ⅱ2b層は東まで続くが、Ⅱ2a層は東まで伸びない。層厚は



第138図　岩鼻岩陰遺跡16区平面図・土層図（S=1/50）



第139図　岩鼻岩陰遺跡16区出土縄文土器1(S=1/3)



第140図　岩鼻岩陰遺跡16区出土縄文土器2(S=1/3)

Ⅱ2a層が0.05～0.2m、Ⅱ2b層が0.05～0.25mである。Ⅱ2層は岩陰部分から外方に上るように堆積する。Ⅱ2b層下面での標高を比べると、最奥部で158.85m、東端で159.15mである。遺物量はⅡ2層になると激減する。Ⅱ2層の下には、Ⅳ層の河川堆積土がみられる。これらは、奥壁に近いほど薄く、川に近い東側にいくにつれ層厚が厚くなる。また、大小の礫が多数含まれる。下層ほど砂質が強く、上層になるほど粘質を帯びてくる。

本調査区出土遺物の平面的な分布をみてみる。Ⅱ1層の遺物集中が顕著に認められる。Ⅱ0層は残存しないが、Ⅱ1層に混在するかたちで弥生時代早期の遺物が少数出土する。Ⅱ1層の遺物は、奥壁から1.1～2.8mの間に集中する。その出土状況は、足の踏み場がないという状態で、焼土1が伴う。12区から続く晩期集中部①として捉えることが可能である。また、土器や石器に混じり獣骨が多数出土している。獣骨は小片で、いずれも焼成を受けているようである。2区、3区などの中期包含層であるⅡ3層からも獣骨が出土しているが、それらに比べると量が圧倒的に多い。また、2区、3区の獣骨が火を受けていない点とも異なる。Ⅱ2層は、Ⅱ1層に比べると遺物量は圧倒的に少ない。しかし、Ⅱ1層と同様な場所に遺物が集中する。Ⅱ2層は調査区の東端までのびるが、雨落ち線の外側では遺物の包含は極めて散発的であった（この部分はドットマップせずに遺物を取り上げている）。

(2) 遺物

Ⅰ層（第139図1667～1671、第141図1698）

1667、1668は縄文時代晩期前半の深鉢である。両者とも口縁帯が大きく拡張するものと思われ、外面に細線化した多条の沈線が間隔をあけて施される。坂口式に後出するものである。1669は深鉢で、口縁部が外反気味に開く。口縁端部は角張り、上方にわずかに肥厚する。後期の三万田式か。1670は浅鉢である。扁球形の体部から頚部がくの字状に折れる。口縁部の立ち上りはほとんど失われ、端部が内側に丸く肥厚する。端面に沈線が1条施される。上菅生B式併行期か。1671は上げ底を呈する底部である。

石器は1698の石鏃で、姫島産黒曜石製である。抉りはU字状を呈し比較的浅く、側縁が直線的に平行してのびる。先端部を欠くが、五角形状を呈するものと思われる。晩期の所産であろう。

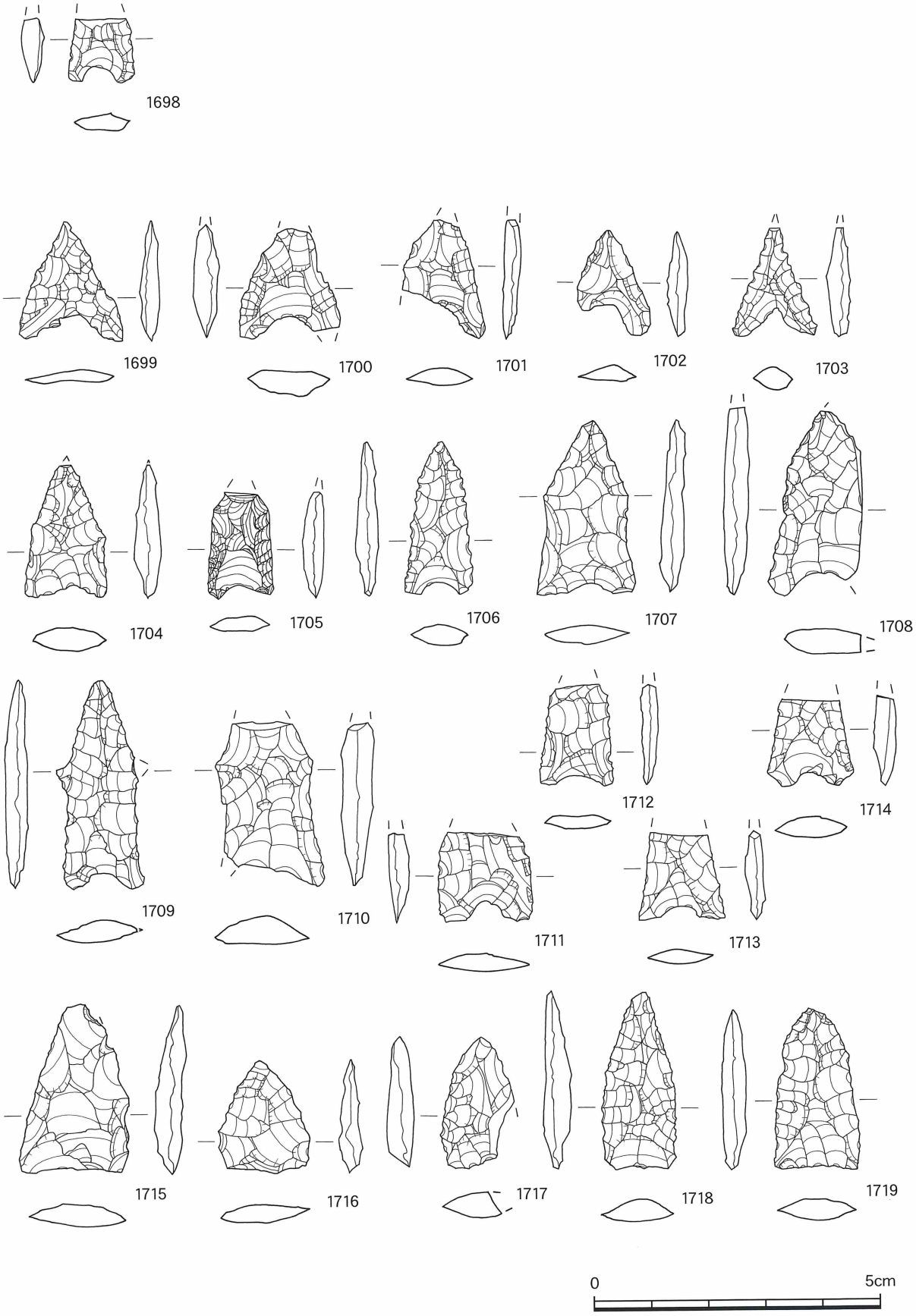
Ⅱ1層（第139図1672～1685、第141図1699～1719、第142図1720～1724、第143図1725、1726、第144図1727、1728、第146図1739～1757）

1672は、Ⅱ1a層の最上層から出土した弥生時代早期の刻目突帯文甕である。ここでは残存しないが、本来Ⅱ0層に含まれていたものと思われる。口縁下に断面三角形の突帯を付し、刻みを加える。

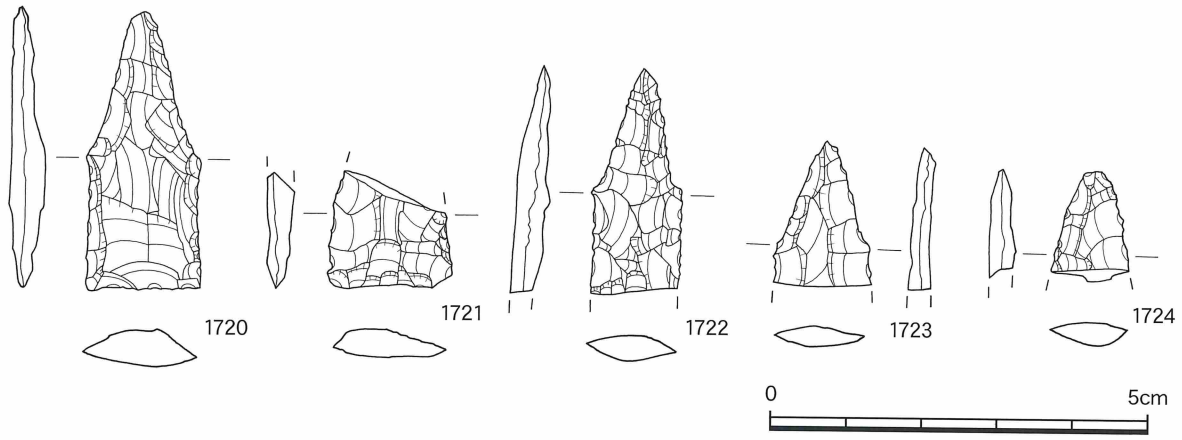
以下は、Ⅱ1a層からⅡ1b層にかけて連続的に堆積する中から出土したものである。1673は弥生時代早期の刻目突帯文甕である。外面口縁下に断面三角形の突帯を張り付け、刻みを施す。1674、1676～1678は、外面に沈線文がみられる縄文時代晩期の深鉢である。1674は口縁帯が大きく拡張したもので、外面に細線化した多条の沈線が間隔をあけて施される。沈線は横方向ではなく、斜方向である。坂口式よりも後出するものである。1676は口縁端部周辺の資料であるが、細線化した沈線が斜方向気味に施される。1674と同じように口縁帯は大きく拡張するものと思われ、同様な時期に比定できよう。1677は頚部から口縁帯にかけての資料である。体部から頚部が外方にくの字状に折れ、そのまま口縁帯がのびる。口縁帯は肥厚し、頚部で段がつく。口縁帯には細線化した沈線が間隔をあけて横方向に施文される。口縁帯が大きく拡張し、沈線が多条化するものであろう。1674と同様な時期に位置づけられる。1678は細線化がさらに進んだ沈線が縦方向に施文されている。器形的には口縁帯は拡張したものであろう。外面の沈線は端部からわずかに間隔をあけ垂下される。時期的には1674と同じあるいは後出する段階であろう。1675、1679～1682は内外面無文の深鉢で、条痕などがみられるものもある。1682は口縁端部周辺に強いヨコナデが施され、外面口縁下に段がつく。以上の無文土器は、後晩期に比定できよう。1683、1684は浅鉢である。1683は頚部から口縁部が立ち上がるもので、口縁部の低平化はみられない。外面に粘土紐接合時の段を利用し1条の沈線を施す。坂口式あるいはそれに後続する段階に位置づけられる。1684は体部から頚部にかけての資料である。体部は大きく張り稜をもつ、一端窄まり頚部が外反しながら立ち上がる。口縁部を欠くので時期比定が難しいが、坂口式あるいはそれに後続する段階に比定できよう。1685は深鉢の底部である。底面に粘土を足し厚底に仕上げている。時期的には上菅生B式併行期か。

石器のうち、1699～1724は石鏃である。26本のうち、1702、1715、1720、1723はサヌカイト製、1699は西北九州産黒曜石で、他は全て姫島産黒曜石製である。形態の分かるものの中で、三角形ないしは二等辺三角形を呈するのは1699～1703、1715、1716である。1699～1703は基部に抉りがみられるが、低い三角形状などの比較的浅い抉りである。1715、1716は基部に抉りがみられない。両者とも比較的大きな調整剥離のみであることから、未成品の可能性がある。1704～1714、1717～1723は五角形状を呈するものである。基部から両側縁が平行して直線的にのび、肩部から先端に向かい尖る。肩部はあまり明確でないもの（1706、1708、1718、1719）もあるが、肩部を強調するため小さな突起を付すもの（1704、1707、1709、1710、1720、1722）もみられる。1725は縦長の石匙である。サヌカイト製で、横長剥片を折ったものを素材としている。1726、1727もサヌカイト製のスクレイパーである。1728は敲石である。円礫を利用したもので、両端部に敲打痕が残る。

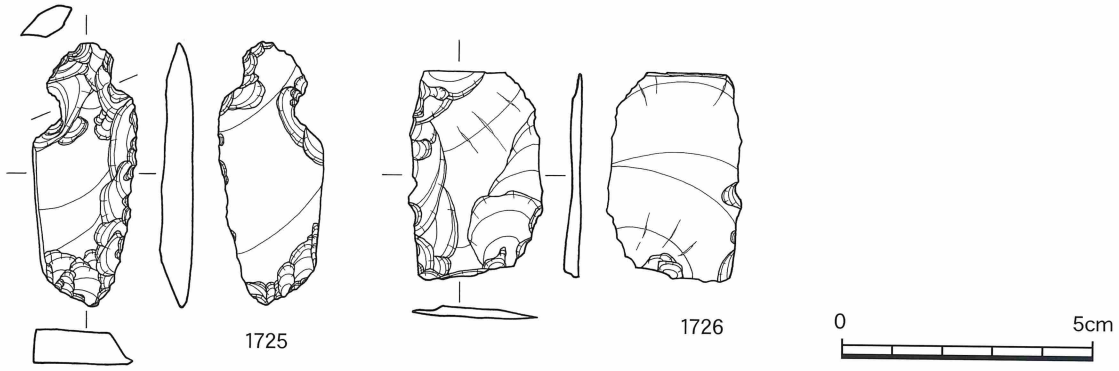
1739～1757は玉類である。全てC16区の掘削土を篩にかけた際に出土したものである。5cm単位で掘り下げており、Ⅱ1a層上面から10～30cm掘り下げた間の土から検出している（大部分は15～20cm）。よって、Ⅱ1層に伴うと判断した。1739～1742は勾玉である。このうち、1742は長さ0.5cmと非常に小形の製品である。



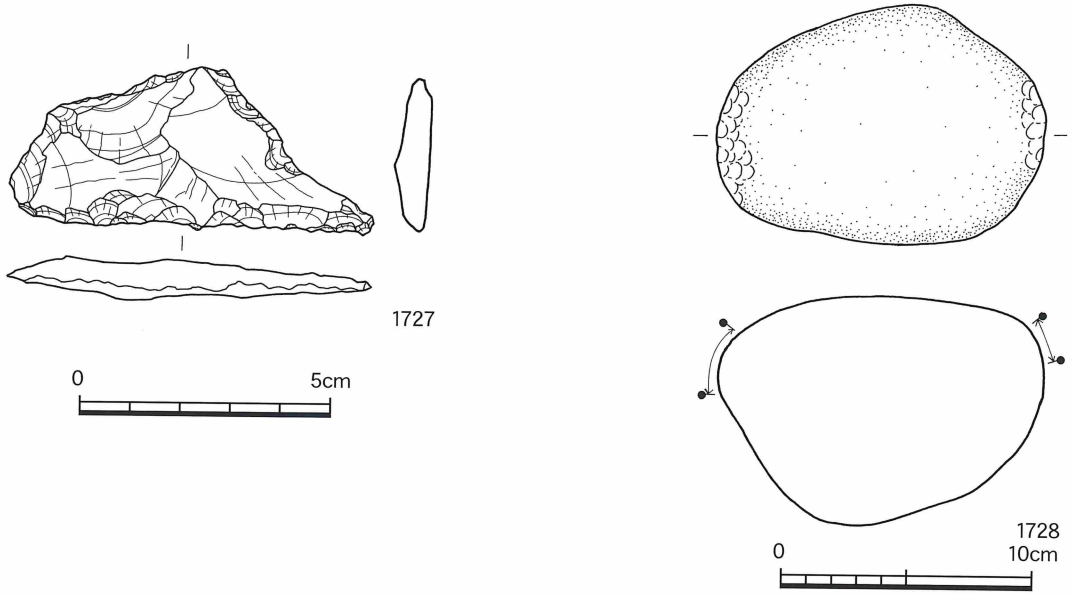
第141図　岩鼻岩陰遺跡16区出土石器1（S=1/1）



第142図　岩鼻岩陰遺跡16区出土石器2(S=1/1)

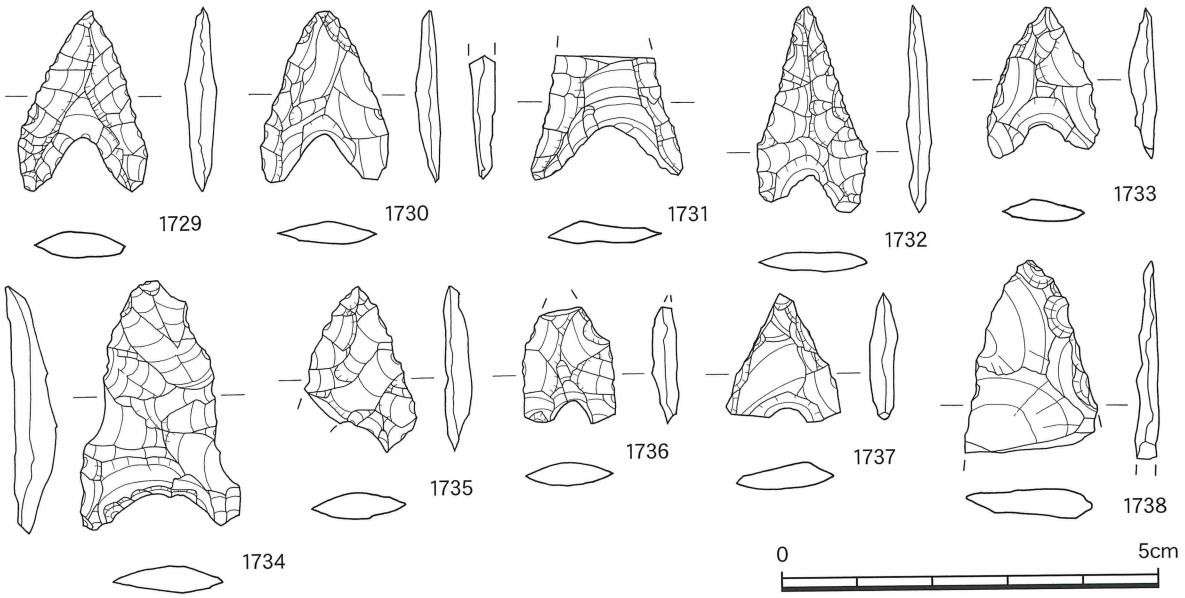


第143図　岩鼻岩陰遺跡16区出土石器3(S=2/3)

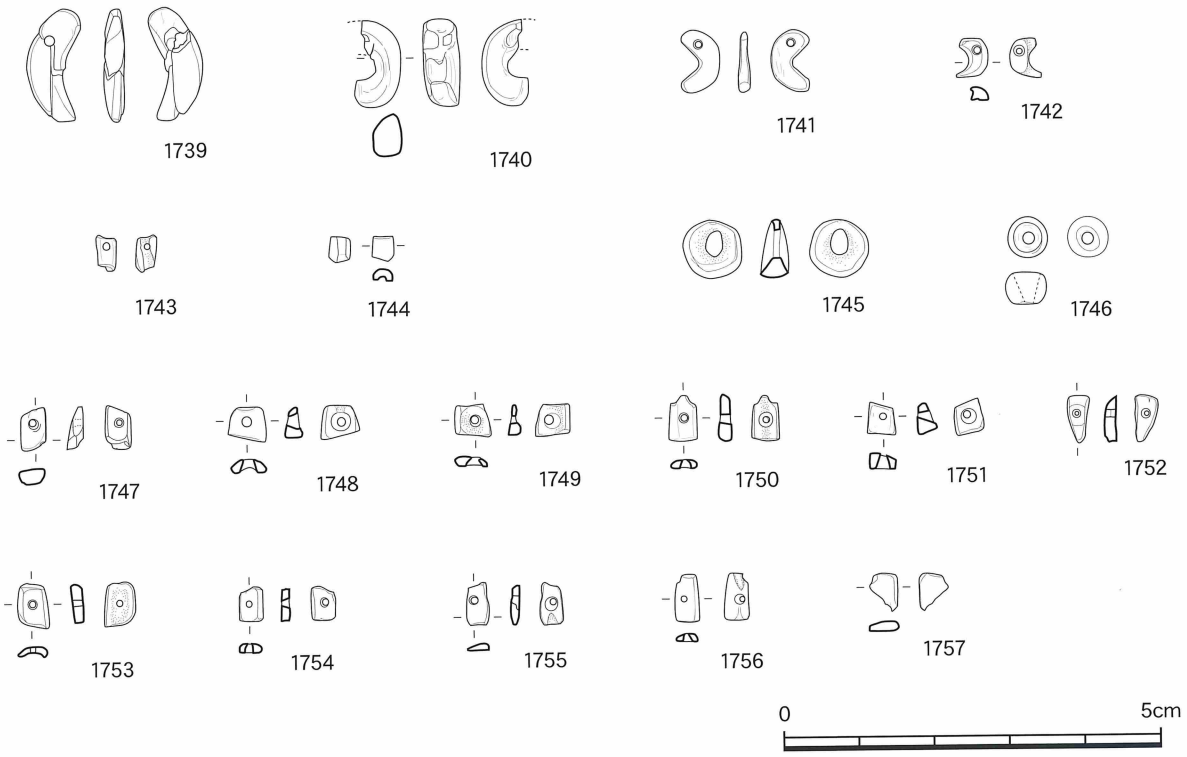


第144図　岩鼻岩陰遺跡16区出土石器4(S=2/3 , S=1/3)

1744は管玉を半截したものである。1745は小玉、1746は丸玉である。1743、1747～1756は略長方形や略方形を呈する垂飾である。管玉を半截したものや破片に、径0.1cmほどの孔を穿つ。偏平なものもあるが、断面が



第145図　岩鼻岩陰遺跡16区出土石器5(S=1/1)



第146図　岩鼻岩陰遺跡16区出土玉類(S=1/1)

弧状をなすものもある。1757は略方形を呈するものか。以上はC16区の同様な場所から出土しており、首飾り等として一括して使用されていた可能性が高い。土坑墓等の遺構の存在も考えられたため、精査したが確認することはできなかった。これらの詳細については、『第5章　付章　3 岩鼻岩陰遺跡出土の石製装身具の化学分析』を参照願いたい。

Ⅱ2層（第140図1686～1696、第145図1729～1738、）

1686、1687は縄文時代後期の西平式である。1686は深鉢の波頂部である。口縁部外面に2条の沈線と縄文が施文される。1687も深鉢の波頂部である。口縁部は、頸部から内湾気味に立ち上がる。外面に沈線3条と縄文が施文される。波頂部には刻みを施す。1688は深鉢で、口縁端部が上方に肥厚し、断面三角形を呈する。後期の三万田式か。1689は口縁部外面が肥厚し断面三角形を呈するものである。外面の肥厚部に刻みを連続的に加える。1690は深鉢の口縁部で、波頂部をもつ。外面文様帯に沈線と疑似縄文を施す。1689と1690は石町式である。1691は鐘崎式の口縁部である。口縁部などに退化傾向がみられる。1692、1693は内外面無文である。1694は口縁部に大きな刻みを連続的に施す。中期初頭の阿高系のものである。1695、1696は底部である。1695は上げ底が顕著である。

石器は1729～1738の石鏃である。10本のうち、1730、1733、1737、1738がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。以上のうち、1736は先端部を欠くが、五角形状を呈するものと思われる。両側縁が基部から平行して直線的にのび、肩部から先端に向かい尖る。基部の抉りはU字状の小さなものである。他は三角形あるいは二等辺三角形状を呈する。そのなかで、1732と1734は脚部周辺が強調されるもので、1735は両側縁が先端部近くで角度を変える。1729、1730は基部の抉りがやや深い。1731は低い三角形状の抉りが施される。1732～1735、1737は抉りが浅い。

Ⅳ層（第140図1697）

1697は波状口縁の波頂部である。外面に沈線が施され、口縁端部が内側に肥厚する。

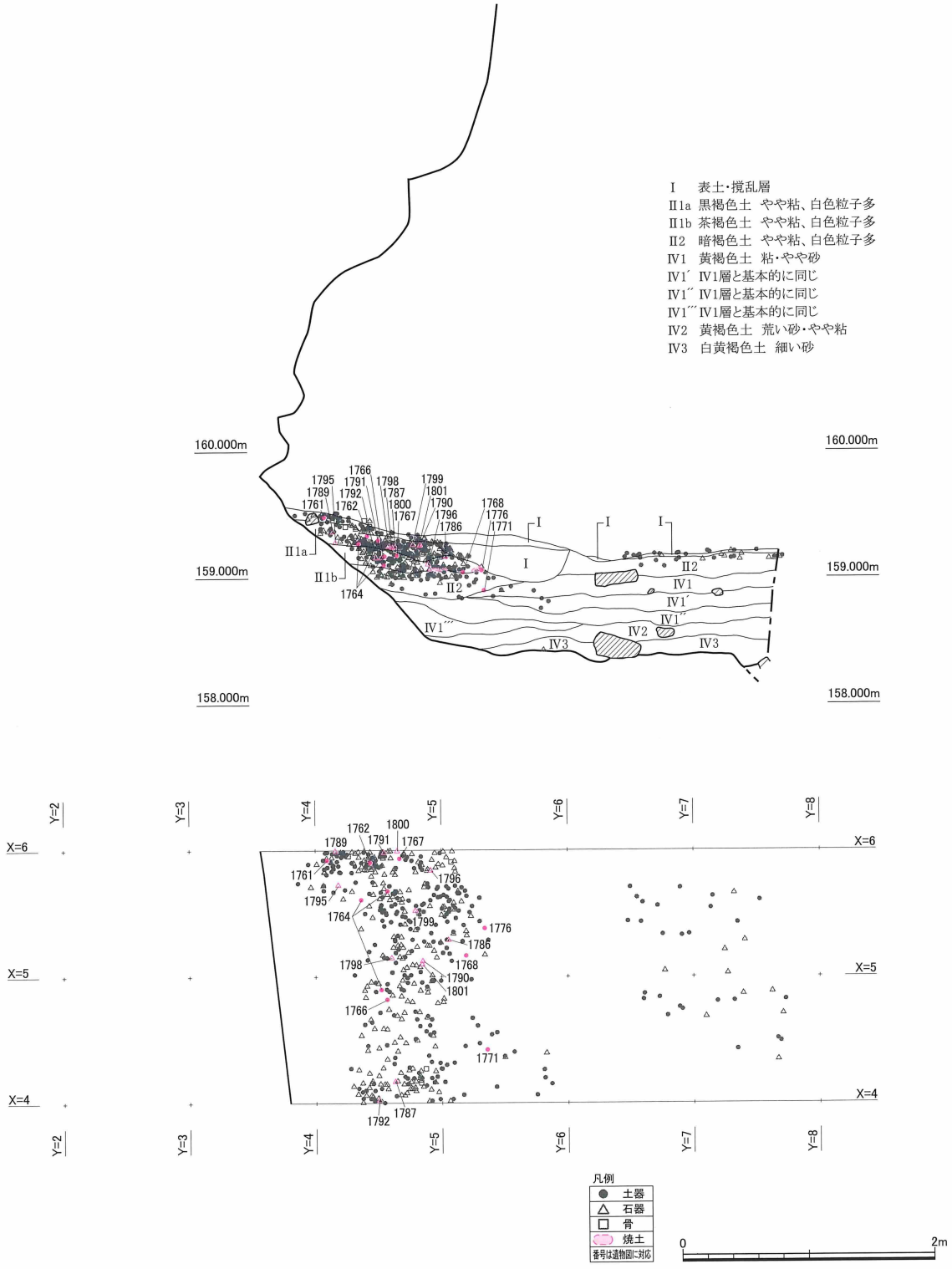
21　17区

(1)　土層と遺物出土状況（第147図）

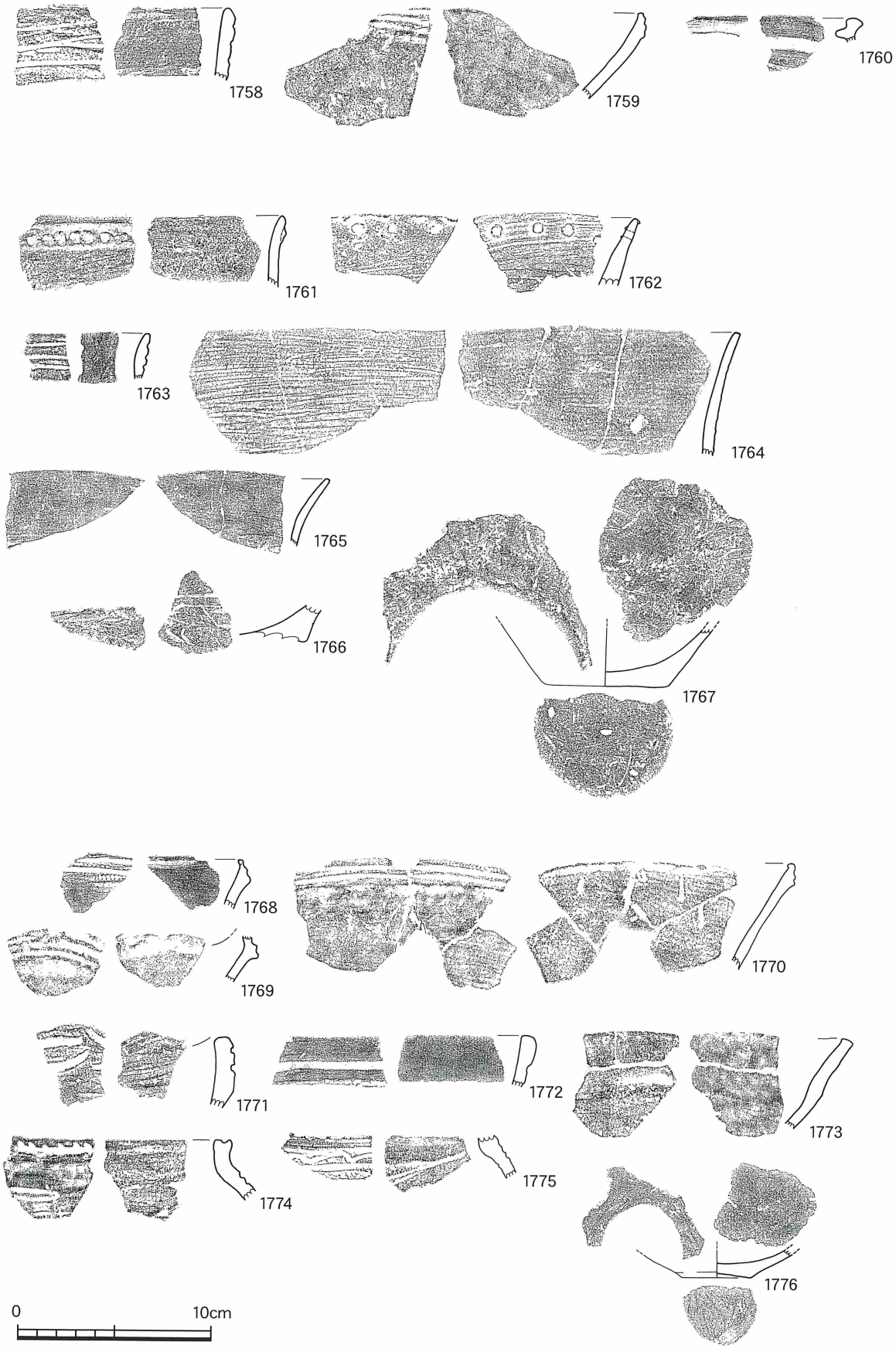
岩盤は奥壁から急角度で下り、奥壁から約1.3mで平坦面となる。平坦面は緩やかな凹凸をもち、川に向かいわずかに下りながら続く。平坦面は旧河道の底と考えられ、約2.5m続いたのち、調査区の東端で再び下がるため段がつく。平坦面上の旧河道の堆積土に相当する部分には、0.1～0.4mの礫が見られるが、その数は北側に隣接する16区以北に比べると少数である。標高は奥壁が159.8m、平坦面の奥壁側が158.5m、平坦面の東端が158.4mである。奥壁から上方については、凹凸を持ちながら斜方向に立ち上がり、その後奥壁から約3.3m上方で垂直気味に転じる。雨落ち線は奥壁から約2.0mである。雨落ち線が奥壁側に近づく状況は、北側の16区から始まるが、本区でも同様な状況が続く。遺物密集部分の大半は、雨落ち線の内側にある。

層位について述べる。Ⅰ層のうち表土層は、調査区全体に厚さ数～0.1mみられる。加えて、旧道路に伴う深さ0.3mの溝が掘りこまれる。水田関連土層は、調査区内においては存在しない。Ⅰ層の下にはⅡ1層で、弥生時代早期に比定できるⅡ0層は、確認することができない。Ⅱ1層は旧道路に伴う溝により切られており、これより東側では確認できない。本来はさらに東側まで続いていたと推定されるが、撹乱や削平などのため消滅している。Ⅱ1層はa層、b層の2層に分けられる。この状況は北側に隣接する16区と同様である。遺物はⅡ1a層とⅡ1b層にみられ、連続的に堆積する。遺物の密集度は高いが、16区に比べると量が明らかに減少している。晩期遺物の集中が顕著な12区～16区を晩期集中部①として捉えたが、本区がその南端に位置するものと思われる。なお、Ⅱ1b層下面において、面的な広がりをほとんどもたない小規模な焼土層を確認している。Ⅱ1層の下にはⅡ2層がある。Ⅱ2層は隣接する16区では2層に分層することができたが、本区では分層できない。Ⅱ2層は東まで続き、層厚は0.1～0.15mである。16区などでもみられたが、Ⅱ2層は岩陰部分から外方に上るように堆積する。Ⅱ2層下面での標高を比べると、最奥部で158.9m、東端で159.05mである。遺物の量はⅡ1層に比べると激減する。Ⅱ2層の下には、Ⅳ層の河川堆積土がみられる。これらは、奥壁に近いほど薄く、川に近い東側にいくにつれ層厚が厚くなる。また、堆積の過程で残された大小の礫が多数含まれる。下層ほど砂質が強く、上層になるほど粘質を帯びてくる。

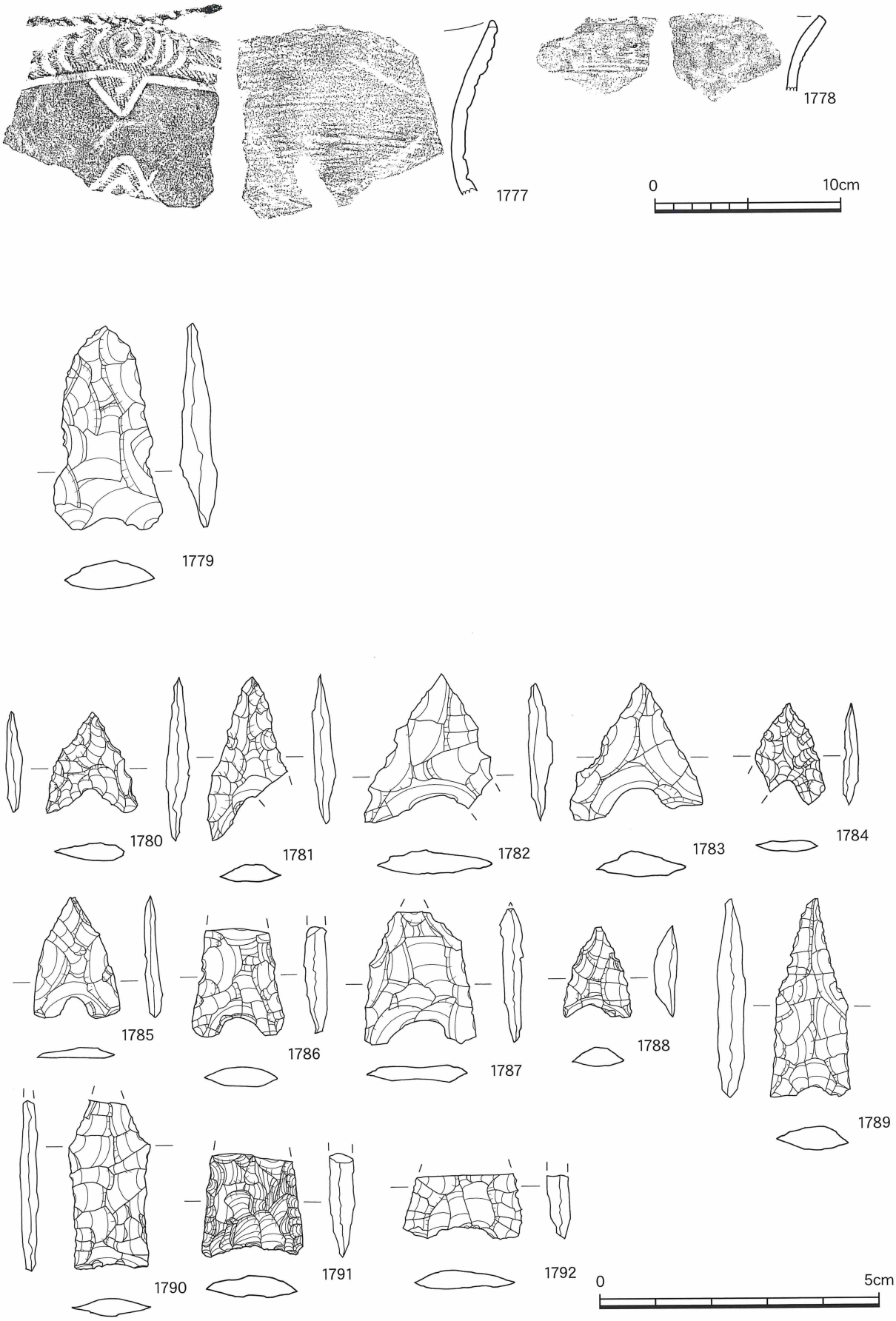
本調査区出土遺物の平面的な分布をみてみる。Ⅱ1層の遺物集中が顕著に認められるが、16区などと比べると



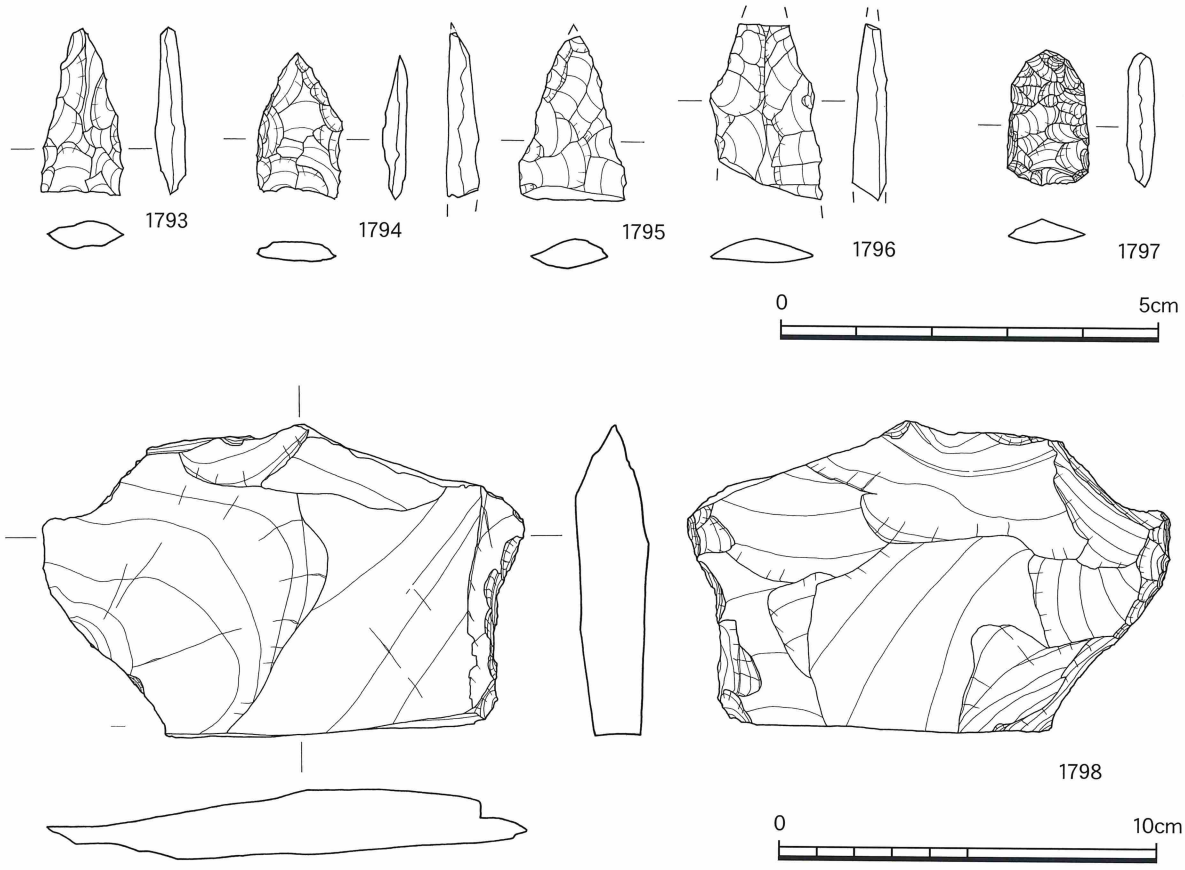
第147図　岩鼻岩陰遺跡17区平面図・土層図(S=1/50)



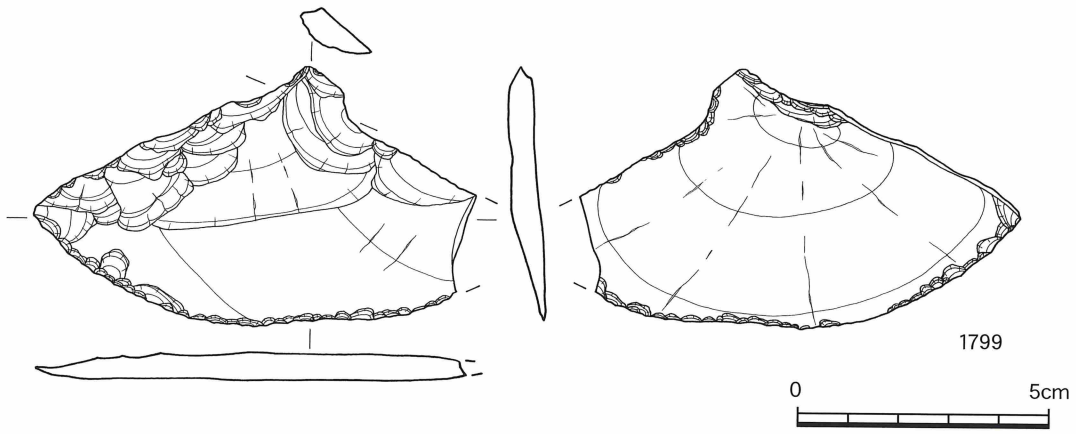
第148図　岩鼻岩陰遺跡17区出土縄文土器1(S=1/3)



第149図　岩鼻岩陰遺跡17区出土縄文土器2(S=1/3)、石器1(S=1/1)



第150図　岩鼻岩陰遺跡17区出土石器2(S=1/1，S=1/2)



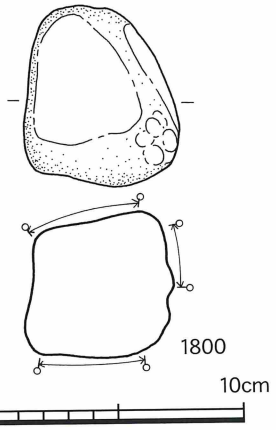
第151図　岩鼻岩陰遺跡17区出土石器3(S=2/3)

明らかに少ない。Ⅱ2層出土遺物はさらに少数で、雨落ち線の内側と外側に同じように分布する。

(2)　遺物

Ⅰ層（第148図1758～1760、第149図1779）

1758は縄文時代晩期の深鉢である。外面に細線化した沈線が間隔をあけて横走する。坂口式に後出する段階に比定できる。1759は浅鉢である。口縁部が上方に拡張し、外面に沈線3条が横走する文様帯を形成する。三万田式～御領式か。1760は晩期の浅鉢口縁部である。扁球形の体部から口縁部がやや外傾しながら立ち上がる。端部が肥厚する。上菅生B式併行期の所産である。

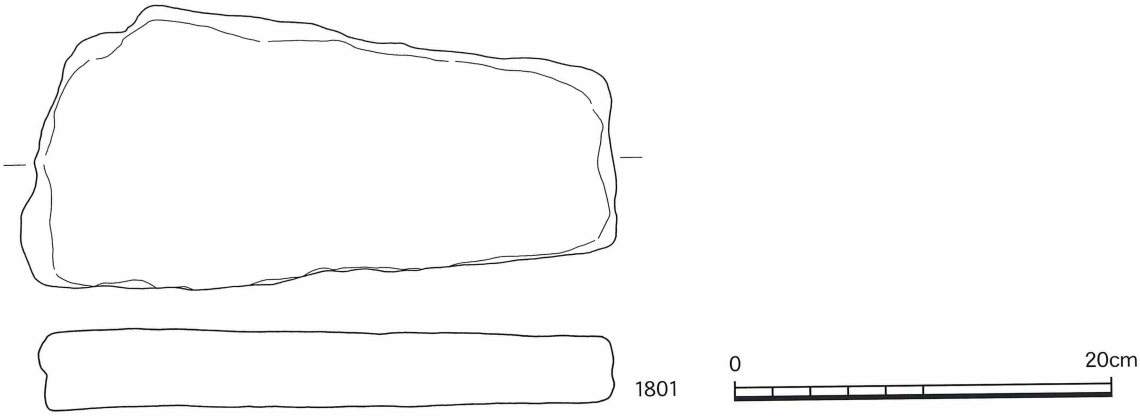


第152図　岩鼻岩陰遺跡17区出土石器4(S=1/3)

石器は1779のサヌカイト製石鏃である。基部は浅い抉りがあり、側縁下部に抉りをいれて脚部を強調する。側縁はそのまま先端部にいたらず、先端近くで角度を変え先端部にいたる。粗い調整剥離のみのため、未成品の可能性もある。

Ⅱ1層（第148図1761～1767、第149図1780～1792、第150図1793～1798、第151図1799、第152図1800、第153図1801）

1761、1762はⅡ1a層最上層から出土したもので、弥生時代早期に位置づけられる。1761は刻目突帯文甕で、口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、刻みを加える。1762は外傾する口縁部の深鉢で、内外面条痕調整である。口縁下に円形の穿孔が並ぶ孔列土器である。穿孔の間隔は1.5～2.0cmで、外側から内側に向け施されている。



第153図　岩鼻岩陰遺跡17区出土石器5(S=1/4)

1763は縄文時代晩期の深鉢である。外面に横走する沈線文が施される。坂口式あるいはそれに後続する段階のものである。1764、1765は内外面無文の土器である。1764は緩やかに外反し口縁部にいたる深鉢である。口縁端部は角張り、外面には横走の条痕が顕著に残る。内面は条痕の後にナデ調整である。縄文時代晩期のものか。1765は浅鉢である。口縁部が大きく外反するもので、無刻目突帯文出現直前か無刻目突帯文併行期に位置づけられよう。1766、1767は深鉢の底部である。両者とも平底で、底面と体部が同様な厚みである。晩期前半に比定できよう。

石器のうち、1780～1796は石鏃である。17本のうち、1782、1783、1785、1787、1793、1794はサヌカイト製、1784は西北九州産黒曜石製、他は姫島産黒曜石製である。形態の分かるものの中で、1780～1784、1788、1793は三角形状または二等辺三角形状を呈する。1780は側縁が先端に向かう途中で段がつき、五角形状に仕上げられる。基部の抉りは低い三角形状である。1781は全体が二等辺三角形状を呈するもので、側縁に段をつけ脚部を強調する。先端部は側縁が直線的に先端にいたるのではなく、先端部近くで角度を変える。基部の抉りはあまり深くない。1782～1784、1788は基部の抉りが浅い。1793は未成品の可能性を有するもので、基部は平基である。1785～1787、1789～1791、1794～1796は五角形状を呈するものである。基本的な形態は1789にみられるように、基部から両側縁が平行して直線的にのび、肩部から先端に向かい尖る。幅に比し長さの長いものが主体となるが、中には1787のように幅に比し長さの短い例もある。また、肩部が強調され、両方あるいは片方に小さな突起を作り出しているもの（1789、1790、1796）もみられる。基部の抉りは浅く、U字状あるいはわずかに凹むものなどがみられる。1797は姫島産黒曜石製の楔形石器と考えられる。両方に細かな

調整剥離が施されている。1798はサヌカイトの石核である。厚めの横長剥片に大小の調整を加え整形している。1799はサヌカイト製の石匙と思われる。横長の剥片を素材とし、わずかにつまみ部を作り出すとともに、刃部は細かな調整剥離により整えている。1800は磨石である。やや角ばった円礫を利用したもので、磨り面が3面に残る。1801は台石である。15.4×31.7cmの大きさであるが、厚さは4.3cmと比較的薄い。両面に平坦な面をもつが、敲打痕や磨り面として利用した痕跡は確認することはできない。

Ⅱ2層（第148図1768～1776）

1768は深鉢で、頸部から口縁部が内傾して立ち上がる。口縁部外面には2条の沈線と縄文が施される。後期の西平式である。1769は深鉢口縁部の波頂部近くの資料である。外面には沈線がみられる。西平式～三万田式である。1770は深鉢で、口縁部が頸部から直立する。外面に沈線2条と縄文が施される。西平式に比定できる。1771は深鉢口縁部である。外面が肥厚し口縁帯を形成している。口縁帯には疑似縄文と沈線文が施文されている。口縁端部は緩やかに隆起し、波頂部となる。石町式に位置づけられる。1772は外面に横走沈線がみられる。1793は浅鉢である。浅い体部が緩やかに稜をもち、外傾する頸部が直線的にのび口縁にいたる。1774は深鉢で、鐘崎式の系譜をひくものである。口縁部が短く立ち、体部外面に沈線文がみられる。口縁端部上面には沈線と刻みが施される。石町式古相に併行するものであろう。1775は体部資料である。外面には、縄文に加え横走沈線や波状沈線がみられる。西平式に比定できる。1776は底部である。凹み底を呈する平底で、縄文時代後期後半に位置づけられよう。

Ⅳ層（第149図1777、1778）

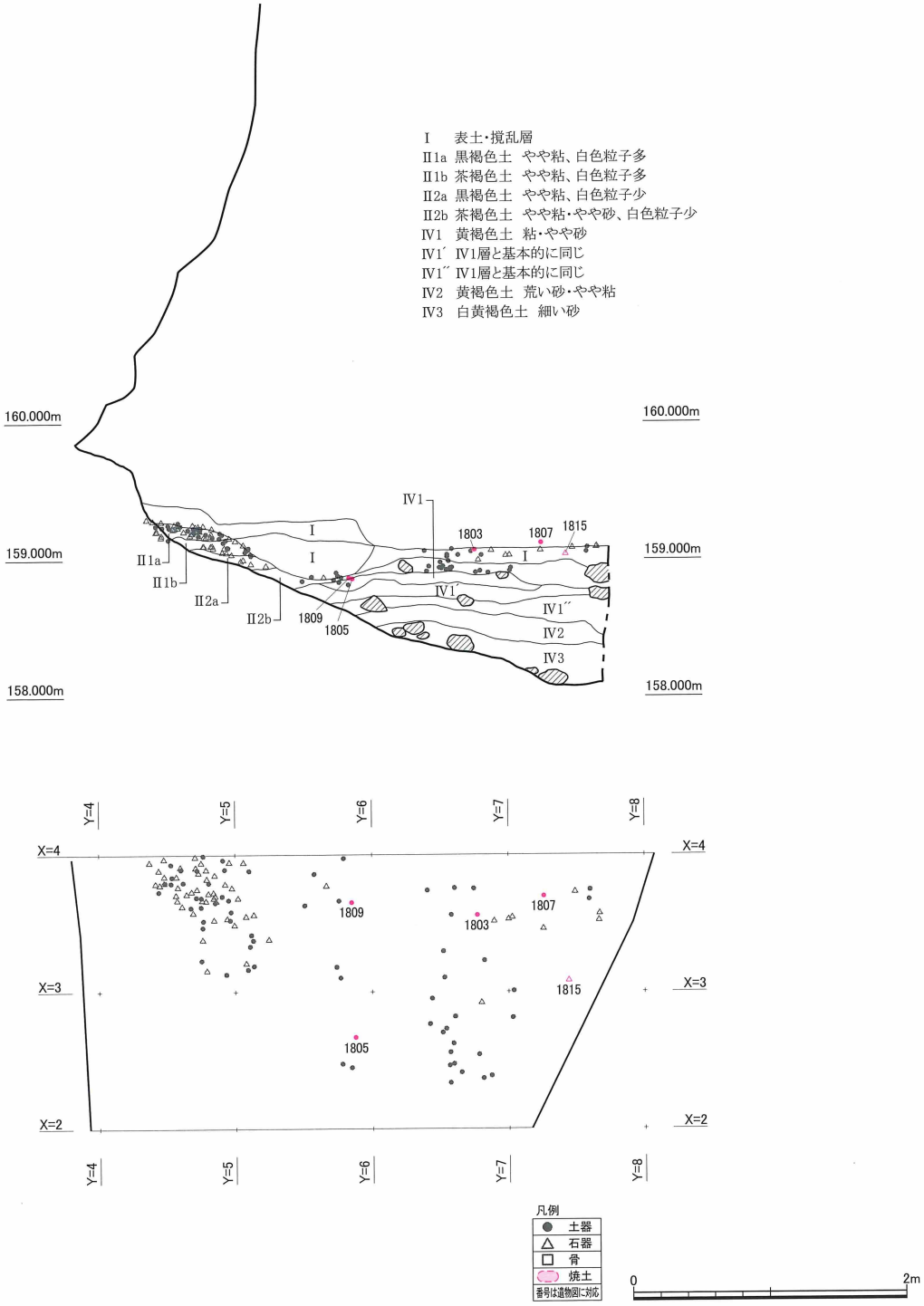
1777はⅣ層下層から出土したもので、ローリングは受けていない。鐘崎Ⅰ式（小池原上層式）に比定できる。口縁部外面は肥厚し文様帯を形成し、緩やかな波状口縁を呈する。口縁部文様帯には波頂部下の渦巻き文を中心に縄文と沈線による文様が展開する。頸部は無文であるが、波頂部下は、沈線と縄文による三角形をモチーフとした文様が上下から施文される。1778は内外面無文の深鉢である。

22　18区

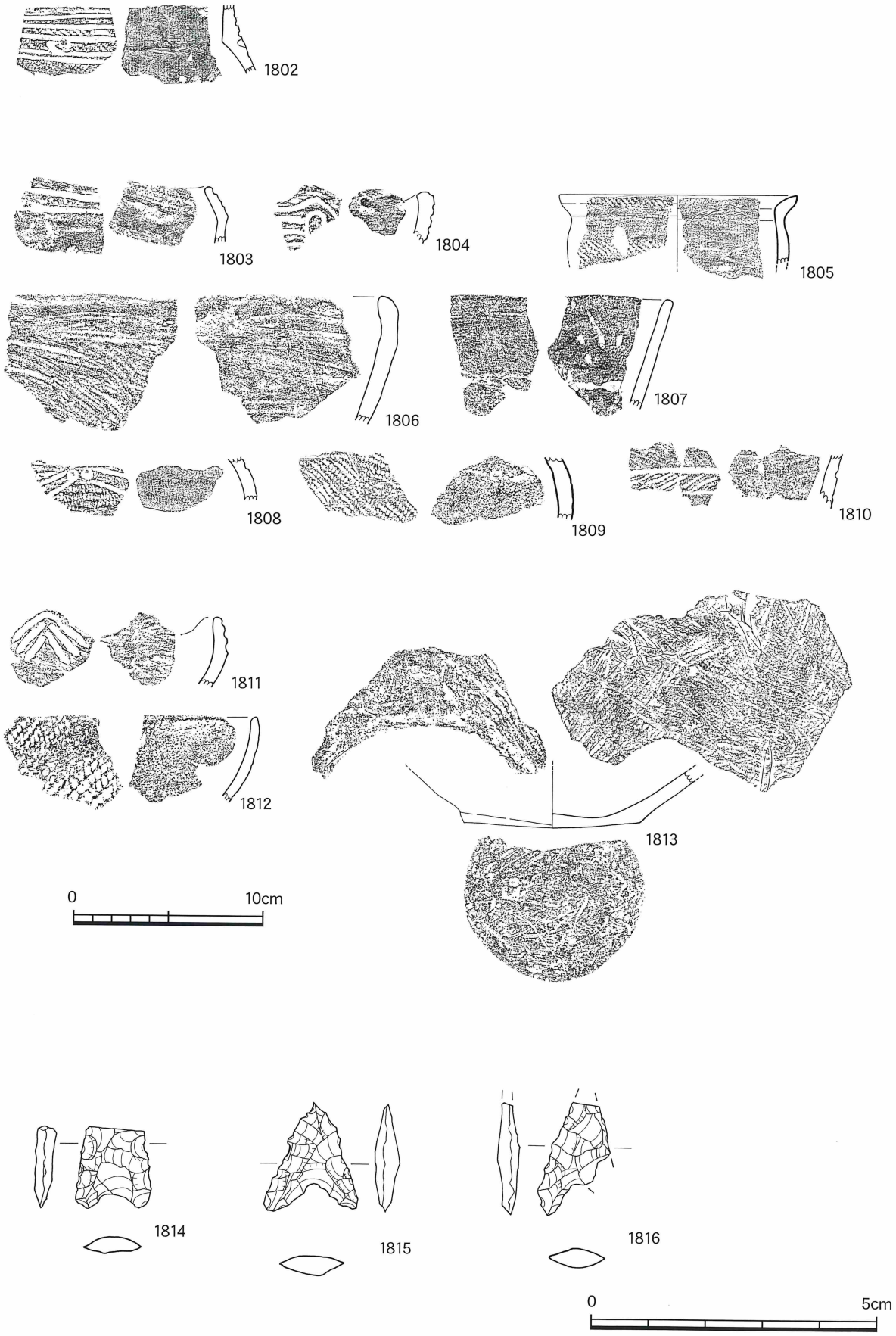
(1)　土層と遺物出土状況（第154図）

岩盤は奥壁から緩やかに傾斜したのち、急角度で下る。傾斜面は凹凸を持ちながら続き、奥壁から約3.5mで平坦面となる。平坦面は旧河道の底と考えられる。平坦面上から旧河道の堆積土に相当する部分には、0.1～0.2mの礫が見られるが、その数は16区以北に比べると量が減り小礫ばかりになる。標高は奥壁が159.85m、平坦面が158.1mである。奥壁から上方については、凹凸を持ちながら斜方向に立ち上がり、その後奥壁から約2.4m上方で垂直気味に転じる。雨落ち線は奥壁から約1.5mである。雨落ち線が奥壁側に近づく状況は、北側の16区から始まるが、本区ではその傾向がさらに強まる。遺物密集部分の大半は、雨落ち線の内側にある。

次に、層位について述べる。表土層のⅠ層は、調査区の西側半分のみにみられ、層厚は0.1～0.2mである。加えて、旧道路に伴う深さ0.3mの溝が掘りこまれる。水田関連土層は、みられない。Ⅰ層下はⅡ1層で、弥生時代早期のⅡ0層は確認することができない。Ⅱ1層は旧道路に伴う溝により切られ、これより東側にはのびない。本来はさらに東側まで続いていたと推定されるが、撹乱や削平などのため消滅している。Ⅱ1層はa層、b層、c層の3層に分けられる。北側に隣接する17区が2層に分層できたのとは異なる。各層はいずれも0.1mの層厚である。遺物は3層にわたりみられるが、Ⅱ1a層とⅡ1b層に多い傾向がある。遺物の量は、隣接する17区よりもさらに減少している。焼土や台石等も出土していない。Ⅱ1層の下にはⅡ2層があり、2層に分層することができる。上層のⅡ2a層は全体でみることができるが、下層のⅡ2b層は奥までのびない。層厚はⅡ2a層が0.05～0.15m、Ⅱ2b層が数～0.2mである。Ⅱ2層は岩陰部分から外方に上るように堆積しており、その状況は16区や17区と同じである。Ⅱ2層下には河川堆積層であるⅣ層がみられる。Ⅳ層中には礫が含まれ、下層ほど砂質が強くなる。



第154図　岩鼻岩陰遺跡18区平面図・土層図（S=1/50）



第155図　岩鼻岩陰遺跡18区出土縄文土器(S=1/3)、石器(S=1/1)

本調査区の遺物分布をみると、Ⅱ1層では北半分にのみみられ、小片ばかりであった。雨落ち線も奥壁に近づき、生活空間としては利用しにくい状況にあるのが原因と考えられる。これに対しⅡ2層では、奥壁に近い部分では分布がみられず、外方に散発的ながら広がる。

(2) 遺物

Ⅰ層（第155図1802）

1802は頸部から胴部にかけての資料である。外面には沈線と縄文による文様がある。内面は頸部立ち上がり部に稜がつく。縄文後期西平式である。

Ⅱ1層（第155図1814）

1814は姫島産黒曜石製の石鏃である。上半部を欠くが、五角形状の形態を呈するものと考えられる。

Ⅱ2層（第155図1803～1810、1815）

1803は口縁部が頸部から内方にくの字状に折れる。外面には2条の沈線がみられる。後期三万田式の深鉢であろう。1804は口縁部の波頂部である。やや内湾気味で、外面に沈線による文様がみられる。文様は波頂部下の円文を中心に展開する。石町式古相である。1805は小型品で、口縁部が短く外方に折れる。口縁端部は尖り気味であるが、外面に縄文が施文される。胴部は、頸部下が無文で下半部に縄文を施す。石町式である。1806は内外面無文の深鉢である。口縁部が緩やかに内湾する。石町式古相か。1807も無文土器である。1808は胴部資料である。疑似縄文地に沈線文と竹管状の刺突が施される。石町式に比定できる。1809も胴部資料で、外面に縄文が施される。石町式か。1810は外面に横走沈線が2条みられ、その間に斜方向の短沈線が連続する。三万田式か。

石器は1815の石鏃で姫島産黒曜石製である。三角形状の形態を呈し、基部には低い三角形状の抉りがある。

Ⅳ層（第155図1811～1813、1816）

1811は内湾する口縁の波頂部である。外面に沈線による文様がみられる。1812は内湾気味の口縁で、外面に粗い縄文が施される。縄文時代中期の所産と思われる。1813は深鉢の底部で平底を呈する。内外面とも条痕調整である。

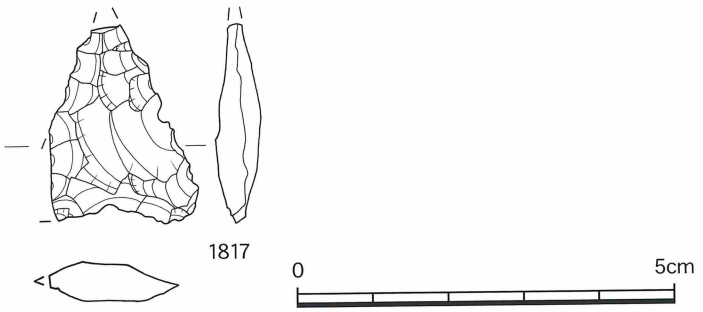
1816は姫島産黒曜石製の石鏃である。先端部と脚部の一部を欠損するが、二等辺三角形状を呈する。

23　19区

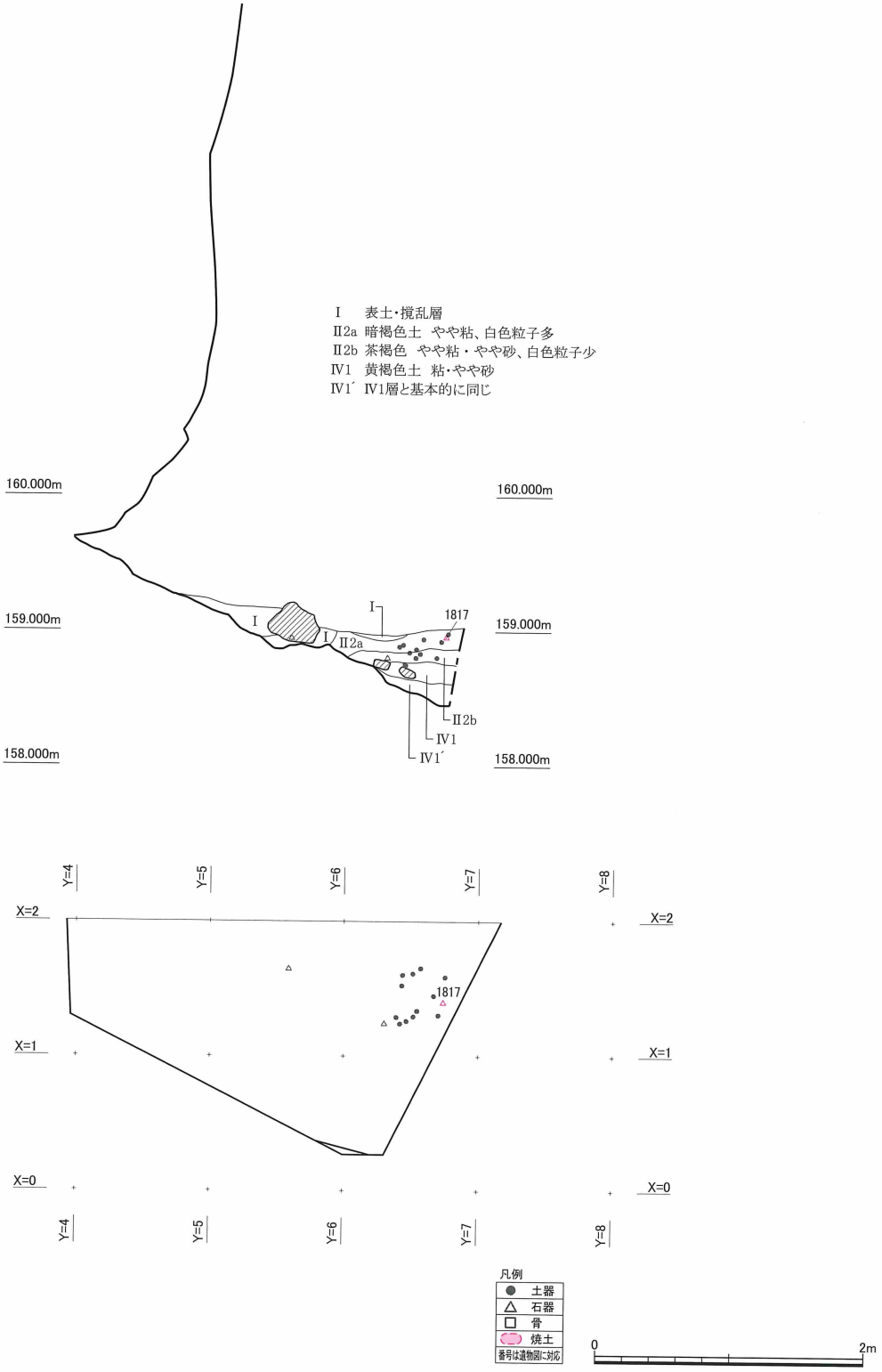
(1) 土層と遺物出土状況（第157図）

岩陰の南端にあたる。岩盤は奥壁から急傾斜で下る。調査区の関係から平坦面まで達していない。上方は、奥壁から腹を突き出すような状況で壁が立ち上がる。そのため、奥壁近くでは十分な空間がとれず、日常的な生活には適さない。その後岩壁は奥壁から約1.5mの高さで垂直に転じ、そのまま立ち上がる。標高は奥壁が159.7mである。また、雨落ち線は奥壁から1m余りと奥壁に近くなる。岩陰は19区で東面する岩体がほぼ終わる。

層位について説明する。奥壁に近い部分は表土や攪乱などのⅠ層のみで、岩盤まで達する。大形の礫などを含み、層厚は最大0.3mを測る。Ⅰ層下には本来Ⅱ0層、Ⅱ1層が存在するが、本調査区では攪乱などのため残存



第156図　岩鼻岩陰遺跡19区出土石器（S=1/1）



第157図　岩鼻岩陰遺跡19区平面図・土層図（S=1/50）

しない。Ⅱ2層については、調査区東半に残る。本来はさらに奥壁側まで伸びていたと思われるが、攪乱などにより切られている。Ⅱ2層は隣接する18区と同じように、a層とb層の2層に分層できる。Ⅱ2層下には河川堆積層であるⅣ層がみられる。

遺物は調査区全体としても非常に少ない。Ⅱ2層から10点ほどの遺物が出土したのみである。

(2) 遺物

Ⅱ2層（第156図1817）

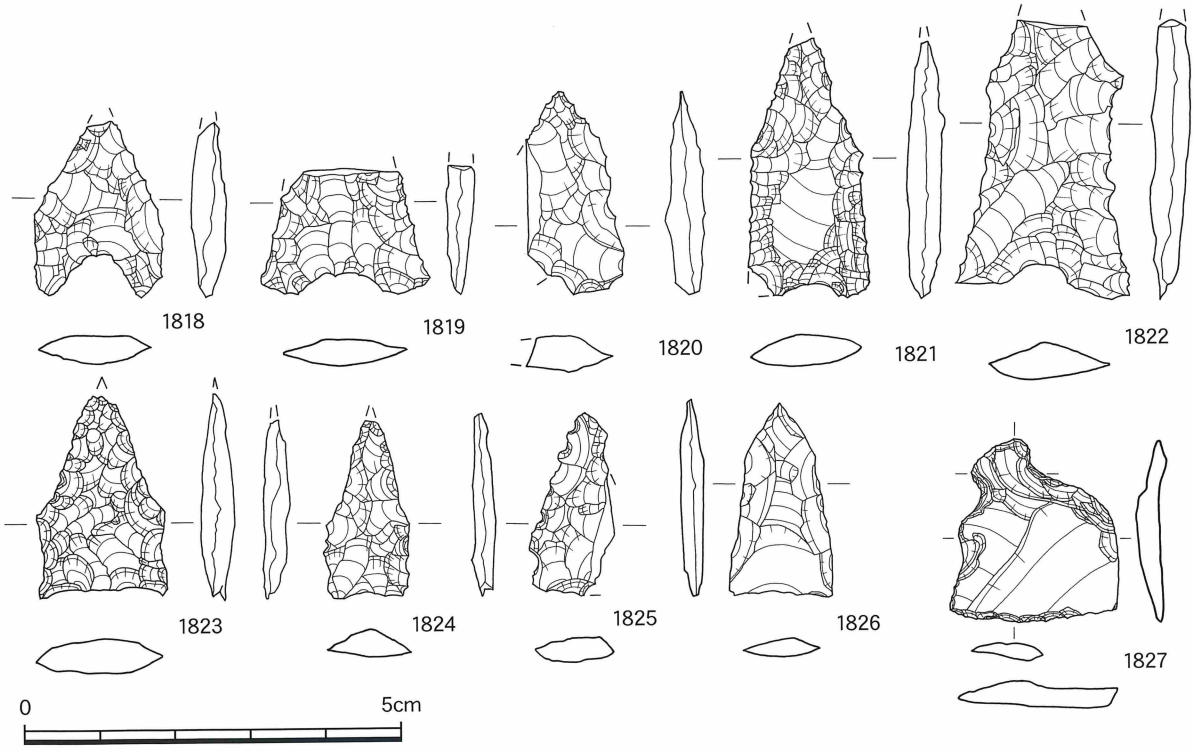
1817は姫島産黒曜石製の石鏃である。先端部等を一部欠くが、二等辺三角形状を呈する。

24　その他の遺物

表採や中世以降の遺構出土資料（第158図1818～1827）を紹介する。

いずれも石器で、1818～1826は石鏃である。1826がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。1825を除き、他は五角形状を呈するものである。1818は他に比べ基部の抉りがやや深い。そのため、脚部が強調された感がある。両側縁が直線的にのびた後に先端に向かい尖るが、肩部はそれほど明瞭ではない。1821などに比べると、五角形状を呈する中でも定型化されていない印象を受ける。1819は基部の資料である。浅いU字状の抉りが施される。基部形態から、1821のような五角形状を呈するものと思われる。1820は粗い作りで、未成品の可能性もある。側縁が直線的にのび肩部から先端に向かい尖る形態であるが、肩部がかなり上方にある。1821は浅いU字状の抉りをもち、両側縁が平行して直線的にのびる。1822も同様な形態であるが、肩部が強調され小さな突起が作り出される。1823は幅に比し長さが短いものである。基部はわずかに凹む程度である。肩部は外方にわずかに突起し強調されている。1824はやや雑な作りである。長さに比し肩部がやや下位にある。1825は平基で二等辺三角形状を呈する。粗い作りであるため、未成品の可能性もある。1826も平基である。両側縁はやや内傾気味にのび、比較的上位に肩部をもつ。以上のうち1818は縄文時代後期に遡る可能性を有するが、他は晩期に位置づけられよう。

1827はサヌカイト製の石匙である。薄い横長剥片を折り取り方形に近い状態にし、それを素材にしている。つまみ部を作り出すとともに、反対側に最小限の細かな調整剥離を施し刃部としている。

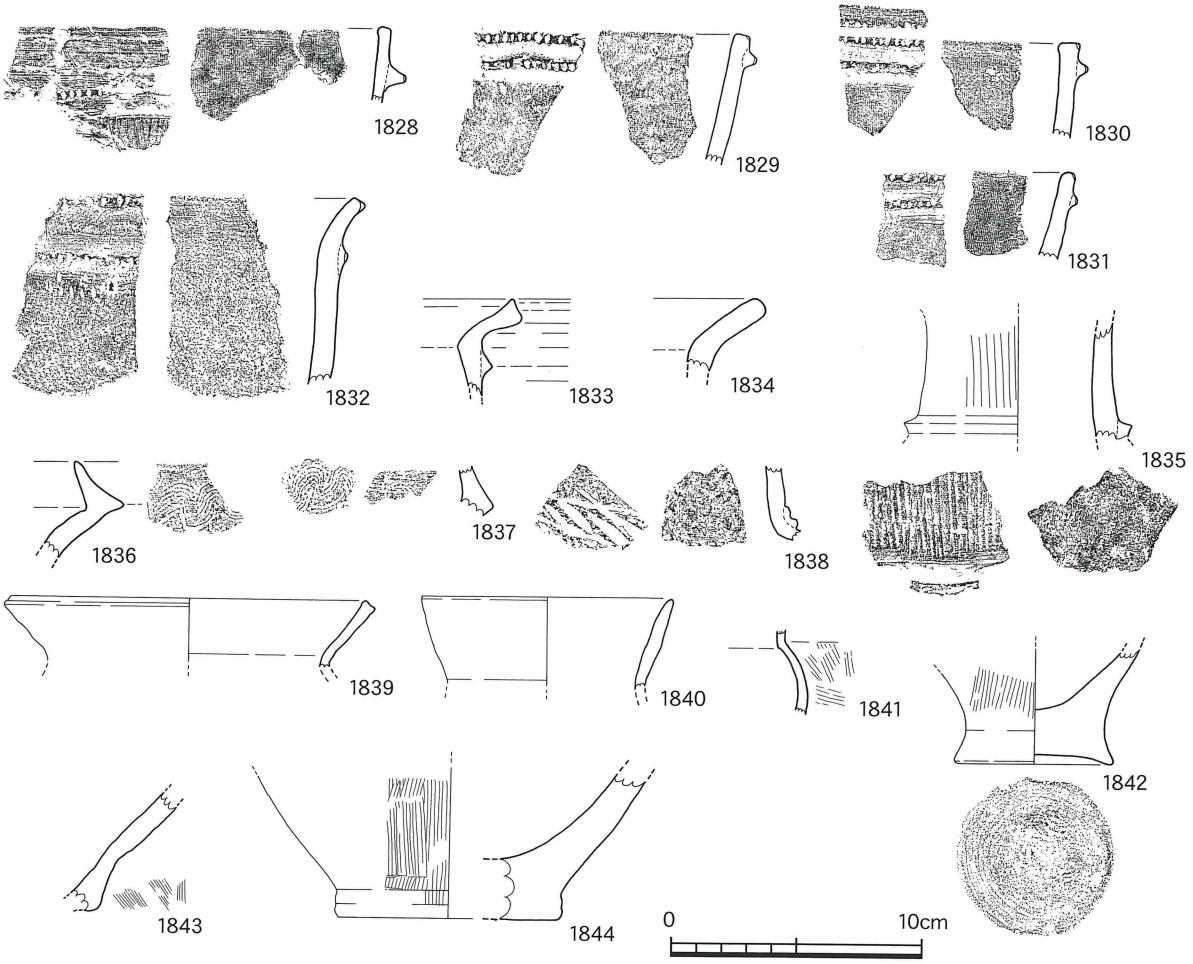


第158図　岩鼻岩陰遺跡出土その他の石器（S=1/1）

第５節　弥生・古墳時代の遺構・遺物

弥生・古墳時代の遺構は確認されていないが、表土層等から遺物が出土している。しかし、その出土状況は岩陰内において散発的にみられるのみで、有意なまとまりは確認することができなかった。また、量的にも少数である。以下では、出土遺物（第159図1828～1844）を紹介する。

1828～1832は弥生時代中期の下城式甕である。1828は口縁部が直立するもので、口縁下に断面三角形の刻目突帯を貼り付ける。1829～1831は外面口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、突帯と口縁端部外面に刻みを施す。1828に比べると突帯の位置が上位にある。1832は口縁部が緩やかに外反するもので、口縁下にやや低い断面三角形の突帯を付し、口縁端部外面と突帯に刻みを加える。突帯の位置は、1829や1830に比べるとやや下がっている。1833は弥生時代中期後半の甕である。口縁部はくの字状に折れ、口縁端部が上方に肥厚する。頸部直下に断面三角形の突帯を付す。1834も中期の甕と思われ、口縁部が外方に折れる。口縁端部は丸味をもつ。1835は小型の複合口縁壺の頸部と考えられる。頸部下に断面三角形の突帯を貼り付けている。弥生時代後期後半の所産か。1836、1837は安国寺式の複合口縁壺の口縁部で、口縁はあまり長くのびない。外面に櫛描波状文が描かれている。弥生時代後期後半か。1838は安国寺式の複合口縁壺頸部で、頸部下にヘラ状工具による刻みが施されたベルト状の突帯が付される。弥生時代後期後半～終末に比定されよう。1839は古墳時代前期の甕で、比較的薄い作りである。1840は小型壺の口縁部、1841は小型丸底壺の体部と考えられ、両者とも古墳時代前期に比定できる。1842～1844は底部資料である。1842は甕で、厚底を呈する。弥生時代中期後半に位置づけられる。1843、1844は平底を呈するものである。1844は底面がやや厚い。両者とも弥生時代中期から後期前半に位置づけられるものである。



第159図　岩鼻岩陰遺跡弥生・古墳時代土器（S=1/3）

第６節　中世の遺構・遺物

中世の遺構は、土坑を1基（SK002）確認した。遺物についてもSK002から出土したのみで、包含層はもとより、表土層などからも全く出土していない。

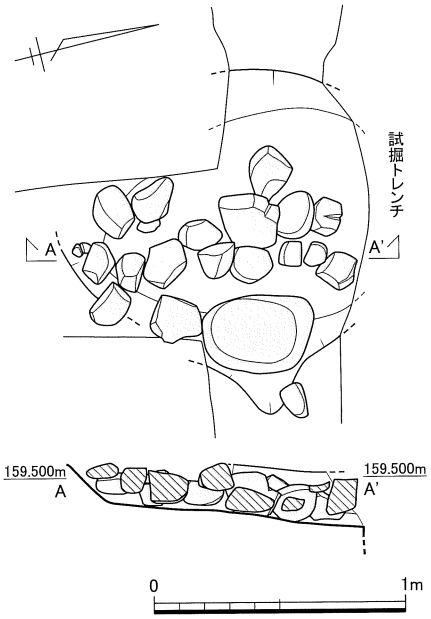
SK002（第160図）

SK002は14区から15区にかけて位置する。南北に長軸を持つものであるが、北側を試掘トレンチ1により、南西部と南東部をB15区の掘り下げに伴い各々失っている。規模は南北1.25m以上、東西1.2mの楕円形を呈するものと思われる。深さは0.2mである。土坑の底面は比較的平坦である。土坑内からは0.1～0.2mの礫とともに、瓦器椀や土師質土器が出土した。完形品や完形近くまで接合したものもある。岩陰内に他の遺構や遺物が全くみられないことから、日常の生活遺跡ではない可能性が高い。本遺構は埋納遺構の可能性もある。

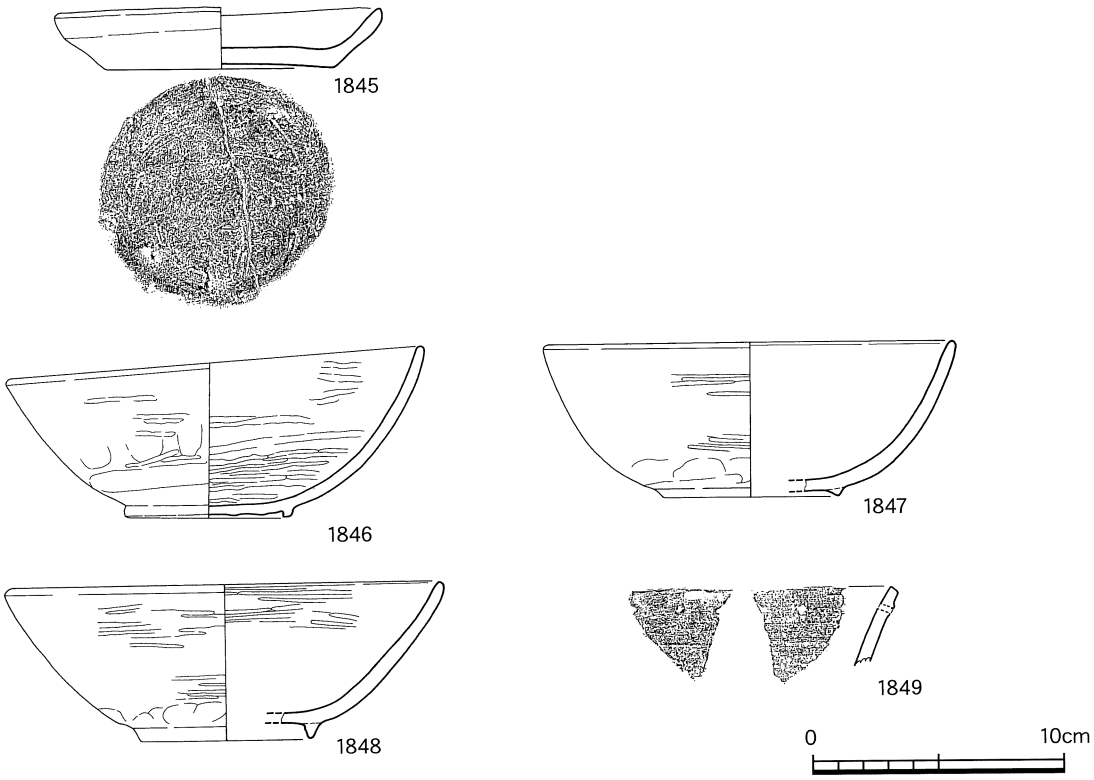
出土遺物（第161図1845～1849）は土師質土器と瓦器椀がある。

1845は土師質土器坏で口径13cmである。1846～1848は瓦器椀である。口径は16.5～18.5cmである。高台は1848がやや高いが、全体として低くなっている。体部内外面にはヘラ磨きが施されており、外面についても指オサエは高台近くのみに限られ、やや間隔のあいたヘラ磨きが外面全体にみられる。1849は混入品で、口縁下に穿孔が3ヶ所確認できる。弥生時代早期のものである。

本土坑は出土遺物から、13世紀前葉に比定できる。



第160図　岩鼻岩陰遺跡SK002（S=1/30）



第161図　岩鼻岩陰遺跡SK002出土土器（S=1/3）